

袋井市駅前第二地区土地区画整理事業
に伴う発掘調査報告書 2

平成12年度

掛之上遺跡Ⅶ

－ 本文編 －

2001

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所建設経済部区画整理課

平成12年度

掛之上遺跡Ⅶ

－ 本文編 －

2001

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所建設経済部区画整理課

例 言

1. 本書は、平成12年度に袋井市教育委員会と袋井市役所建設経済部区画整理課が実施した、^{かけのうえ}掛之上遺跡の第7次発掘調査報告書本文編である。なお、袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書は、平成11年度分報告書1冊がすでに刊行されているため、本報告書の副題を、『袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2』とし今後整理をはかりたい。
2. 今回の調査地区の西側隣接地において、昭和49年に実施した袋井駅前地区土地区画整理事業に伴う掛之上遺跡第1次発掘調査分の資料について、本調査地点の状況を考えるうえで極めて重要であることから、参考資料として併せて掲載した。
3. 本発掘調査は袋井市教育委員会松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
4. 本調査に係る事務については、袋井市役所建設経済部区画整理課駅前推進係が行った。特に、駅前推進係の金原基弘、兼岡正利、松井純二、渡邊規恵の各氏には、現場と事務に関して円滑な調整をして頂いた。ここに記して感謝いたします。
5. 本書の編集と執筆は松井が行った。
6. 本書に使用した遺構の実測図は、株式会社フジヤマが行った写測図を使用したものであるが、土層断面図や遺物出土詳細図等は松井が作成した。なお、方位については第7次発掘調査分は国土座標の真北を使用しているが、第1次発掘調査分については磁北（当地域は国土座標真北に対して西へ約 $6^{\circ}10'$ 傾く）をそのまま使用した。
7. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
8. 本書作成のため以下の機関・方々から資料の提供やご協力を賜わった。(敬称略)
飯塚晴夫 加藤理文 柴田 稔 山本恵一 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 方形周溝墓研究会の方々

※表紙 調査区全景合成写真（上が南）

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	2
第3章 掛之上遺跡と周辺遺跡の様相	3
第4章 遺 構	4
1. 竪穴住居	4
2. 掘立柱建物	4
3. 土坑	5
4. 柵列	5
5. 溝	6
6. 柱穴	6
第5章 遺 物	25
1. 弥生時代～古墳時代初頭の遺物	25
2. 古墳時代の遺物	26
3. 奈良時代以降及びその他の遺物	26
第6章 第1次発掘調査の遺構と遺物	42
1. はじめに	43
2. 遺構	43
3. 遺物	46
第7章 まとめ	65

插图目次

第1图	調査位置図	7
第2图	第7次調査土層図	8
第3图	第7次調査全体図	9・10
第4图	S B 1・8・S D 2 実測図	11
第5图	S B 2・3 実測図	12
第6图	S B 4・7 実測図	13
第7图	S B 5・6 実測図	14
第8图	S H 1～3 実測図	15
第9图	S H 4～6 S X 1・2 実測図	16
第10图	S K 1～5 実測図	17
第11图	S K 6～10・12 実測図	18
第12图	S K 13・15・17・21 実測図	19
第13图	S K 18～20・23 実測図	20
第14图	S K 22・25～27 実測図	21
第15图	S K 28・32・33 実測図	22
第16图	S K 34・35・37 実測図	23
第17图	近世 S K 1・S A 1・S A 1-P 1・S P 584・113 実測図	24
第18图	土器実測図1	27
第19图	土器実測図2	28
第20图	土器実測図3	29
第21图	土器実測図4	30
第22图	土器実測図5	31
第23图	土器実測図6	32
第24图	土器実測図7	33
第25图	土器実測図8	34
第26图	土器実測図9	35
第27图	土器実測図10	36
第28图	土器実測図11	37
第29图	土器実測図12	38
第30图	土器実測図13	39
第31图	金属製品・石製品実測図1	40
第32图	金属製品・石製品実測図2	41
第33图	第1次調査全体図	47・48
第34图	1号・2号方形周溝墓実測図	49
第35图	3号・4号・12号・13号方形周溝墓実測図	50
第36图	5号方形周溝墓実測図	51
第37图	6号・7号・11号方形周溝墓実測図	52

第38図	8号方形周溝墓実測図	53
第39図	9号・10号方形周溝墓実測図	54
第40図	1号・2号・5号方形周溝墓主体部・3号方形周溝墓壺棺実測図	55
第41図	S B 1 ~ 4 実測図	56
第42図	S B 5 ・焼土坑実測図	57
第43図	S H 1 ~ 3 実測図	58
第44図	S H 4 ・ 5 実測図	59
第45図	狐塚古墳実測図	60
第46図	1 ~ 7号中世墓実測図	61
第47図	土器実測図 1	62
第48図	土器実測図 2	63
第49図	土器実測図 3 ・石製品実測図 1	64
第50図	第 1 ・ 7 次調査遺構変遷図 1	66
第51図	第 1 ・ 7 次調査遺構変遷図 2	68

写真図版目次

図版 1	遺物写真 (1)	第 7 次調査出土
図版 2	遺物写真 (2)	第 7 次・第 1 次調査出土
図版 3	遺物写真 (3)	第 7 次調査出土

掛之上遺跡第7次発掘調査報告書

第1章 調査に至る経過

袋井市高尾地内に所在する掛之上遺跡は、昭和49年7月～12月に「中遠広域都市計画事業袋井駅前地区土地区画整理事業並びに中遠広域都市計画道路の建設」に関連して、掛之上地区に所在していた周知の埋蔵文化財である狐塚古墳が発掘調査の対象となり、狐塚古墳発掘調査委員会が組織され、川井正一氏（当時袋井市教育委員会）を担当者として調査を実施したのが第1次発掘調査となった。

第1次発掘調査の後、昭和57年に個人住宅建築（第2次発掘調査）、昭和63年に袋井駅前地区土地区画整理事業に伴う道路部分（第3次発掘調査）、平成9年に原野谷川護岸改修工事（第4次発掘調査）が実施された。第2次と第3次発掘調査については袋井市教育委員会、第4次発掘調査は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

今回の掛之上遺跡第7次発掘調査は「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」に伴う発掘調査であり、関連の発掘調査はまず平成9年5月16日～5月21日に永井義博氏（袋井市教育委員会）を担当により試掘調査が実施された。この時の試掘調査は、市街化が進んだ掛之上地内のなかで、非常に制約のある試掘調査となった。しかしながら、承諾のえられた建物がない畑地や空地などの場所を対象に何とか26箇所の試掘グリッドを設定し、遺跡の範囲確認を行ったところ、概ね掛之上地内のほとんどに埋蔵文化財が存在することが判明した。

この試掘調査の結果から本調査に取り掛かるため、平成11年5月6日付で袋井市長豊田舜次名（袋井市役所区画整理課）で文化庁長官宛てに「埋蔵文化財発掘の通知について」（文化財保護法57条の3の規定）が提出された。これを受けて平成11年6月8日付の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（教文第2-51号）の通知が、静岡県教育委員会教育長杉田豊名で袋井市長宛て送付され、区画整理事業着手前の発掘調査が正式に指示された。

「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」に伴う本調査は、第1回目として平成11年度に永井義博氏を担当者として、遠州中央農業協同組合袋井南支店の移転に伴う建物建設予定地で実施された（第5次発掘調査）。ところが、平成12年度になると正式な建物建設の設計内容が明らかになり設計内容の変更や周辺地下工事が当初の範囲より予想以上広くなることが判明し、追加の発掘調査の必要が生じた。当面緊急性のない立体駐車場部分の発掘調査は後日の協議とし、農協建物本体の変更部分と周辺の地下工事で埋蔵文化財が破壊される部分の発掘調査が実施された（第6次発掘調査）。

「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」の発掘調査については、主に都市計画・区画道路と宅地造成部分が調査の対象となることが明らかとなった。道路分については、歩道がつく客員幅17mの幹線道路と、歩道部分のない客員幅6mの区画道路に別れる。今回の第7次発掘調査は、前者の幅17mの幹線道路で小野田柳原線道路建設に伴うものである。発掘調査の対象基準は平成12年度から新基準が静岡県教育委員会より示されており、それによると道路の本線部分は発掘調査の対象となるが歩道部分については埋蔵文化財の破壊が予想されない場合は発掘調査の対象とはしていない。しかしながら、今回の小野田柳原線道路の歩道部分については、配水溝や上・下水道管等のライフラインの敷設が決まっていること、路面の削平が遺構確認面まで到達することから埋蔵文化財の大部分が破壊されることが予想されるため、歩道部分も含めて発掘調査を実施することにした。今後、幹線道路の歩道部分はライフラインの敷設等の将来的な地下利用の方法も考慮したうえで慎重に対応していきたい。

第2章 調査の経過

今回の発掘調査は現在利用されている道路の通行をどうするかが重要な検討課題となった。効率的な発掘調査を行うこと、またその後の道路工事を効率良く行うためには、事前の準備を進めたうえで、現道路をできるだけ短い期間通行止にして行うことが最善と考えられた。まず、5月から実際にどのくらい調査の範囲が必要となるかの検討を行い、部分的な調査と準備を7～9月までに事前に進め、本格的な調査は10月から行うことにした。

道路敷地の調査であるため、排土置場を調査区外に確保することができないこと、隣接地に存在する中部電力変電所の器具搬入口を常時確保するために、東・西半分に調査区をわけて発掘作業を進めることにした。

西半分の地区は、ほとんど現道路敷下となり道路の整地作業のため、包含層の残存状況が良くなかった。よって表土の除去は、重機にて遺構確認面まで掘削することができた。遺構は竪穴住居2棟、掘立柱建物6棟、柵列1が検出できたが、遺構数は然程時間のかかる量ではなく、西区は順調に10月下旬頃までに調査を終了することができた。古墳時代後期の柵列の発見は、大門大塚古墳とその居館跡を考えるうえで貴重な発見となった。10月末には写真測量と写真撮影作業を終了した。その後、東半分の地区の調査を進める前に、西区を掘削整地工事を実施し、必要な道路工事を一部行う必要があることから、11月上旬については一次的に発掘調査が中断することになった。

東半分の調査は中断期間の後、11月中旬より再開した。東区のうち現道路部分については西区同様に水道管の埋設や道路の整地工事のため包含層の残存状況が悪かったが、それ以外の部分のほとんどは畑地部分下の調査であったため、たいへん包含層の残りは良かった。よって、現道路部分は重機にて遺構確認面まで表土の掘削をすることにしたが、畑地部分下については表土の除去に留め、包含層は人力にて掘下げを行いできるだけ遺物の採集に努めた。包含層中の遺物は毎日整理用ケース1～2箱が出土するほど、多量なものであった。遺物の主体は弥生時代後期の土器と古墳時代後期の土器であった。しかし、少量ではあるが、鎌倉～戦国期の陶磁器類も含まれていた。包含層の掘削は12月までかかったが、平行して遺構の調査も進めたところ、弥生時代中～後期を主体とする竪穴住居や800基近い柱穴群、土坑群が多量に検出されるとともに、古墳時代後期の竪穴住居なども見つかり、かなりの時間を費やすものとなった。

またさらに悪いことに西区は排土置場が狭く、排土は場外搬出になったため調査効率が問題となったが、関係者のご協力もありなんとか年も明けた1月下旬にはほぼ発掘調査の終了する見込がたってきた。ところが予想外に2月に入ると天候が悪く、写真測量の行える日がたびたび延期となり、写真測量作業が完了できたのは2月下旬になっていた。

その後も、電柱の移転工事に伴いその下の調査を3月上旬に行うなど予想外の作業が加わるなどしたため、資料整理と報告書の作成時間が取れないこと、また道路工事の期間も困難な状況となった。しかしながら、関係者の驚異的なご努力でなんとか道路工事も終わり、現地発掘作業と平行して内業の整理作業も進めてきたため、本報告書の作成もできうる限りの内容でなんとかまとめ刊行することができた。このように第7次発掘調査は道路工事と平行し調査を進めなければならなかったため、悪天候や予想外の工程等により日程的に困難な状況が続いたものになってしまった。今後は発掘調査の期間ばかりでなく、工事の工程など関係者と今以上に十分な協議を必要とすることが痛感された発掘調査であった。

第3章 掛之上遺跡と周辺遺跡の様相

掛之上遺跡は過去7回の調査の状況で、縄紋時代～中・近世に至る歴代の袋井市有数の遺跡であることが判明してきている。縄紋時代については今のところ、1・2・5・6次調査で縄紋時代中期を中心になると思われる、土器や石器が出土している。また、隣接の大門遺跡2次調査地点からも同時期となる土器・石器が出土している。何れの遺跡からも、遺物の散布は広範囲になるが、遺物の出土量は少なく、明確な遺構もないことから、当地域の中期における中心集落と考えられている豊沢地区の長者平遺跡の臨時居住的に利用された集落と考えられる。

弥生時代中期になると、遺構数が格段に増加してくる。1～3・5・6次調査地点で中期中～後葉の方形周溝墓群が見られ、同時期の大門遺跡を含めると非常に広大な遺跡の広がりを見せる。現段階では掛之上遺跡で方形周溝墓の検出例が多く、大門遺跡では竪穴住居跡の検出がなされているため、掛之上遺跡が墓域、大門遺跡が居住域となる可能性がある。ただし、大門遺跡の墓域としては、谷（笠西池）をはさんで南側の丘陵に展開する総数100基近い中期中～後葉の方形周溝墓群が検出された団子塚遺跡の状況も見逃せない。また、第7次調査で明らかになったように、掛之上遺跡内でも中期の居住域が存在する可能性がでてきている。

弥生時代後期ではさらに飛躍的に遺構の数が増大し、1・6次調査地点で方形周溝墓が、2・3・6・7次調査地点で住居跡や土坑が検出され、掛之上遺跡内では墓域と居住域が比較的隣接して位置することが判明してきた。ただし、同じ後期の団子塚遺跡では居住域からやや離れた高尾向山Ⅱ遺跡で方形周溝墓が発見され、当地域では墓域と居住域の位置関係は一樣ではないことが理解される。

古墳時代前期の遺構の様子はわからないが、掛之上遺跡の何れの調査地点及び大門遺跡でも古式土師器が出土することから、広範囲にわたる遺構の存在が予想される。しかしながら、弥生時代後期に比べると土器出土量は希薄になるため、古墳時代前期には集落の一時的衰退があったようである。

再び遺物の出土量が増してくるのは、古墳時代後期になってからのことである。5世紀後半の古式須恵器が出土したのは1・4・7次調査地点で、遺跡の北西部分地域に5世紀後半代の集落が成立するようである。その後、6世紀代に入ると掛之上遺跡の全調査地点で遺構が発見され、土器も出土することから、掛之上遺跡全域に集落域が拡大するようである。また、7世紀代の土器は大門遺跡でも出土している。なかでも今回の7次調査地点と1次調査地点の成果を見ると、6世紀前半に成立する大門大塚古墳と同時期と考えられる柵列に囲まれた居住域が復元できた。この居住域は掘立柱建物のみからなり豪族居館の可能性が指摘しうる。（第7章参照）6世紀後半代になると、総数100基を数える有力な後期群集墳である長者平古墳群、中規模の横穴群である地藏ヶ谷横穴群などが掛之上遺跡の周辺に成立することから、その造営集落は掛之上あるいは大門遺跡と考えられている。

奈良時代に入ると3・5・6次調査地点で大型の掘立柱建物が発見されている。なかでも5・6次調査地点で発見されたL字型に配置された総柱の掘立柱建物は、郡衙正倉規模を充たすもので、この地域に郡衙が成立していた可能性がでてきた。3次調査地点で検出された掘立柱建物は、狭い範囲で建物の全体規模は判明しないものの、柱穴の掘方を見るかぎり郡庁の一部の建物と見ても良いものである。掛之上遺跡における奈良時代の遺物出土量はさほど多いものではないが、遺構については目を見張るものがある。また、大門遺跡でも大型の総柱掘立柱建物や奈良時代遺物も出土していることから、大門遺跡にも郡衙遺構が広がっていた可能性が考えられる。郡名を特定できる資料の出土はないが、立地条件から見て山名郡衙の可能性も指摘できようか。

第4章 遺 構

1. 竪穴住居 (S B)

竪穴住居は弥生時代中～後期のもの (S B 4 b・5～8) と古墳時代後期のもの (S B 1～3・4 a) が検出された。ほかにも S K 6 や S K 22 の付近で、竪穴住居の壁溝らしいものの一部が見出されたが、明確な支柱穴や炉跡等を伴わないため竪穴住居と認定することができなかった。また、竪穴住居のほとんどすべては、床面が包含層と地山面の境に営まれ、あまり地山面を深く掘り込まない状況から、本調査区東半分に検出された多数の柱穴群の中に竪穴住居の柱穴が含まれている可能性は充分考えられる。

弥生時代の竪穴住居の平面形は隅丸方形を呈すると思われる S B 4 b・5・8 と、長楕円形を呈する S B 6・7 に分けられる。何れも住居の全体が検出されていないため、正確な平面形態と建物規模は分からない。

楕円形になる S B 6・7 はともに建て替えが認められ、S B 6 の建て替えは8回にも上るものである。当地域の弥生時代竪穴住居の平面形の変遷 (松井一明 1992) によると、前者の隅丸方形は後期後半、後者の長楕円形は中期後葉～後期前半にかけて良く見られる形態である。S B 6 が唯一時期の決定できる土器が出土しているものの、埋土中より中期後葉～後期の土器が混在し明確な時期は押さえられない。しかしながら、おそらく他の住居とは異なり埋土や支柱穴に中期後葉の土器が一定量含まれているので、中期後葉に遡る可能性が高い住居と考えられる。S B 6・7 は支柱穴4本柱で、S B 6 では中央が少し窪んだ地床炉跡2箇所も確認された。炉の位置はやや北よりとなることから、南に入口が想定される。他の竪穴住居は全体の形状が分からないため、どのような柱配置になるかは不明である。炉跡も残念ながら明確なものは検出されないので入口の位置も推定不可能である。

古墳時代の竪穴住居はやや幅広の壁溝?をもつ S B 1・2 と、細い壁溝をもつ S B 3、壁溝の検出できなかった S B 4 a の4棟が確認できた。S B 4 a は恐らく S B 3 と同じ方形の竪穴住居になるとされる。該当時期は何れも壁溝のみが確認された住居ばかりで、出土土器から明確な時期は確定できないが、S B 1 の壁溝やそれに伴うと思われる S D 2 出土の土師器から見ると、坂尻 I-3～4 式段階 (陶邑 T K 43～209 段階 松井一明 1995) に該当すると考えられる。

当地域の古墳時代後期の竪穴住居で通常見られるかまどは、残念ながらその位置が想定されるほとんどの竪穴住居の北側が調査区外になるため、確認できなかった。唯一全体の形状が確認できた S B 3 でも、床面の残存状況が悪くかまどの検出はなされなかった。柱配置はいずれも4本の支柱穴をもつものと考えられる。建物規模は S B 4 が1辺11mを測る大形建物であるが、他の竪穴住居は5～6mを測る一般的規模のものである。貯蔵穴と思われるものは S B 1 と2で確認できた。何れも南側の壁溝?中に確認でき、S B 2 のものはこぶし大の自然礫が底面より出土している。

さて、S B 1・2 の壁溝は、当地域で知られている古墳時代後期の竪穴住居のものとは幅広であることから、かなり異質なものと考えられる。あるいは両住居とも竪穴住居とはならず、建物回りに排水溝を伴う平地式建物になる可能性も考えられる。また、溝内よりいくつか小柱穴も検出できたが、支柱穴が溝内部に存在するので、滋賀県穴太遺跡などで確認されている渡来系の大壁構造建物にはならないだろう (林博通 1997)。

2. 掘立柱建物 (S H)

掘立柱建物は比較的柱穴がまばらに検出できた調査区西半分から、S H 1～6 の6棟を発見するこ

とができた。多数の柱穴群が検出できた調査区東半分については、現地でかなり検討してみたものの自信をもって掘立柱建物として報告できる柱穴の組み合わせを提示しえなかった。しかしながら、たとえば古墳時代後期の遺物を出土する柱穴を抽出すると、まとまる傾向があるため弥生時代後期、古墳時代後期の何棟かの掘立柱建物は存在していたと推測される。

建物型式は何れも梁間1間の建物であるが、比較的桁行きに対して梁行きの間口の法量が広いSH6と狭いSH1～4に別れる。建物型式から見ると前者は弥生時代後期、後者は古墳時代後期に該当するものと考えたい(松井一明 1995)。柱穴から出土する土器からは細片が多く、特に詳細な時期は特定できなかったが、SH1～5を構成する柱穴からは、古墳時代後期の土師器破片が出土したのに対して、SH6を構成する柱穴から須恵器・土師器の破片の出土は一切なかった。

弥生時代の掘立柱建物であるSH6は後期後半と考えられる竪穴住居SB8と重複するものの、おそらく中期の竪穴住居SB6・7とは明らかに建物方向が合わないので、後期の時期と考えても良いものだろう。柱穴から出土した土器から考えると、後期後半の時期としておきたい。

古墳時代後期の掘立柱建物は建物配置から見ると柵列に規定されるSH1・2・4、竪穴住居より古く柵列より新しいSH3・5に分けられる。とすると、SH1・2・4は柵列の時期から坂尻I-2式段階(TK10段階)、SH3・5はSB1の時期から坂尻I-3～4式段階(TK43～209段階)に該当するものと考えておきたい。なお、SH5については、柱穴の大きさ、建物の主軸方向から見ると、SB2と同方向、同じ柱穴の特徴を持つと考えられ、溝は検出されなかったがSB2と同様な構造の建物で、SB2と組み合わせになる可能性も指摘しておきたい。

3. 土坑(SK)

土坑は弥生時代の遺構が多く検出された調査区東半分で多数確認できた。ほとんど弥生時代後期の土器を出土したが、SX1とした土坑の組合から(方形周溝墓?)は弥生中期後葉でも古段階、SX2とした土坑の組合から(方形周溝墓?)は古墳時代初頭になる小山角田I-2式段階(松井一明 1995)土器が出土し、古墳時代後期の土師器片を出土する土坑はSK27・32～34があげられる。

まとまった弥生時代後期の土器を出土する土坑としては、SK12・13・22がある。復元すると土器の完形率は高いが、比較的破損しておりかつ礫も一緒に出土することから、これらの土坑は土器等の廃棄土坑と考えられる。さらに、比較的多くの土器片を出土したSK4・7・20・23・25・26・36についても、小形で不整形であることから、何らかの廃棄土坑と考えられる。円形のSK37や大形の長方形の28については、かなり形が整っている土坑であるため、単なる廃棄土坑とは思えない。性格は特定できないが、貯蔵穴のようなものと推測される。

完形品に近い高坏を出土したSK5については、長軸1.2mを測る土坑で、土坑墓の可能性が指摘できる。SK17・18・19・25なども長軸2m前後を測る長方形の土坑で、比較的形が整っておりそれぞれ長軸方向も一致することから、土坑墓の可能性が指摘できるが、掘り込みは浅く墓としての性格を特定できる遺物も出土していない。

古墳時代後期の土器を出土する土坑のうち深い円形のSK27は、埋土のほとんどが地山の黄褐色土に近い土層で短期間に埋め戻されている状況を示す。水溜場ないし貯蔵穴のようなものであろうか。SK32～33は連続する不整形の土坑で、廃棄土坑と考えられる。

近世の土層を示す近世土坑SK1は、長軸2.4mを測る長方形の素堀土坑で、近世地割溝と重複しないことから、畑地に付設された水溜土坑と推定される。

4. 柵列(SA)

柵列と思われる大形の柱穴4基が、SB1と重複して1列確認できた。本来あるべき南側より2基

目の柱穴は水道の埋設工事のため失われていた。主軸は真北（国土座標方位）を向け、ほぼ2.5 m間隔に直線的に配置されている。SB1との新旧関係は、SP41からの土層ではSK1・SB1のほう新しい所見が得られている。また、SP41から出土した模倣坏身についても坂尻I-2式段階で、SB1の時期とも矛盾しない。

なお、この柵列に建物方向があうものはSH1～4であるが、長屋風のSH3については柵列と重複するため柵列と同時期の建物とはならない。柵列廃棄後、間もなく建てられた掘立柱建物と思われる。この新旧関係が正しいならば、柵列より西側が内部と考えられ、しかも内部には掘立柱建物しか見当たらず、内部の掘立柱建物は柵列の主軸に規制されたものと考えられる。この建物配置は、竪穴住居を伴わないことから考えても、豪族居館か何らかの祭祀空間かの何れかと推測されるが、詳細については西側隣接地の第1次調査の状況が重要なポイントとなるため、第7章にて検討を進めたい。

5. 溝（SD）

弥生時代・古墳時代の明確な溝状遺構は発見できなかったが、SD1・2についてはその位置関係と出土遺物から、古墳時代後期のSB1・2の排水、ないし住居の区画に関係した溝の残存と考えられる。SD2からは、土師器の平底把手付鍋や模倣坏身がまとまって出土している。SB2に関連した一括廃棄土器と考えられる。

今回の調査区で顕著に認められた明確な溝は、ほとんど主軸が真北で南北方向に走り、表土から掘り込まれていることから何れも近世の地割溝と考えられるものである。近世溝1～3・7と近世溝4・8については、現在の土地割とも合致するもので、出土遺物は江戸期以前のものに限られ現代の遺物は含まないが、おそらく現在の道路ができる以前の昭和期まで一部機能していた可能性が高いと考えられる。特に溝1～3・9については、溝の数が複数認められること、溝9の規模から考えてかなり重要な地割部分であったと考えられる。なお、この溝群はほとんど重複しないことから、例えば溝1と3、溝2と9が組合になって、その間を道路として利用していた可能性も指摘しうる。

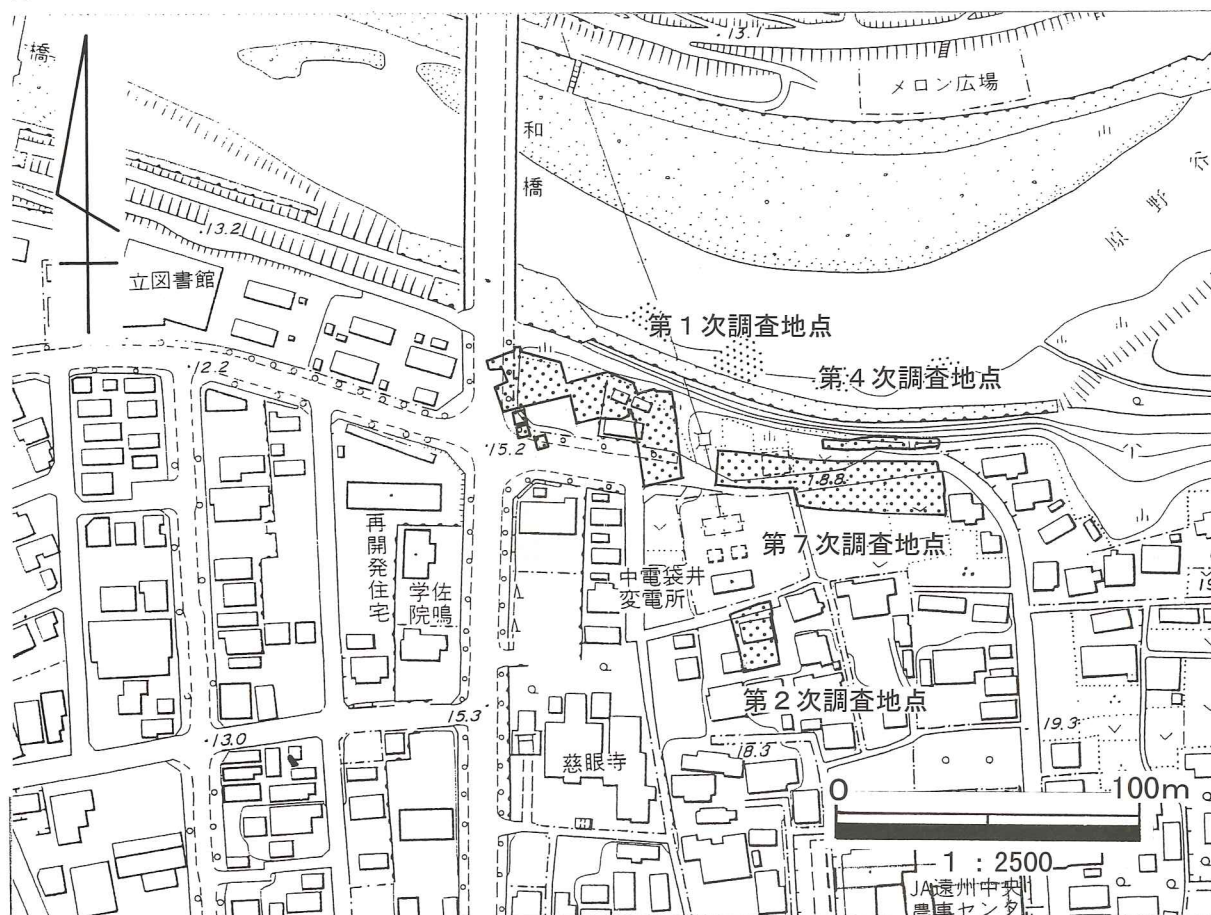
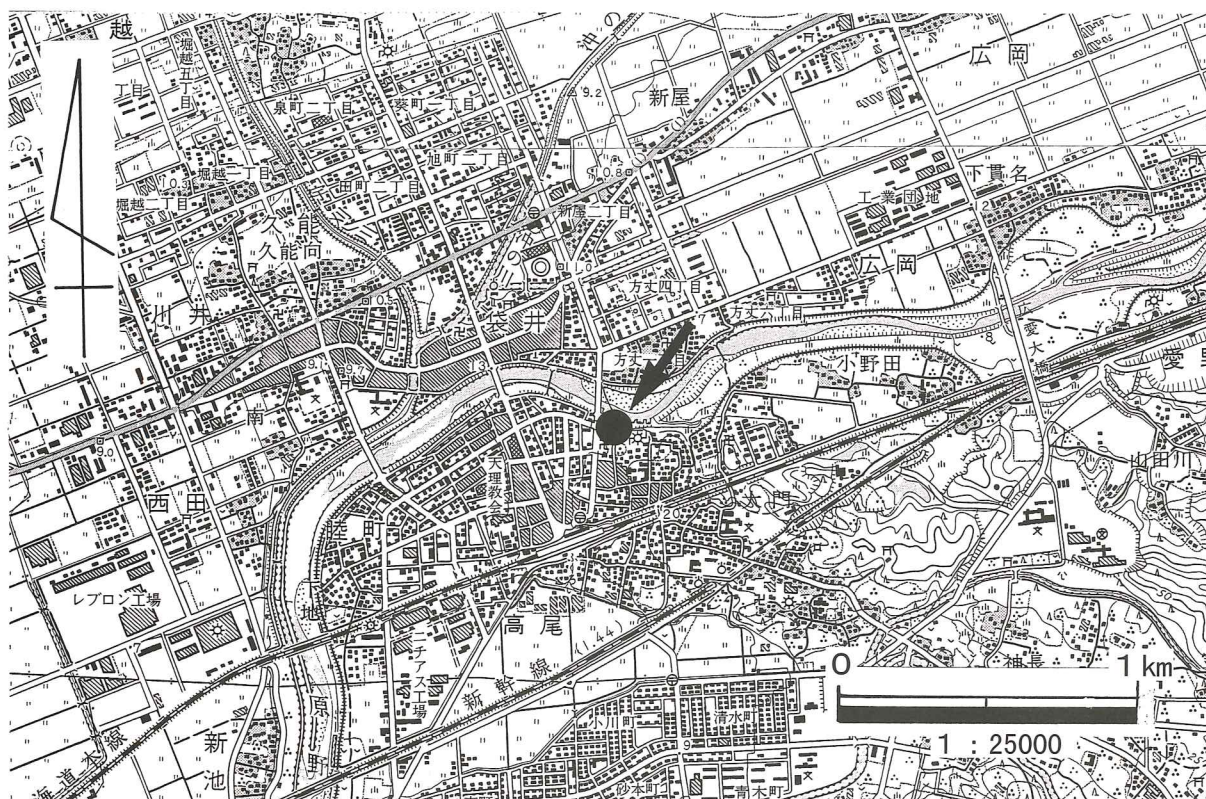
近世溝5・6は現在の土地割とは合わないが、出土遺物・土色から見ると溝5は他の溝とほぼ同時期、溝6は他の溝とは異方向であるため、近世より若干古くなる可能性も考えられる。

今回の調査地点では、近世遺構としては地割溝と水溜め土坑しか検出できなかったことから、近世においては畑地として利用されていた場所であったと推測できる。

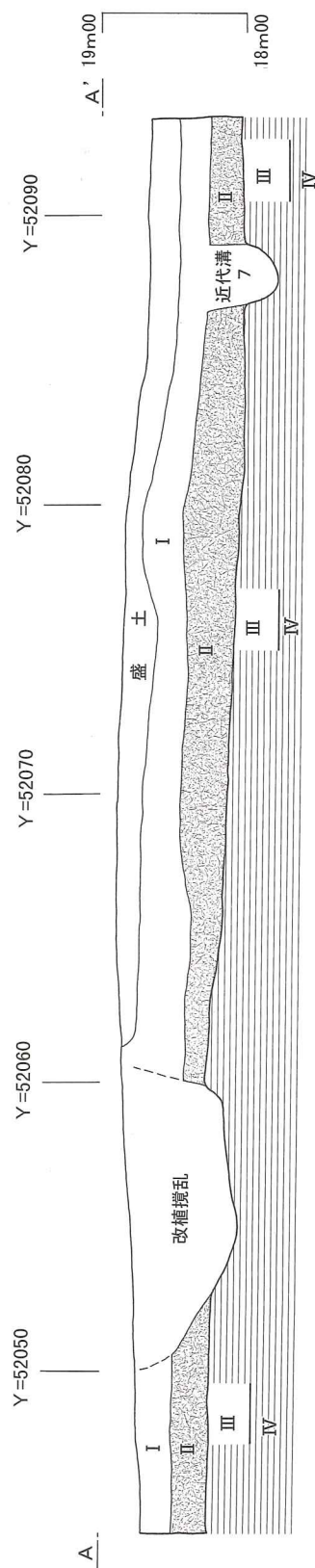
6. 柱穴（SP）

掘立柱建物の柱穴も含めて総数約780基の柱穴が検出できた。近世溝9より西側では約90基しかないの、ほとんど近世溝9より東側に集中する。時期を特定できるものは少ないが、SP113からは古墳時代後期の高坏の脚が、SP458より弥生時代後期前半の小形壺形土器、SP142より弥生時代後期後葉の高坏が出土している。また、SP584のように底に礎石らしい石を伴うものがあり、時期は弥生時代後期のものと思われる。なお、古代～中世の遺物を出す柱穴は確認できなかった。

古墳時代後期を主体と考えられる土師器や須恵器を出す柱穴は総数約205基となり、全体の数から見ると26%の比率となる。包含層出土の土器量から見ても妥当な数字であろう。古墳時代後期の柱穴は全体にまんべんなく検出されているが、近世溝9より西側、古墳時代後期のSK31～34の周辺、SH3の周辺でやや多く検出される傾向がつかめた。なお、SK32周辺からは包含層中より出土する土器は古墳時代後期の破片がまとまって出土しているので、この廃棄土器と土坑の組み合わせ関係から、その周辺に何らかの建物が存在していた可能も考えられる。また、SP341のように5世紀代の初期須恵器を出すものもある。その他大多数の柱穴は埋土の色調や出土土器から見ると、弥生時代後期に該当するものと考えられる。

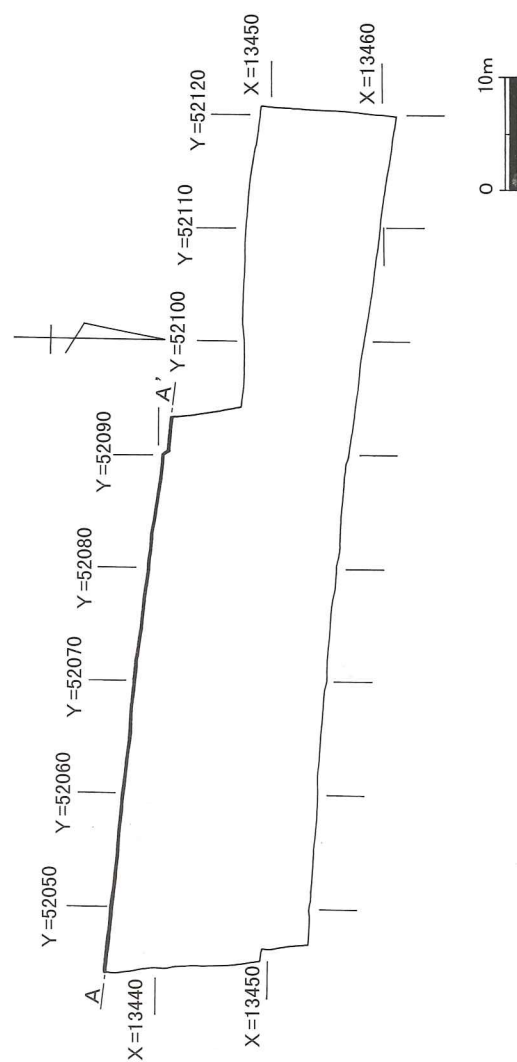


第1図 調査位置図

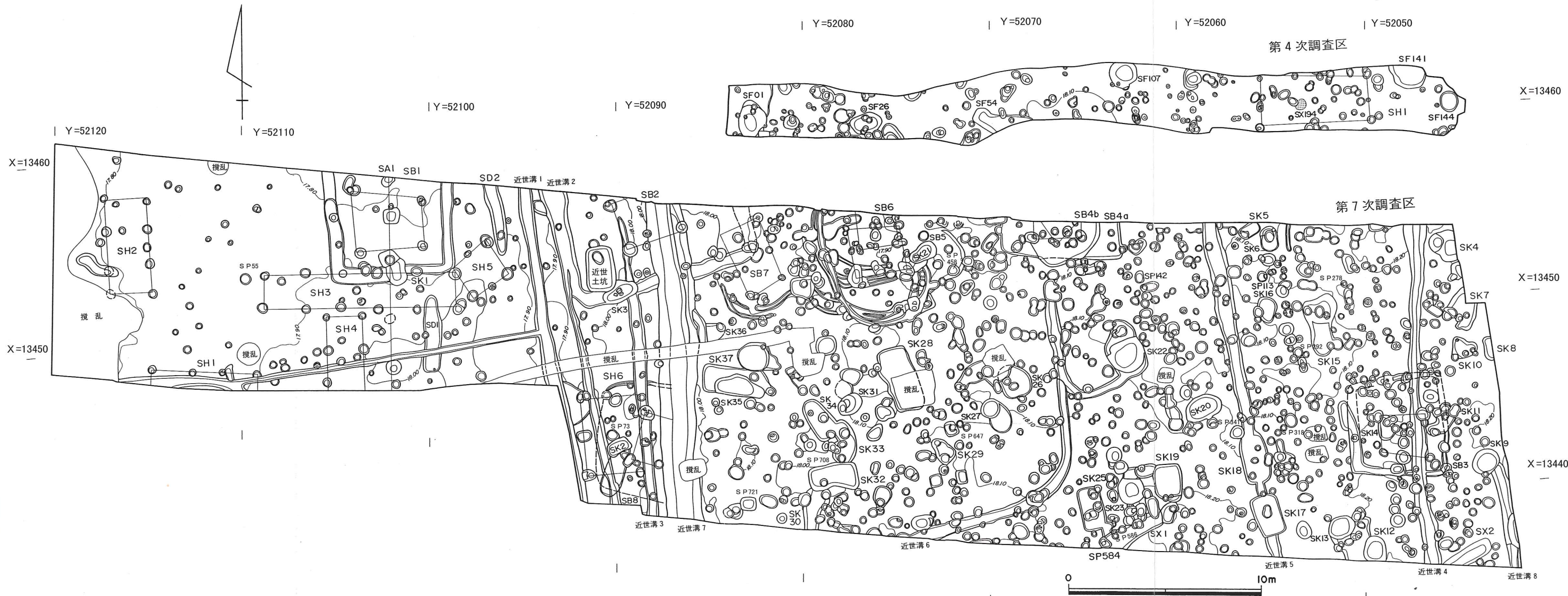


土層説明

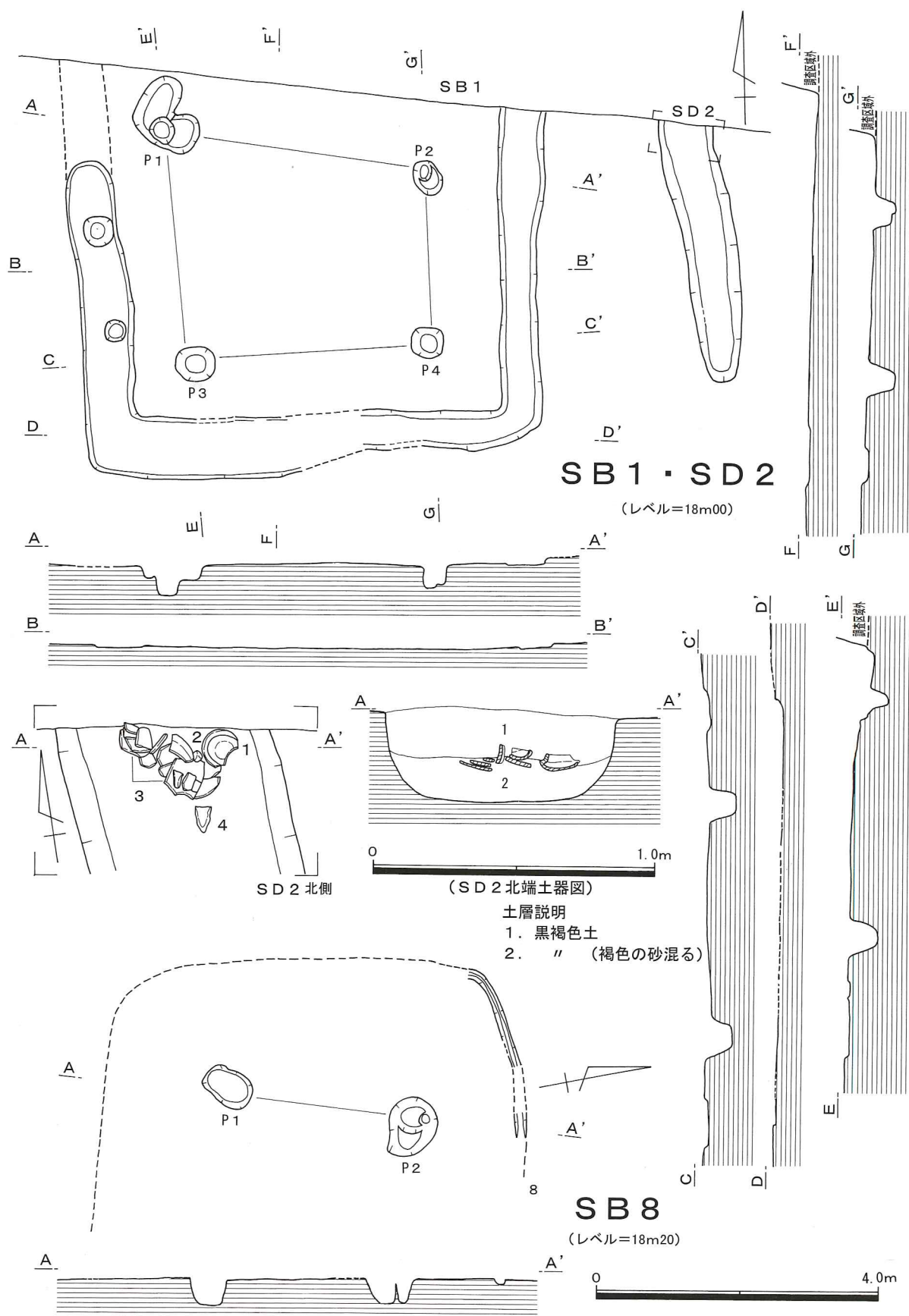
- I. 表土 (褐色土)
- II. 黒褐色土 (弥生~古墳時代の包含層)
- III. 黄褐色土 (粘土質地山)
- IV. 黄褐色土 (砂礫多量に混る)



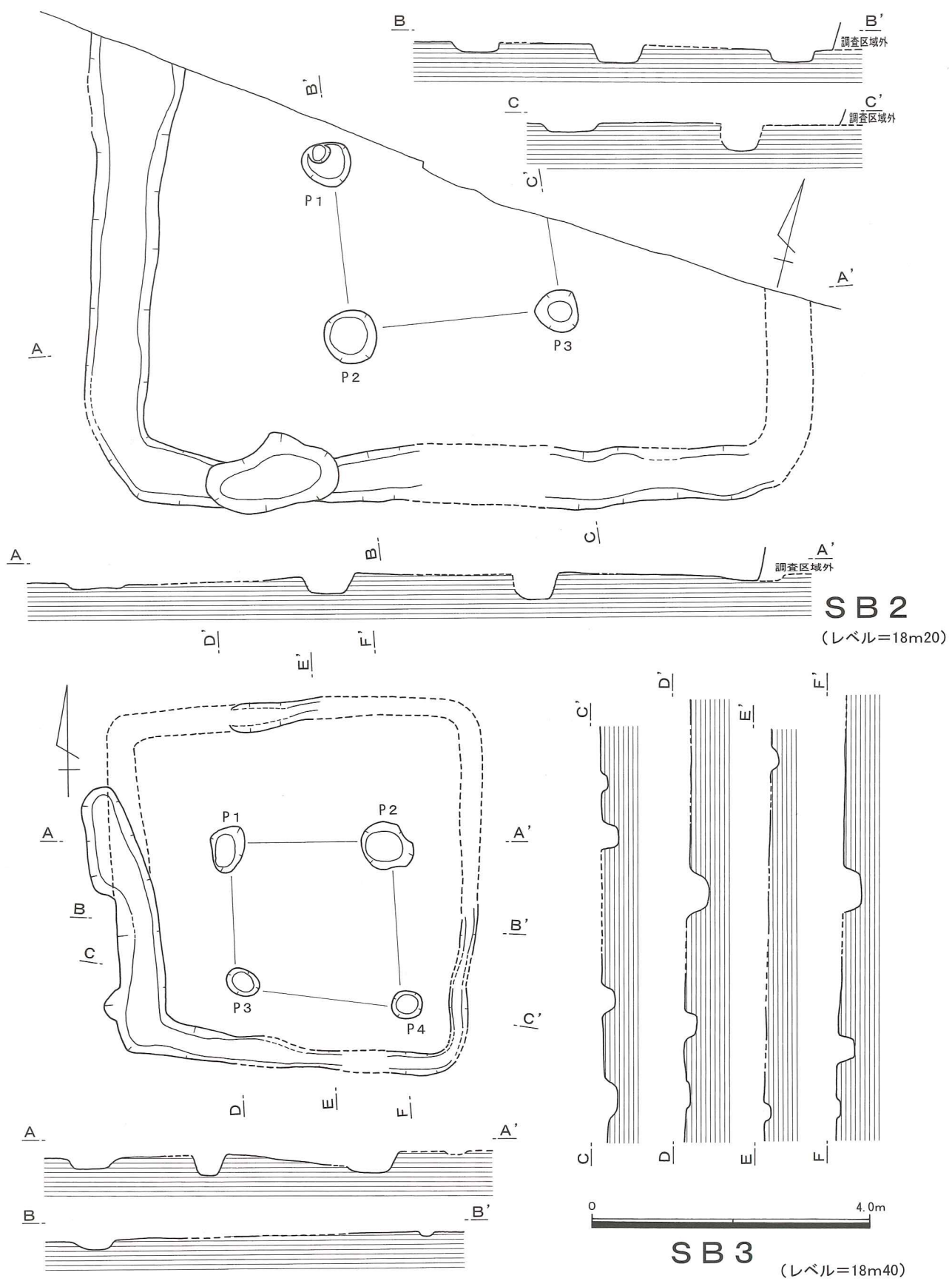
第2図 第7次調査 土層図



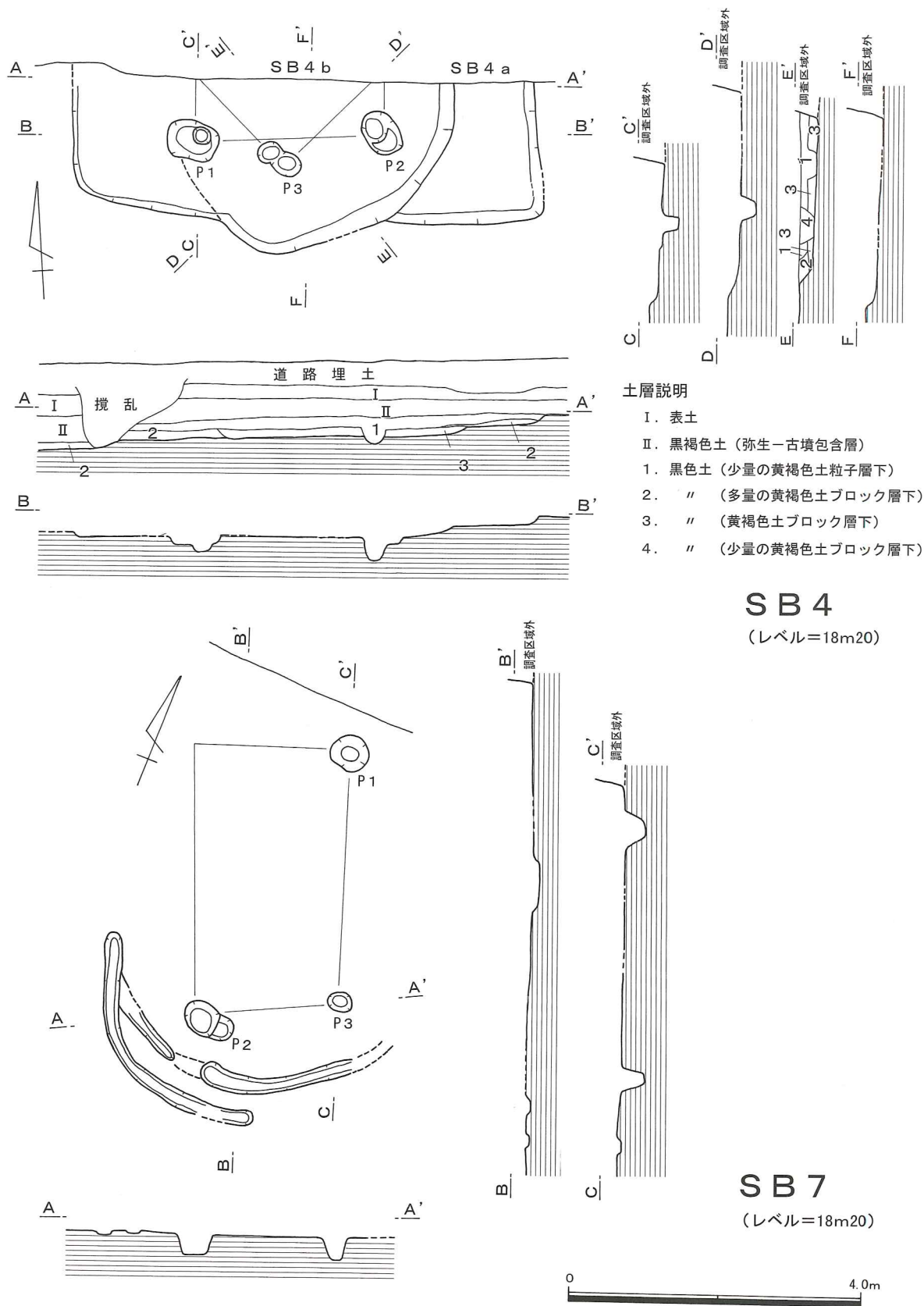
第3図 第7次調査全体図



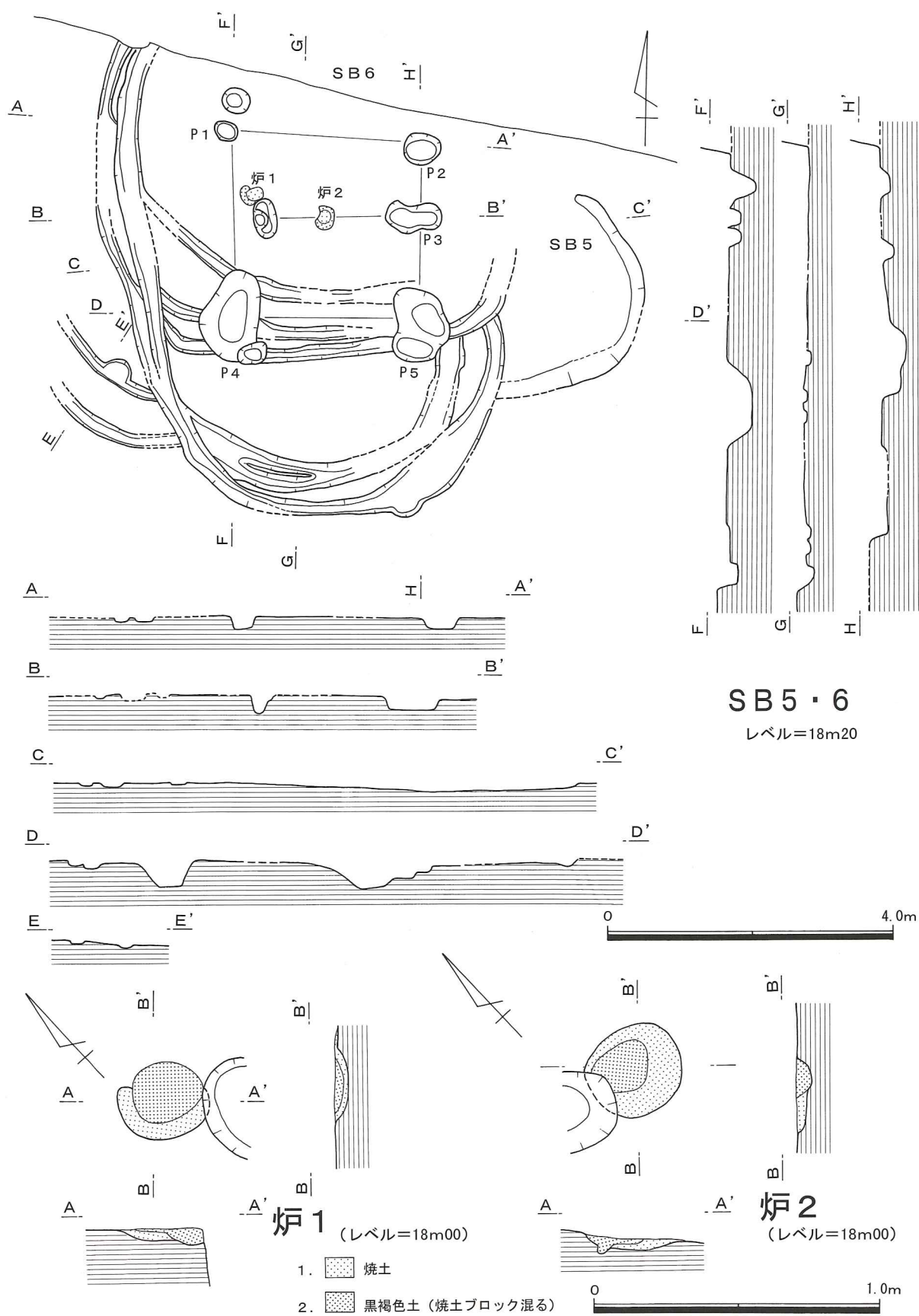
第4図 SB1・8・SD2 実測図



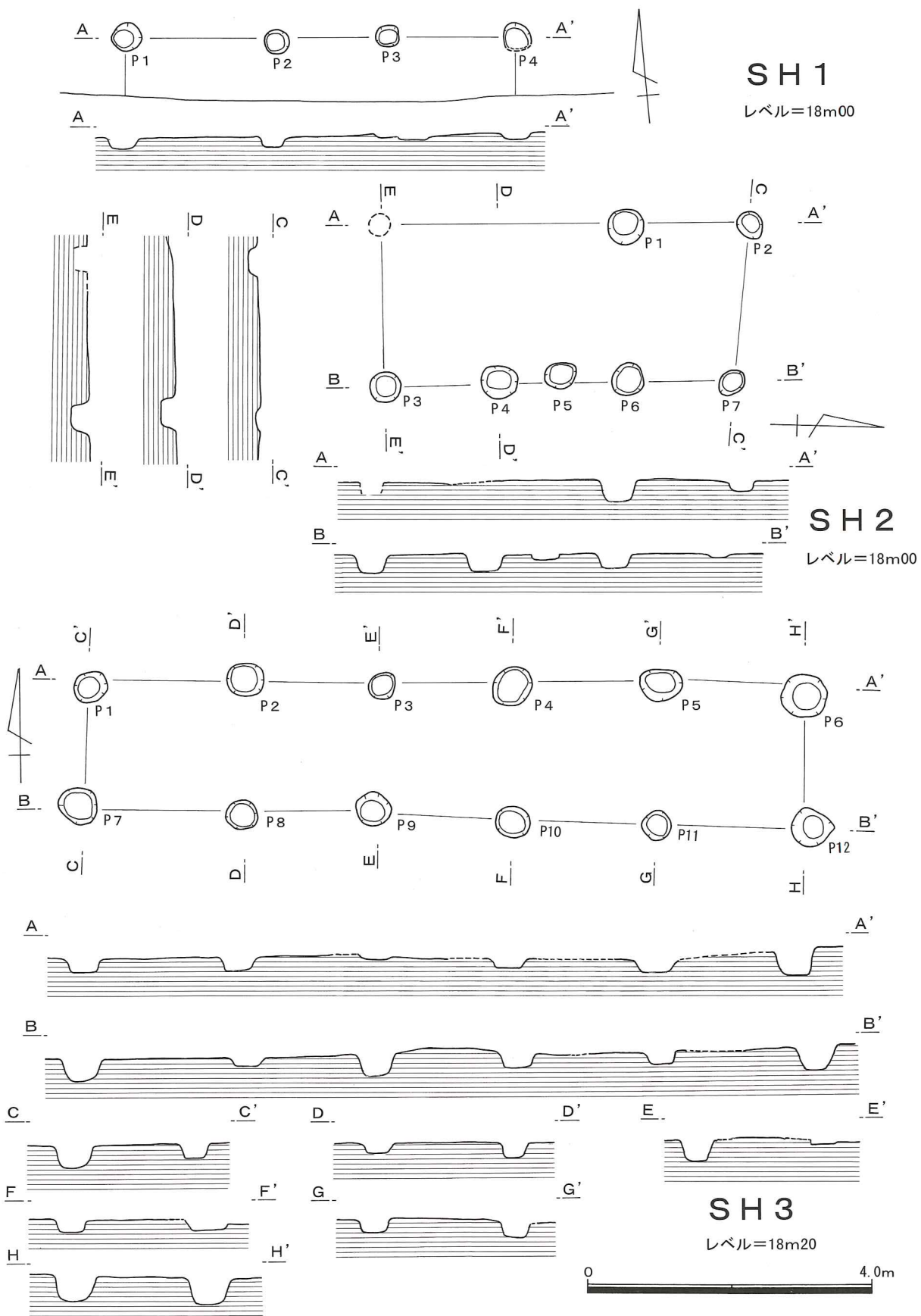
第5図 SB2・3 実測図



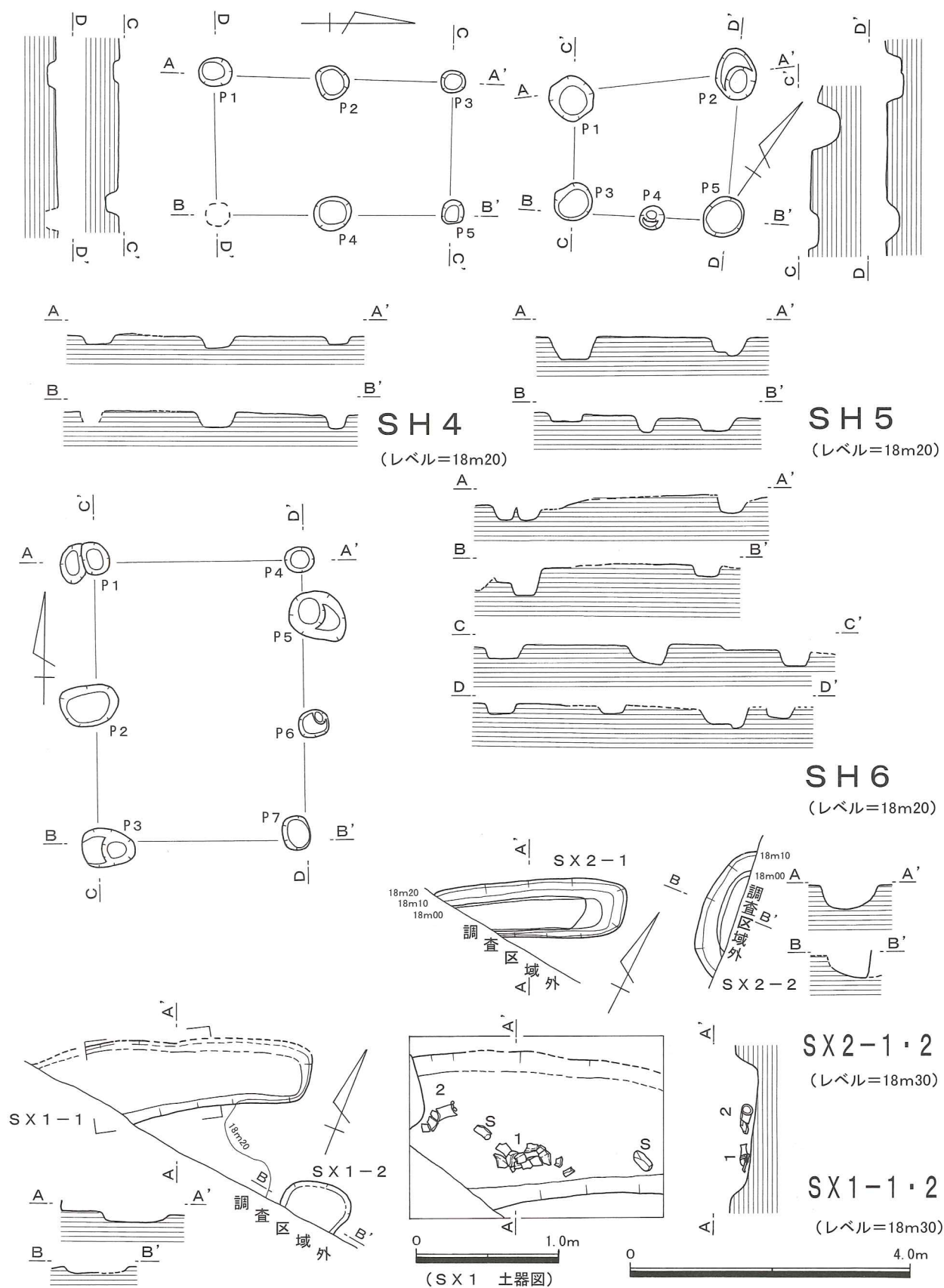
第6図 SB 4・7 実測図



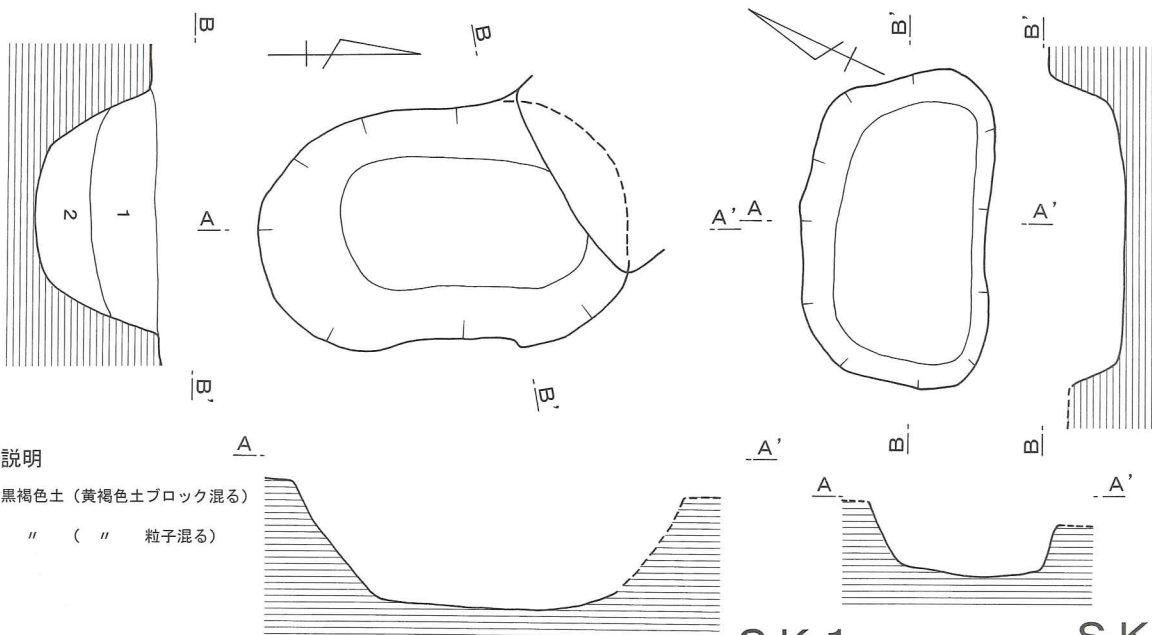
第7図 SB 5・6 実測図



第8図 SH1～3 実測図



第9図 SH4~6 SX1・2 実測図

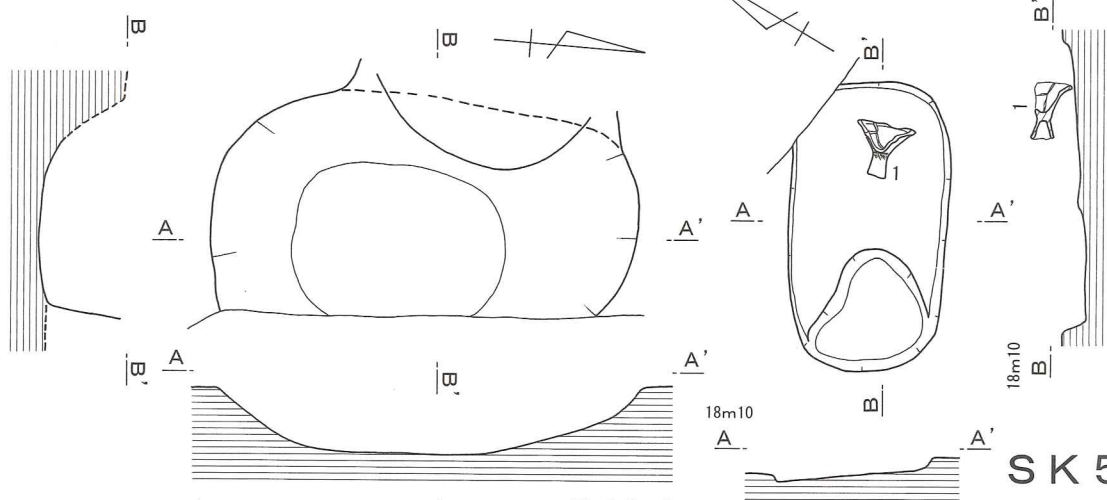


SK 1

(レベル=18m00)

SK 2

(レベル=18m10)

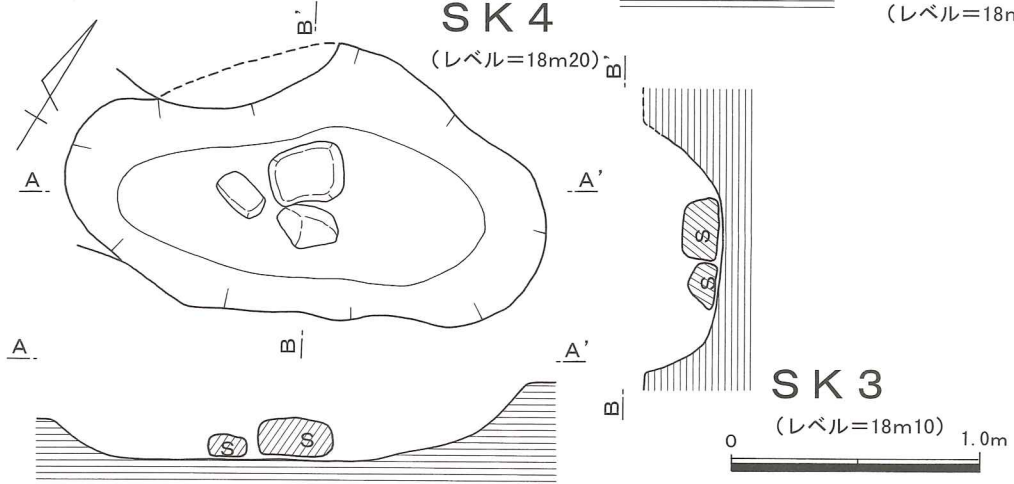


SK 4

(レベル=18m20)

SK 5

(レベル=18m10)

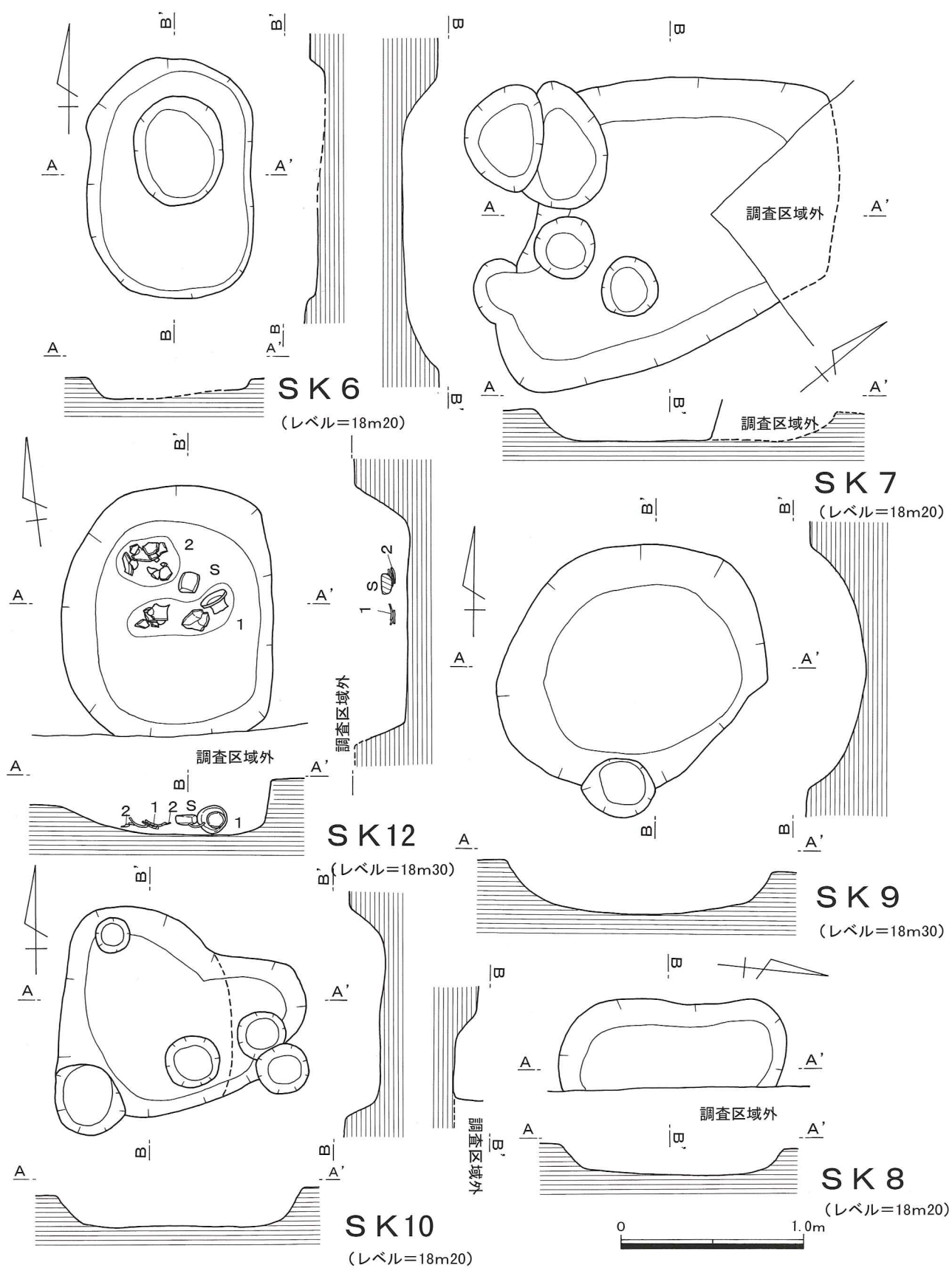


SK 3

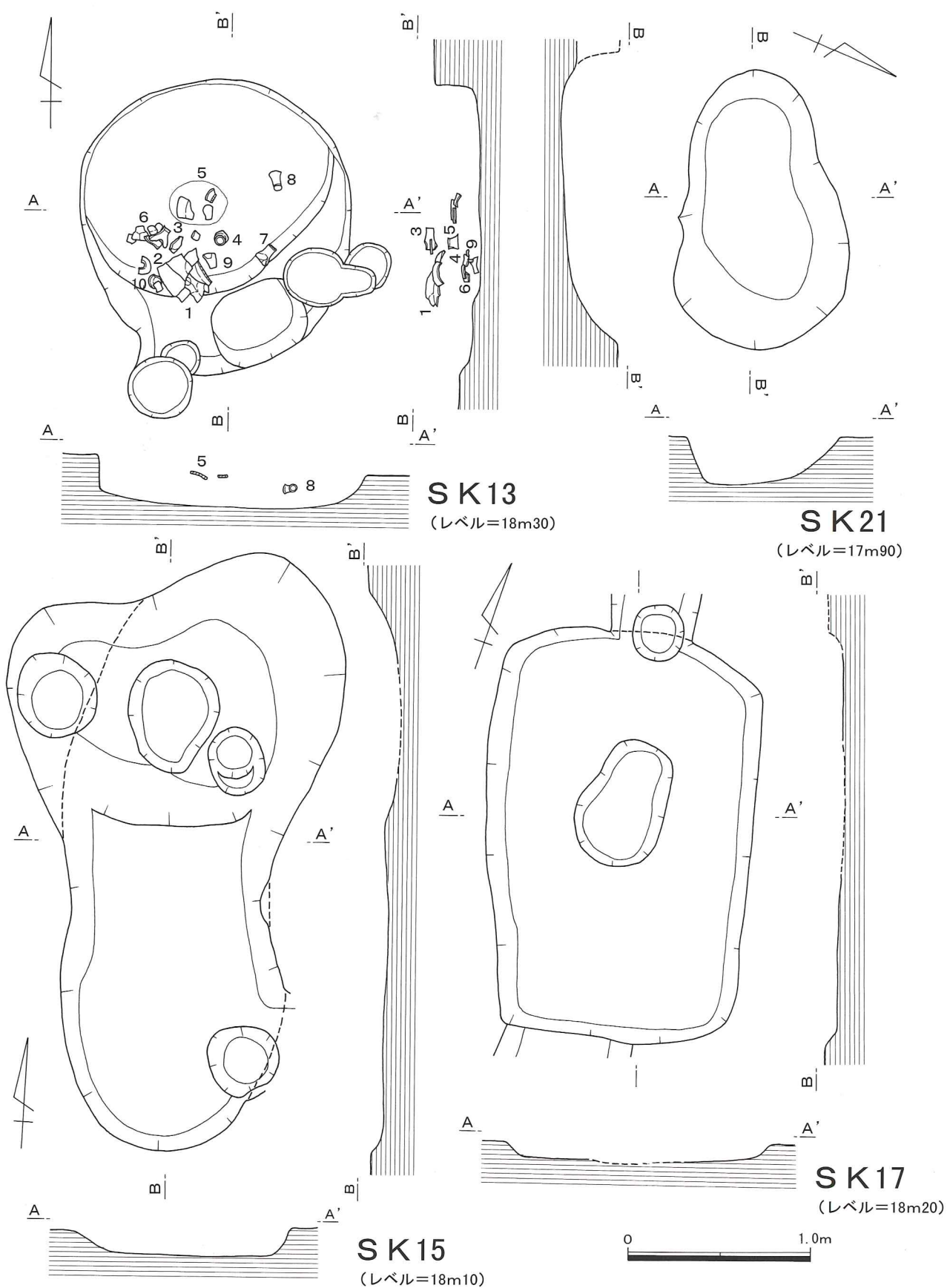
(レベル=18m10)

0 1.0m

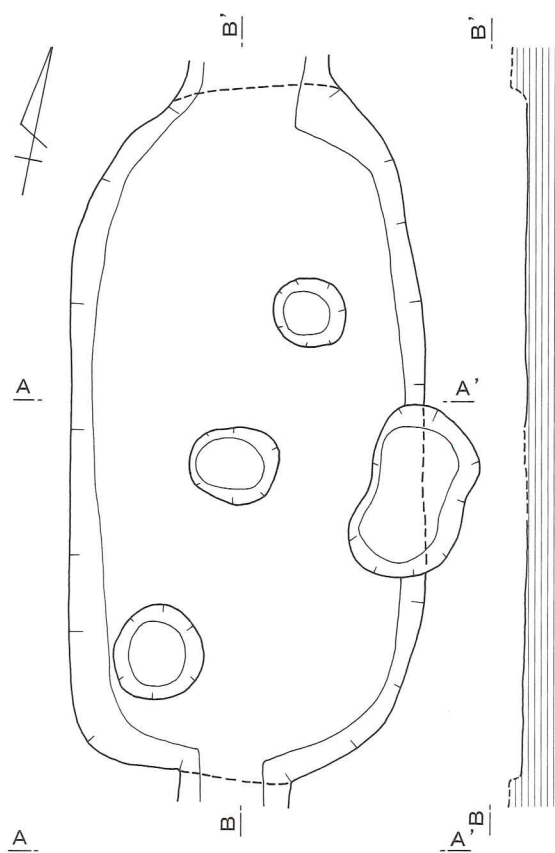
第10図 SK 1 ~ 5 実測図



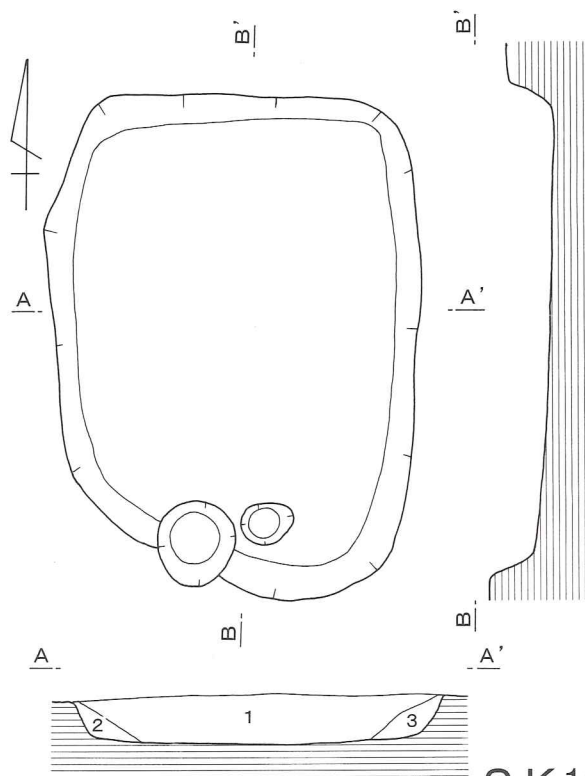
第11図 SK 6～10・12 実測図



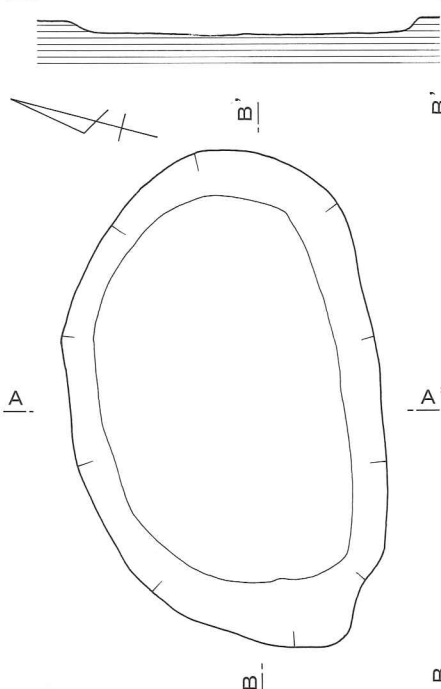
第12図 SK13・15・17・21 実測図



SK18
(レベル=18m20)



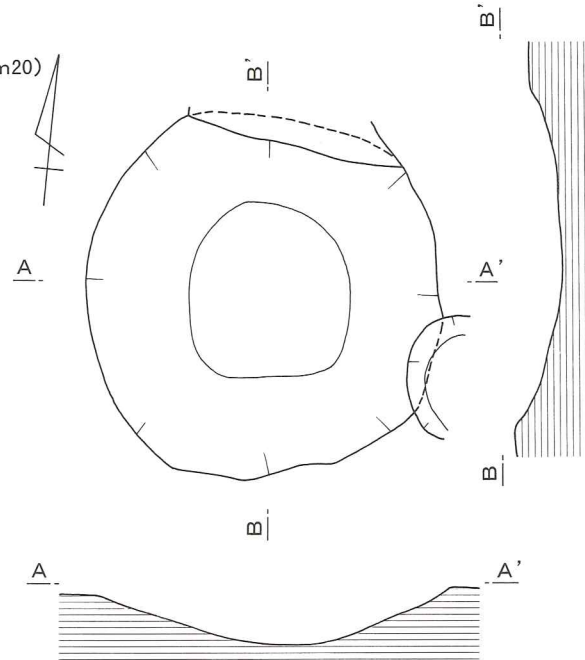
SK19
(レベル=18m30)



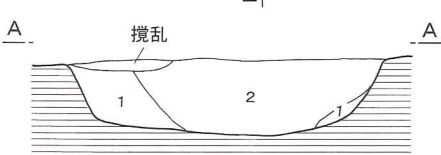
SK19・20土層説明

1. 黒褐色土 (黄褐色土ブロック含む)
2. " (" 少量含む)
3. " (黄褐色土粒子少量含む)

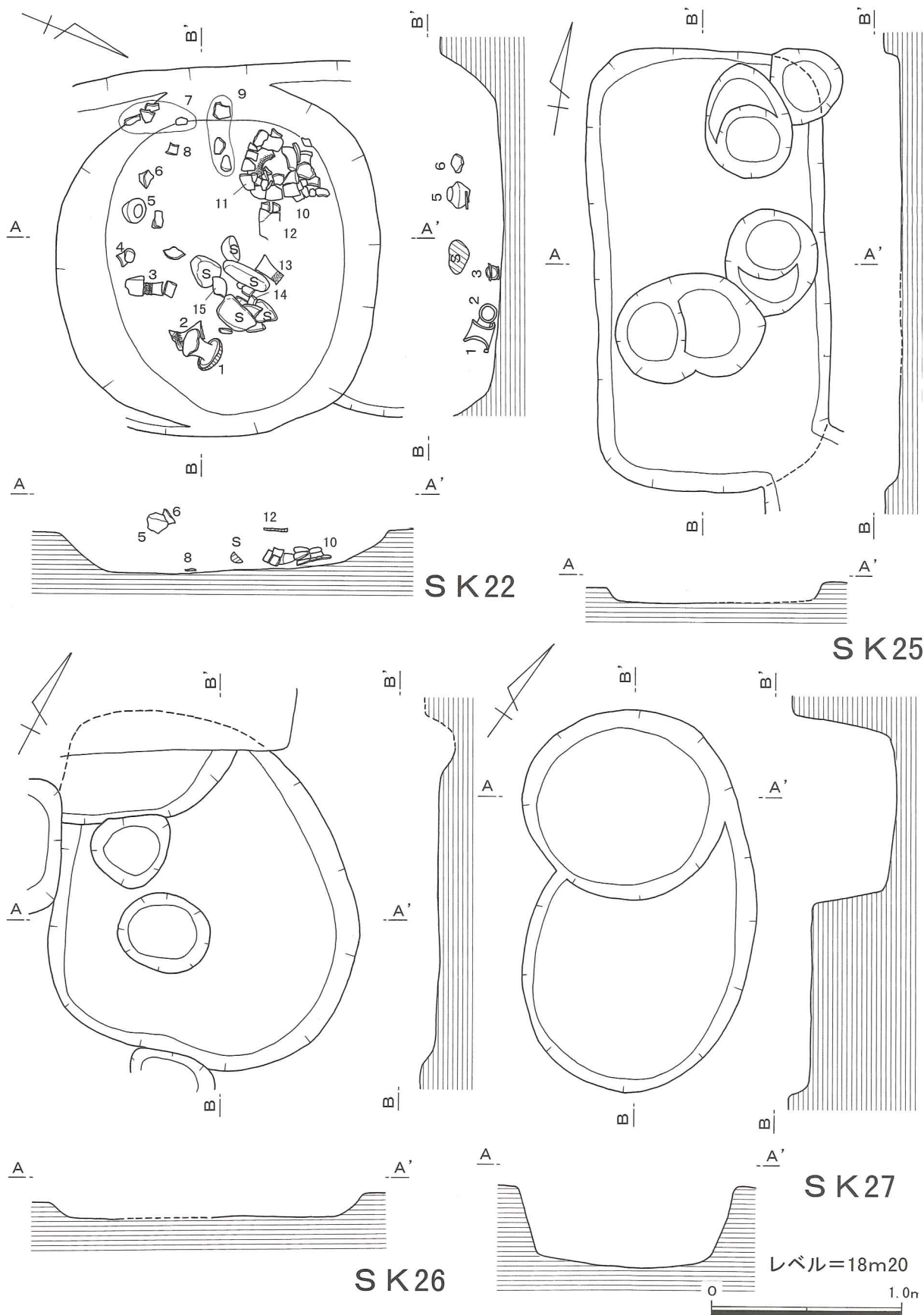
SK20
(レベル=18m20)



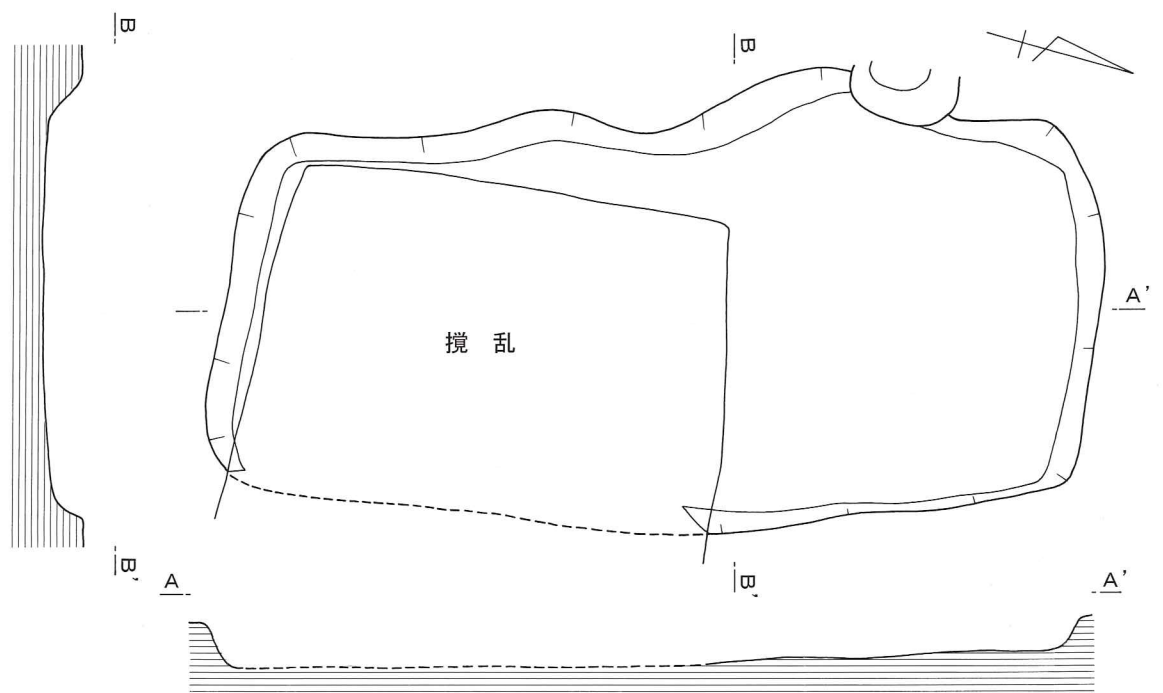
SK23
(レベル=18m20)



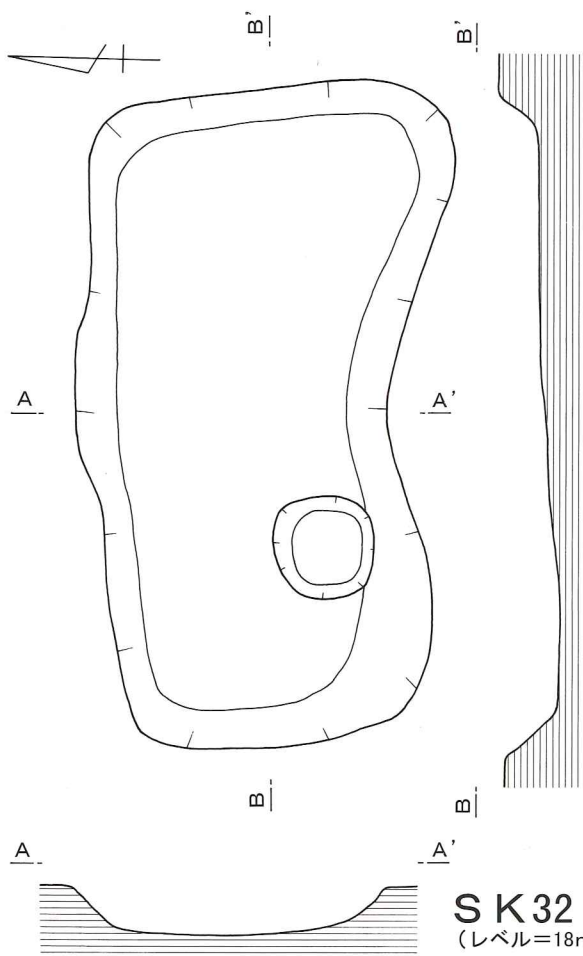
0 1.0m



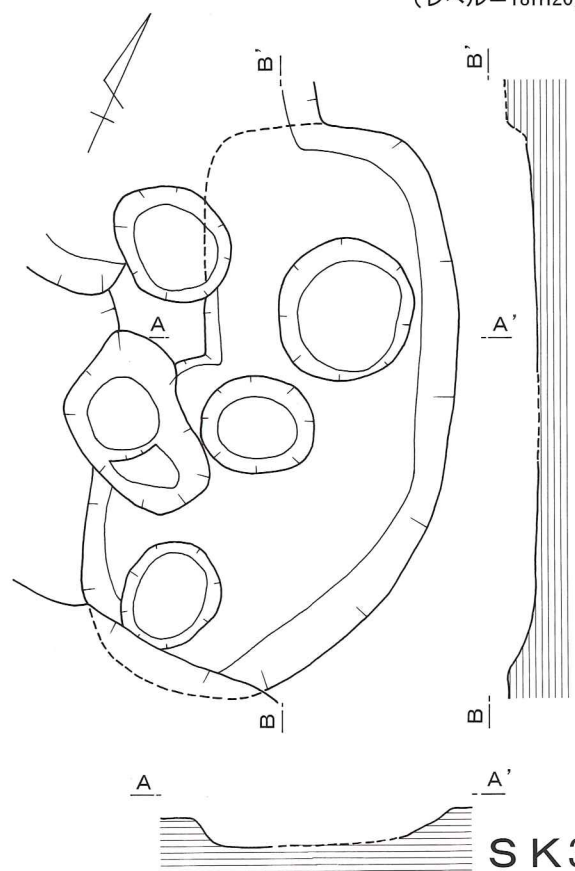
第14図 S K 22・25~27 実測図



SK 28
(レベル=18m20)



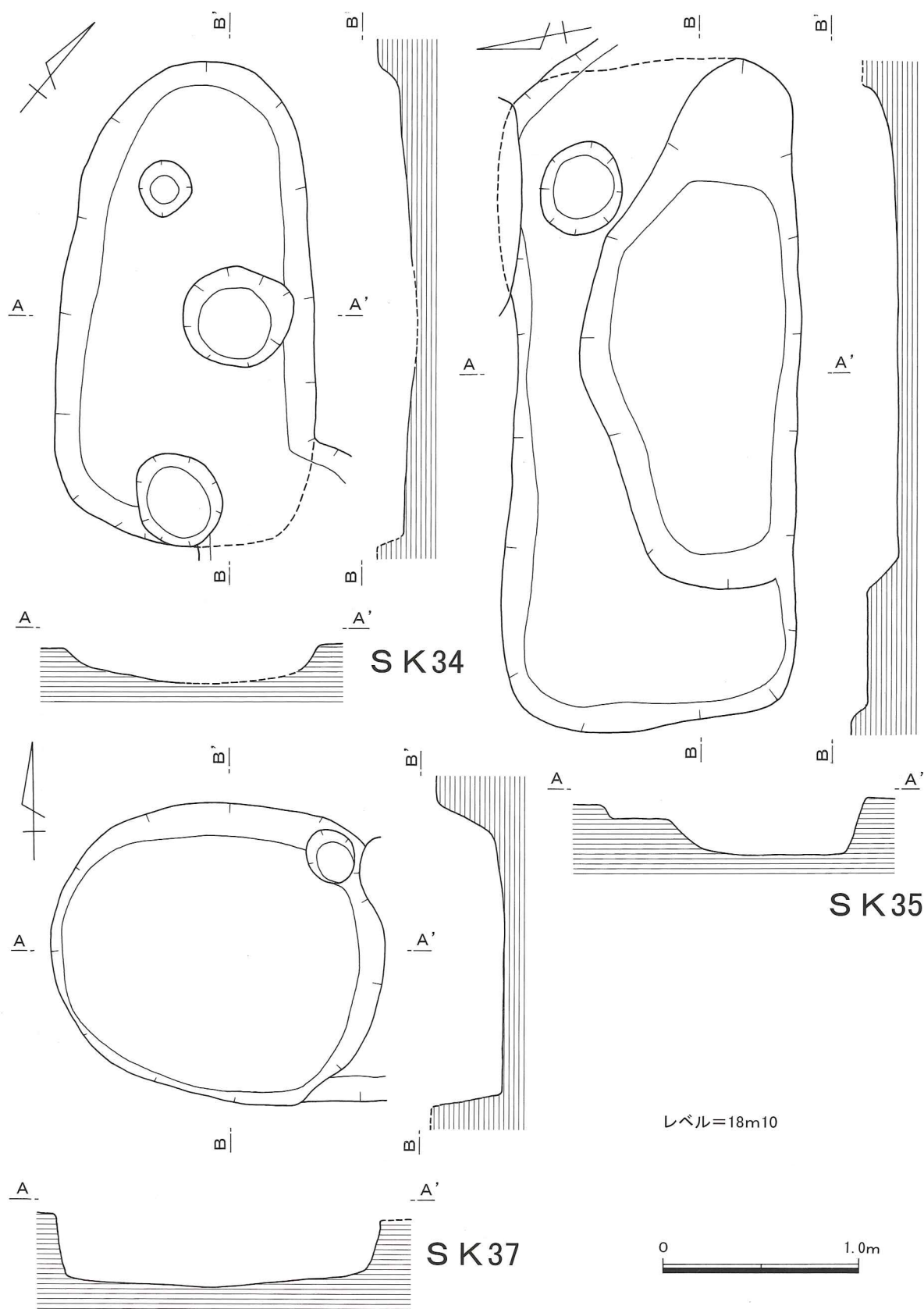
SK 32
(レベル=18m10)



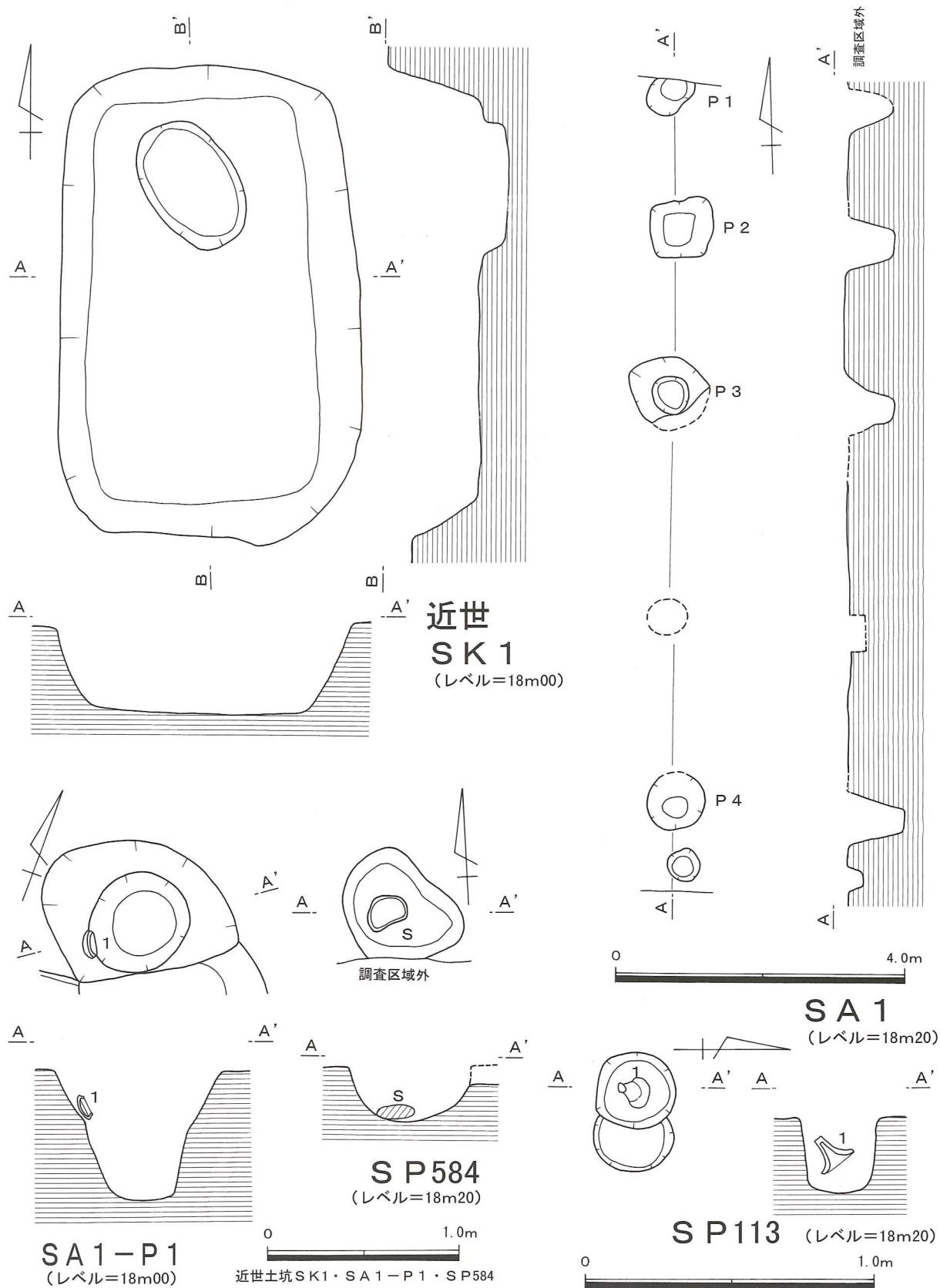
SK 33
(レベル=18m10)

0 1.0m

第15図 SK 28・32・33 実測図



第16図 S K 34・35・37 実測図



第17図 近世SK1・SA1・SA1-P1・SP584・113 実測図

第5章 遺物

1. 弥生時代～古墳時代初頭の遺物

土器 中期後葉と後期の土器が出土している。包含層中からは後期段階の土器が最も多くの量が出土しているが、細片のものが多かったため小形土器等の注目されるものを除いて割愛した。また、個々の資料について説明する紙面はないので、一括性の高いものについてのみ説明を加えていきたい。

中期後葉の土器はSB6とSX1-1から出土している。SB6からは後期後葉の土器に混じって42の高坏と44の壺、48の甕が出土している。高坏の形態から、白岩式段階でもさほど古くならない段階と思われるものである。SX1-1から出土しているほぼ同形態の50・51の壺は、胴部が下膨れで古い形態を残す。52は受口の広口壺、53は平底の甕である。よってSB6は白岩式の新段階、SX1-1については白岩式の古段階に属すると考えた。

後期の土器は前半を2時期（古＝鶴松9次004、新＝鶴松3次SD1）、後半を3時期（古＝堀越ジョウヤマSD1、中＝土橋SK77、新＝一色前田4号住）にわけて一括資料の検討をしてみたい。まず、前半新段階の資料としてSB5、SK4・13・37・39、SP73・458があげられる。なかでもSK13は壺と高坏については指標となる資料であるが、台付甕については胴部が球形に近い123・124のように比較的新しい要素が見られるものも含む。SK4についても83のように肩部が丸くなり、赤彩の施されたものを含むが、これは後半段階に該当するものの混入であろうか。

後半古段階の資料は少ないが、僅かにSB4、SK9・39、SP142が該当すると思われる。いずれも資料が断片的で、一括資料として説明できるものはない。

後半中段階の資料としてはSK2・5・7・8・10・12・21などがあげられる。なかでも、SK12については、113の壺は指標となるものであるが、110の台付甕は口縁部に刻目がなくヨコなで調整が施される球形胴のもので、古式土師器I期まで下りそうな資料も含んでおり問題がある。

後半の新段階資料としては、SK20・22・25があげられる。なかでもSK22が今回の調査のなかでも最も一括性の高い資料として注目される。高坏は148のように浅い坏部、脚部の下端が外に開き、接合部が2段の有段羽状の刺突文、へ字の透かしが入るものでかなり新しい要素が見られる。壺についても156・158のように胴部がかなり張るもので、片部に2段の有段羽状の刺突文が施されている。台付甕については、166の球形胴の形態で中段階とはあまり区別がつかないものである。168の折返口縁の台付甕は、中段階以前のものがくの字状口縁になるのに対して、直立気味となるものでやや形態が異なる。

古墳時代初頭の土器は、SX2-2から出土している。54・55の外来系高坏、59の扁平な折り返し口縁の壺を含むため古式土師器である小山角田I-2式（B類S字甕後半段階）に該当するものと考えたい。包含層中よりも238の小山角田I-2式の広口壺、235のA類に近いS字甕、236・237のB類の特徴をもつS字甕が出土している。233・234の高坏は小山角田II式（C類S字甕段階）に該当するものと思われる。

石器 大陸系磨製石器である11の扁平片刃石斧、13・14の小形で扁平の形態であるが蛤刃石斧と考えられるものが出土している。いずれも、中期後葉段階のものと考えられるが、後期前半に下る可能性もある。9・10の刃こぼれのある硬砂岩の剥片石器も中期～後期前半に見られるものであるが、顕微鏡では稲の収穫に関係した使用痕であるポリシュは観察できなかった。12については扁平な自然石の一部を研磨して旋孔を施したものでおそらく装飾品と思われるが、時期は限定できなかった。15・16・

18は叩石、17は擦石、19は凹みのある叩台石、20は金属の刻み痕のある砥石？が出土している。17・18は花崗岩で、弥生時代ではあまり見られない石材なので、縄紋時代、20の砥石は古墳時代になる可能性が高い。

2. 古墳時代の遺物

須恵器・土師器 完形率の高い土器は遺構よりも包含層からの出土が多かったので、包含層のものもできるだけ図示した。古墳時代中期のものは包含層中出土の239の高坏と、240の有稜口縁が出土している。何れも見性寺Ⅱ-2式（松井一明 1995）に該当するものである。

後期の土器はSB1とSD2からまとまって出土している。1の須恵器がMT15、6の短脚高坏が坂尻Ⅰ-1～2式（松井一明 1995）に該当する以外、土師器は概ね坂尻Ⅰ-4式に該当するものと考えられる。SB3も同様の時期と考えられる。SA1-P1・3、SP55から出土している土師器は、坂尻Ⅰ-2式に該当するものである。SP113から出土している高坏の脚は、坂尻Ⅱ-1式に該当するものである。包含層から出土している土師器は坂尻Ⅰ-1～2式に該当する模倣坏の271、坏の274・275・284、短脚高坏の285、甗の292、坂尻Ⅰ-3式に該当する模倣坏の272・273、坂尻Ⅰ-4式に該当する坏の276～283、広口壺の288・290、甗の294、長胴甕の287が出土している。293の台付甕の脚部は坂尻ⅡⅠ-1式に該当するものと思われる。291の甕口縁については胎土・色調から外来系と判断されるが、産地は分からない。

須恵器に関しては、5世紀代に遡るものとしてTK208 段階の坏蓋と思われる241・242、坏身の247、大形の高坏の254・255、甗の250・251、TK23～47段階の坏身の248、甗の252・253がある。その他、壺や甕の258・260～262・266・267・269・270、器台と思われる259などが5世紀代に該当する初期須恵器と判断した。

6世紀代の須恵器としては、TK10段階の坏蓋の243、TK43段階の坏蓋の244・263～265などが考えられる。245・246・256・257は7世紀前半～中頃に該当するものであろう。

3. 奈良時代以降及びその他の遺物

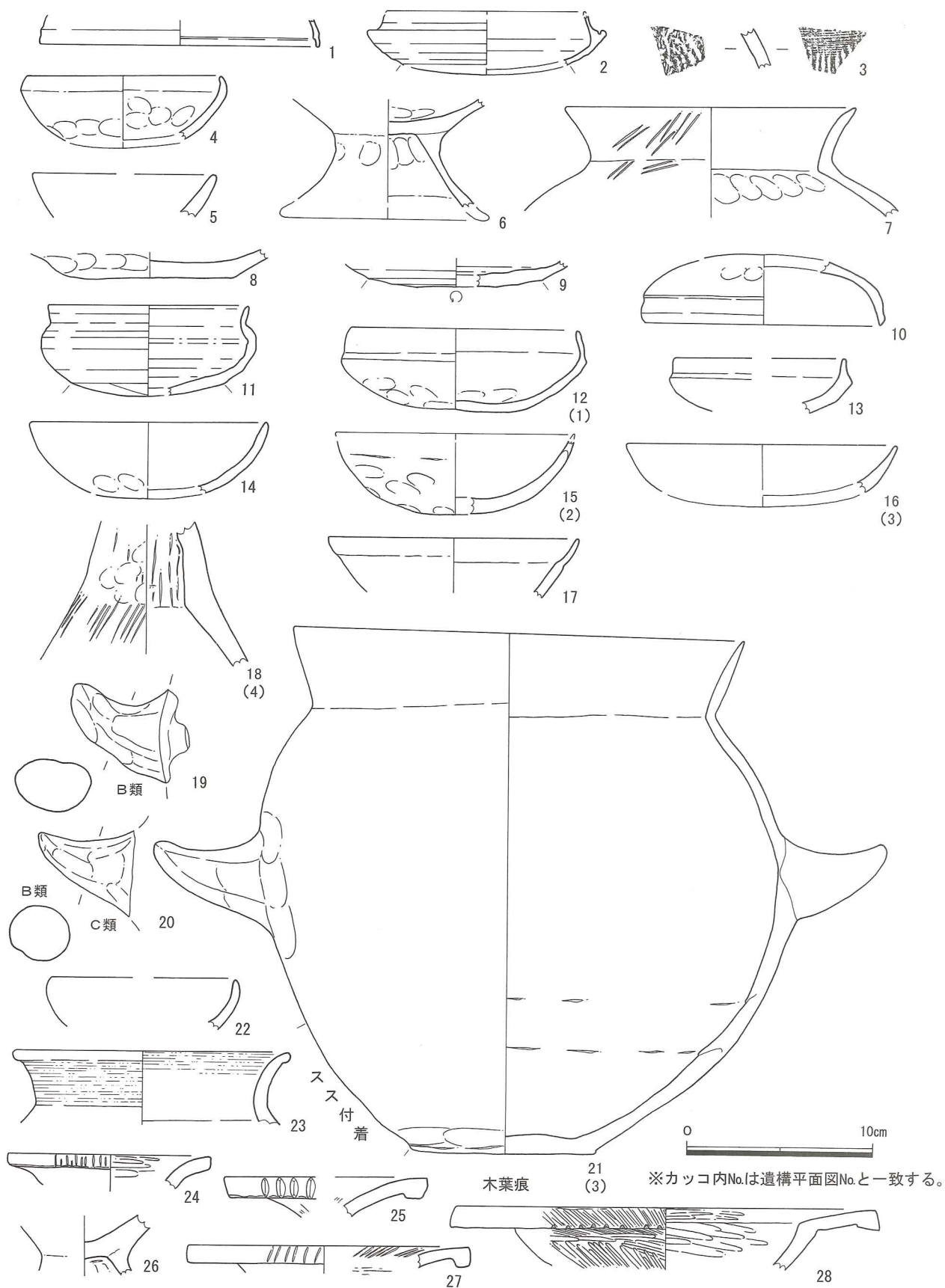
奈良時代の遺物として304・305の坏蓋が包含層から出土した。8世紀初頭のものと考えられる。土師器については確実なものは出土していない。

平安時代のものとしては、碗である306の灰釉陶器Ⅳ-1期（10世紀後葉、松井一明 1989）が1点が包含層より出土した。

中世の土器については、307～316の渥美・湖西産の山茶碗、317・318の金谷産の山茶碗、320の渥美・湖西産の壺、321・325の常滑産大甕である。時期は山茶碗は12世紀～13世紀代（松井一明 1993）、常滑産は14世紀後半～15世紀前半（中野晴久 1994）となる。土師器としては323の12世紀代前半に該当する清郷型甕（佐野五十三 1990）がある。324も同時期の清郷型甕と思われるが細ハケメ調整が残り、古墳時代の外来系土器の可能性もあるが、産地は不明である。

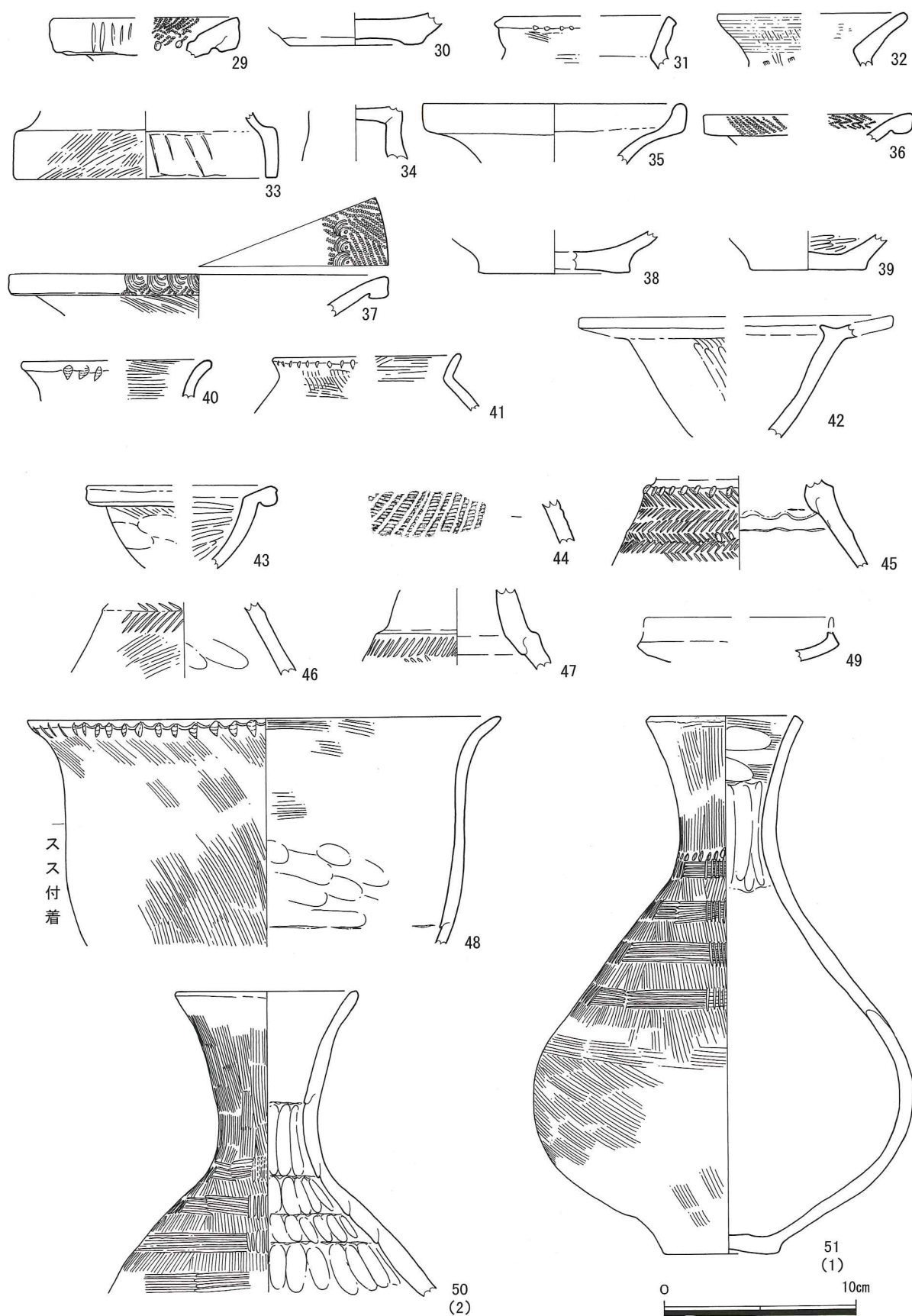
戦国期の土器については、319・322の瀬戸大窯Ⅰ期に該当するすり鉢が出土している（藤沢良祐 1986）。

その他、5の甗の底部、3・4の土製の土錘、6のふいごの羽口、7の土製支脚は古墳時代後期、鉄製品の2の鉄鏃と思われるものは古墳時代後期、8の鉄鎌は奈良時代以降のものと考えられる。



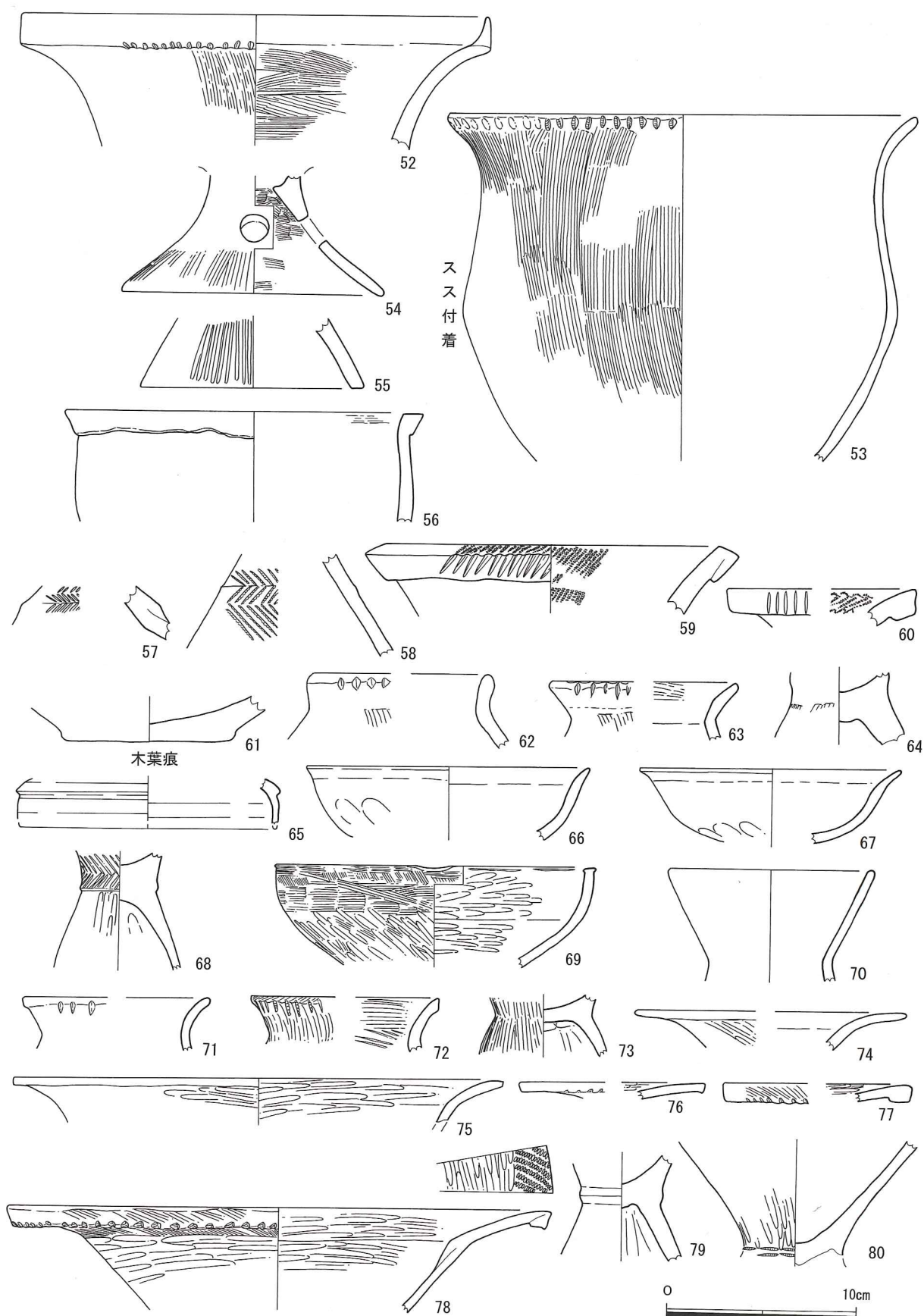
第18図 土器実測図1

1~8=SB1
9~21=SD2 (SB1)
22・23=SB3
24~28=SB4



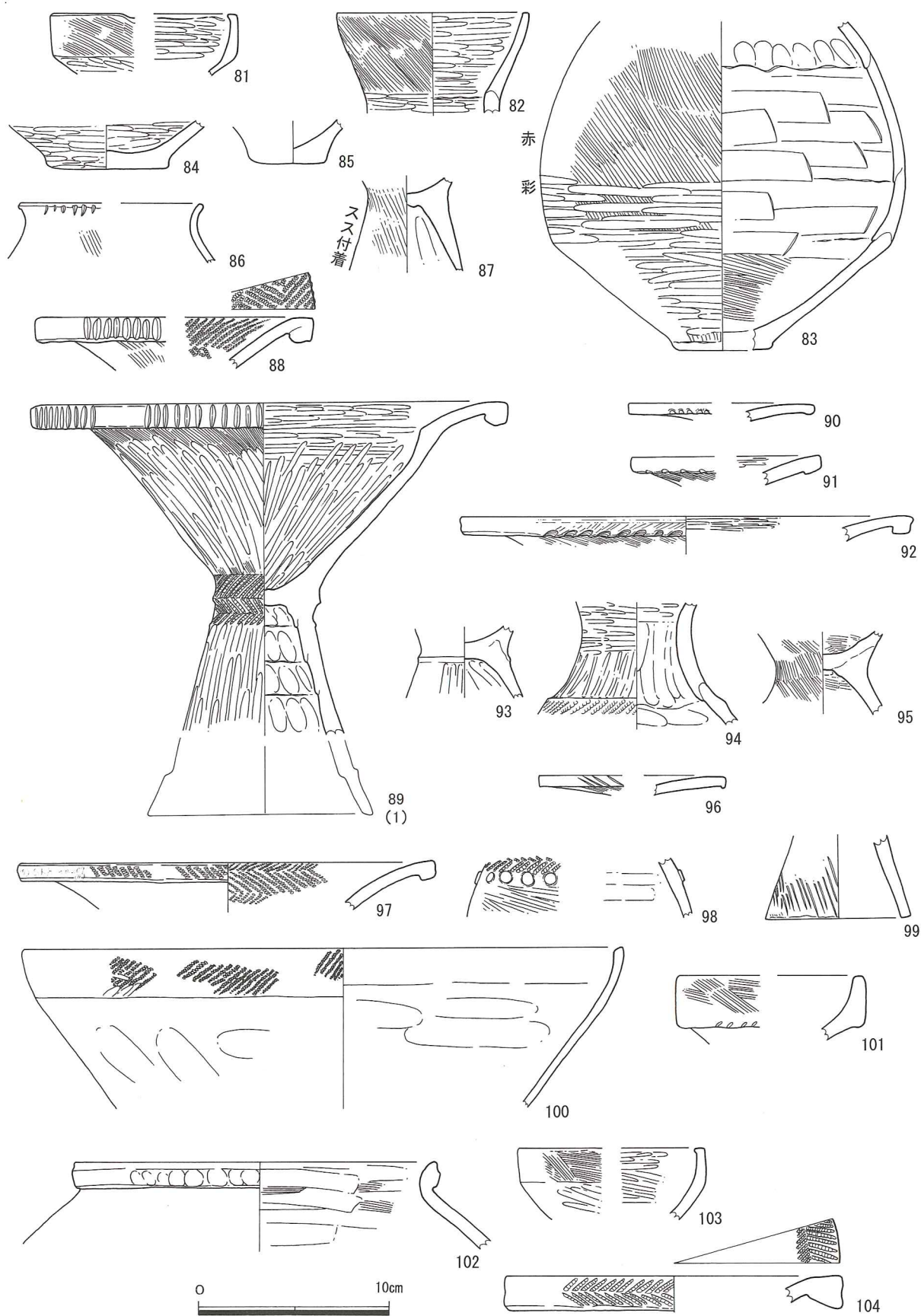
第19図 土器実測図 2

29~32=SB 4 49=SH 4
 33~41=SB 5 50・51=SX 1-1
 42~47=SB 6
 48=SB 6・P 4



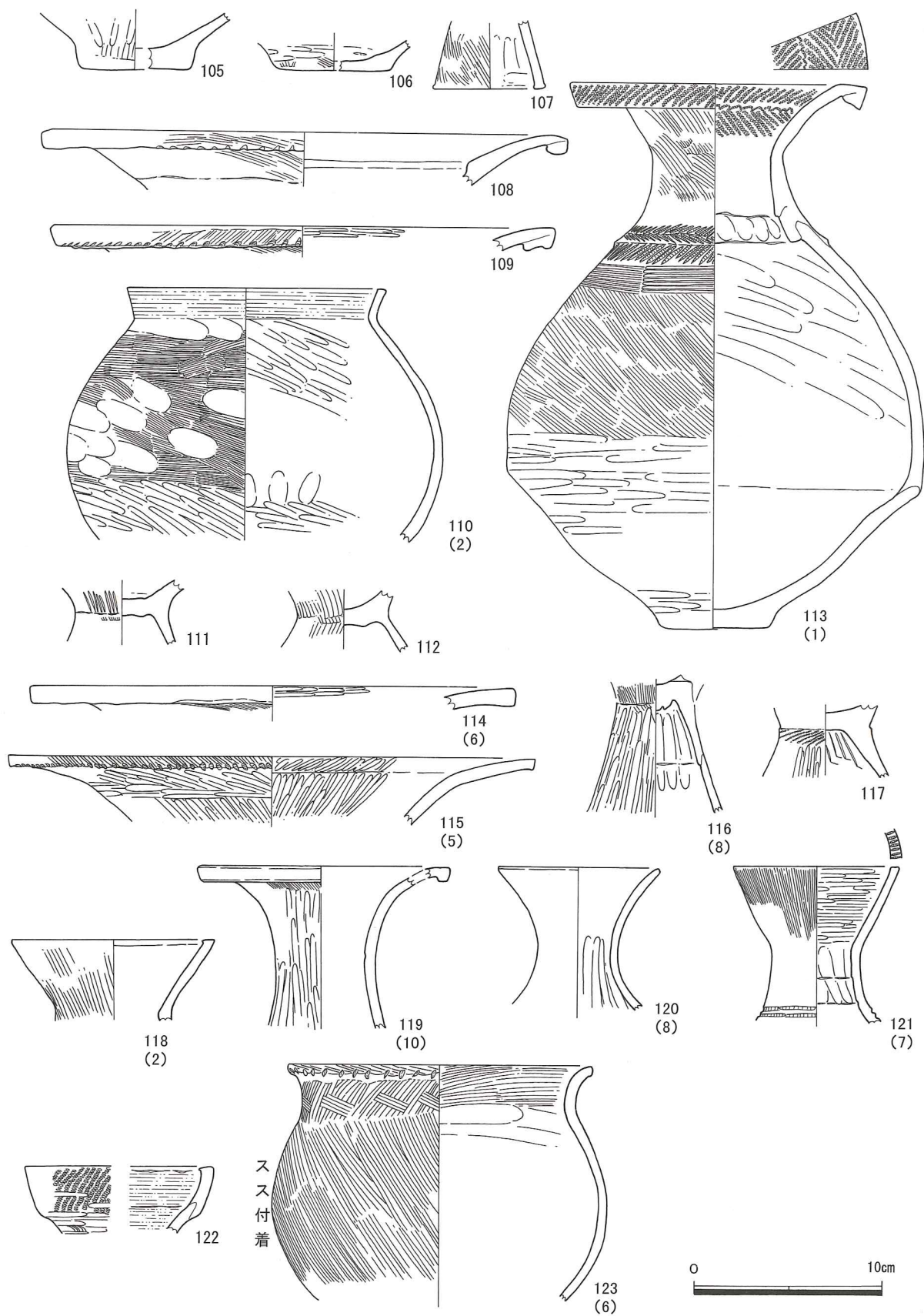
第20図 土器実測図 3

52・53=S X 1-1 68~73=SK 2
54~64=S X 2-2 74~80=SK 4
65~67=SK 1



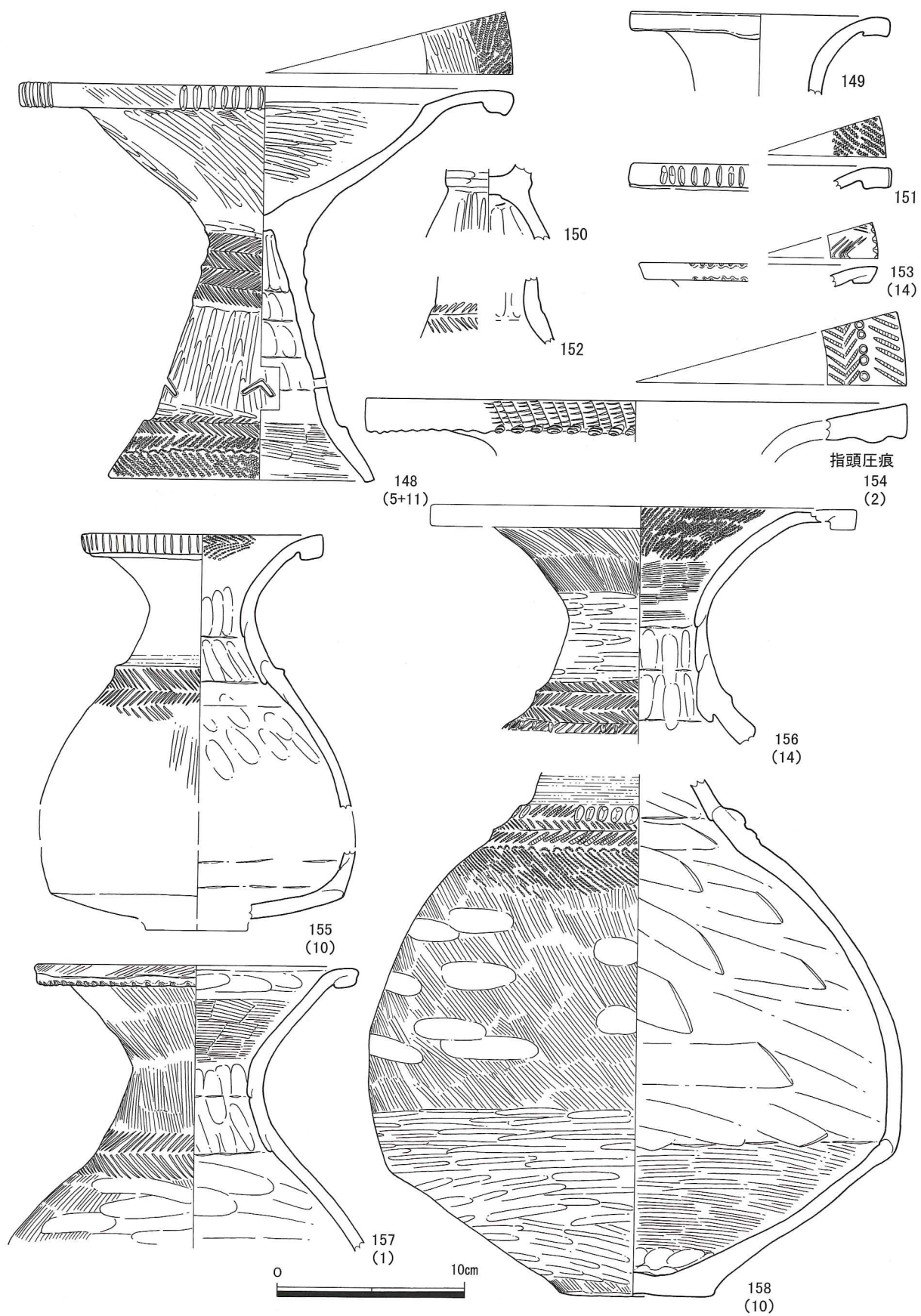
第21図 土器実測図 4

81~87=SK 4 96~99=SK 8
 88・89=SK 5 100~102=SK 9
 90~95=SK 7 103・104=SK 10

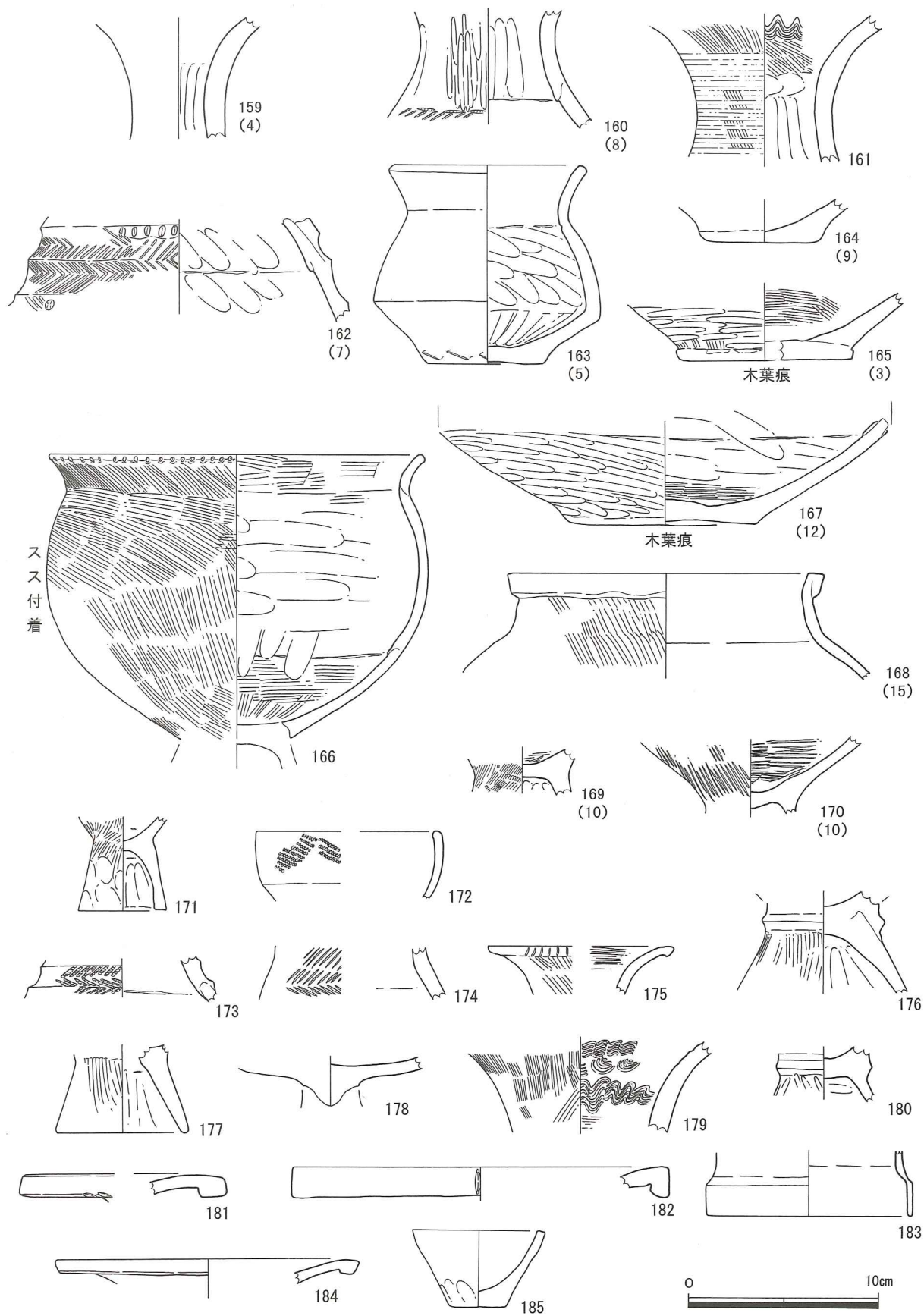


第22図 土器実測図 5

105~107 = S K 10
 108~113 = S K 12
 114~123 = S K 13

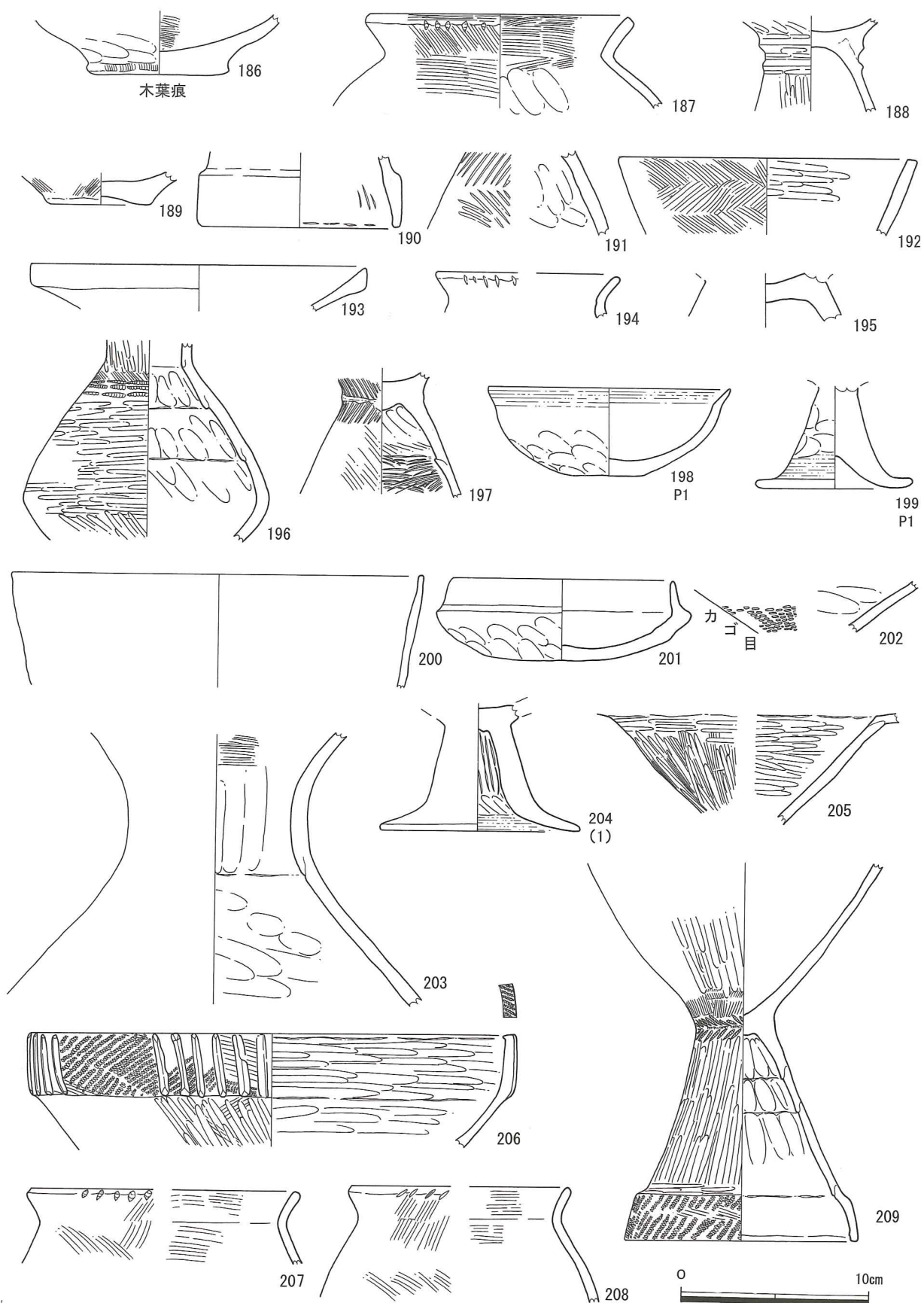


第24図 土器実測図 7 148~158 = S K 22



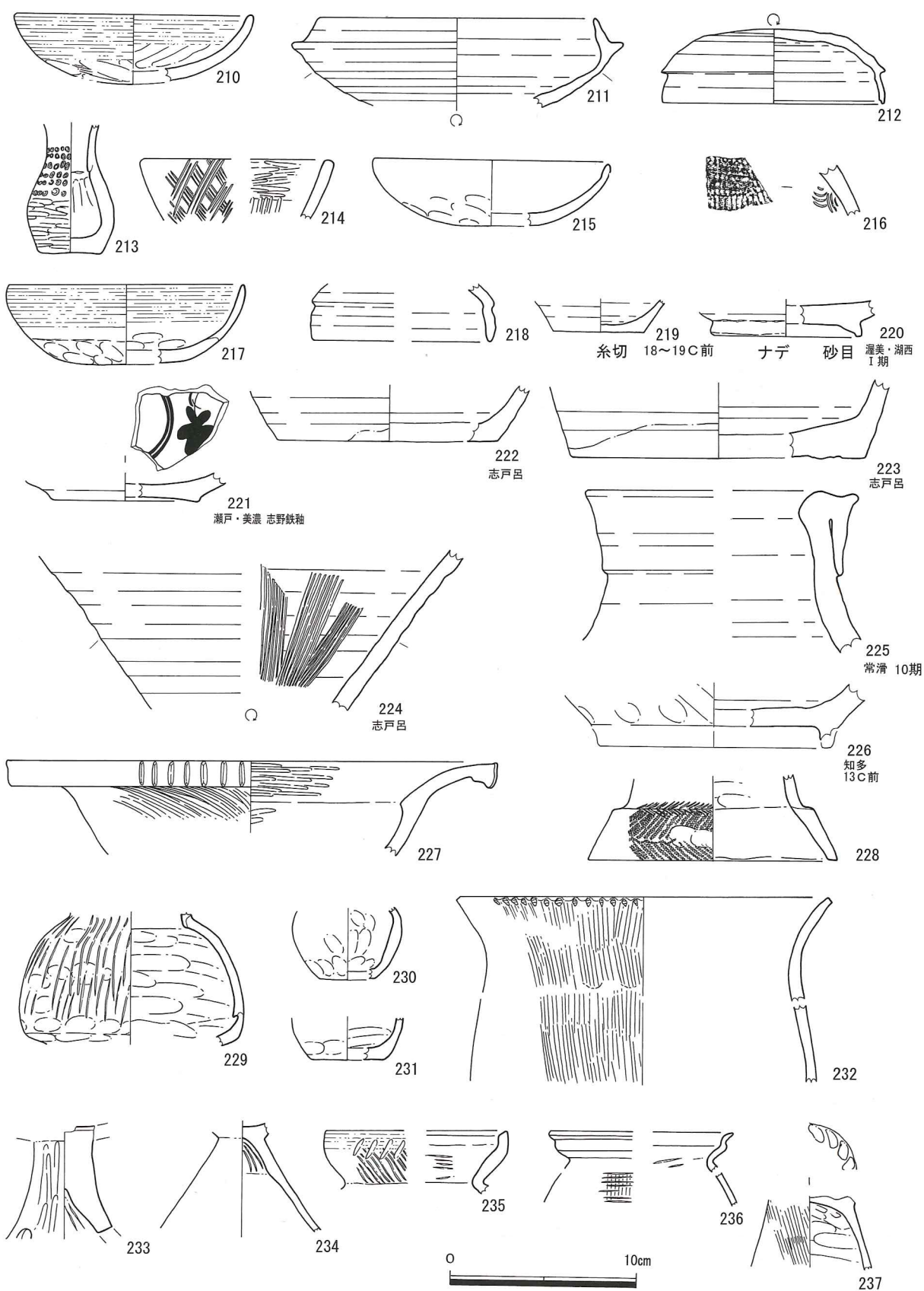
第25図 土器実測図 8

159~170 = S K 22
 171・172 = S K 23
 173~175 = S K 25
 176・177 = S K 26
 178 = S K 27
 179・180 = S K 28
 181・182 = S K 29
 183~185 = S K 30



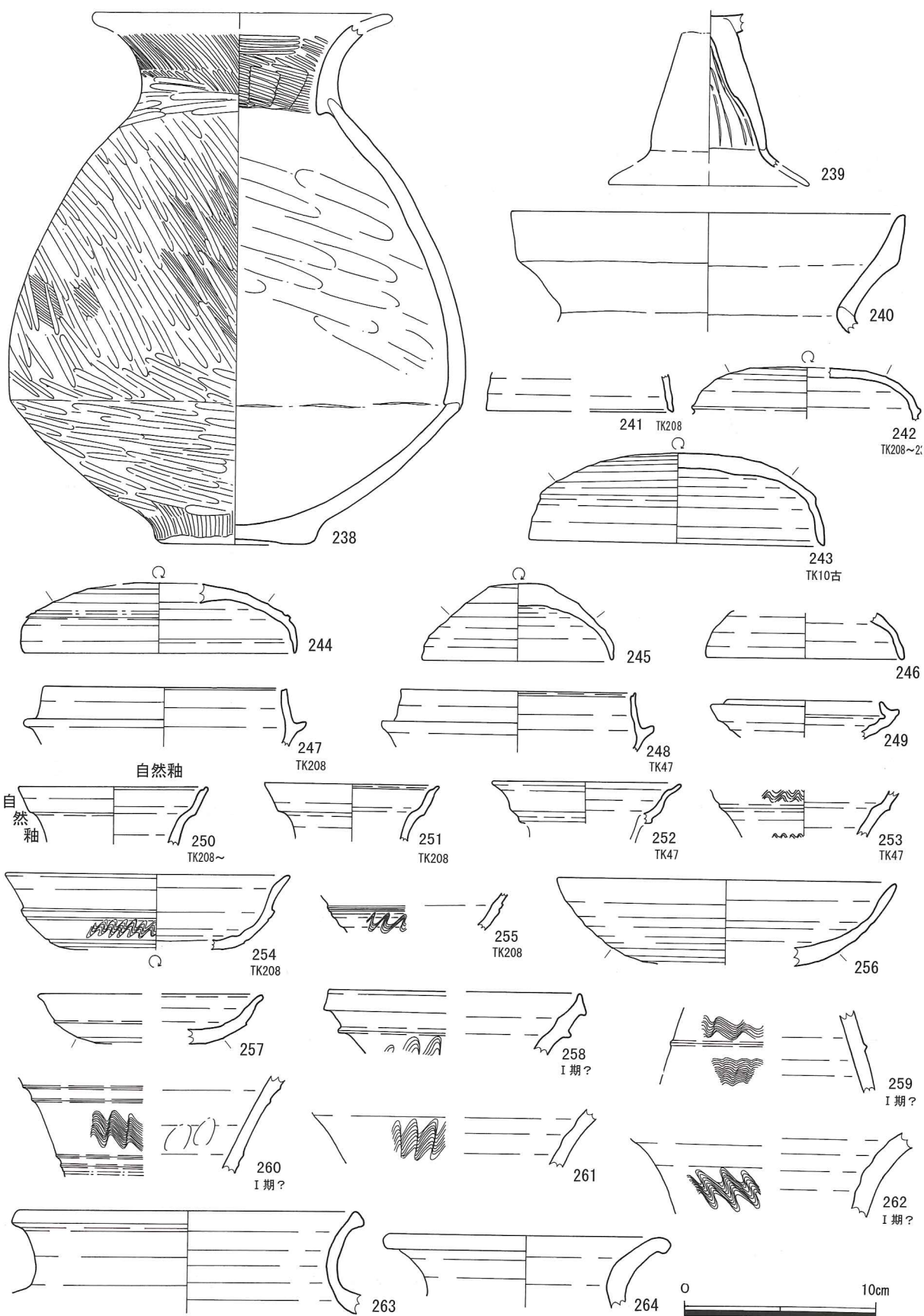
第26図 土器実測図 9

186・187=SK31 196・197=SK39 203=SP73
 188・189=SK35 198~200=SA1・P1 204=SP113
 190・191=SK36 201=SA1・P3 205~209=SP142
 192~195=SK37 202=SP55

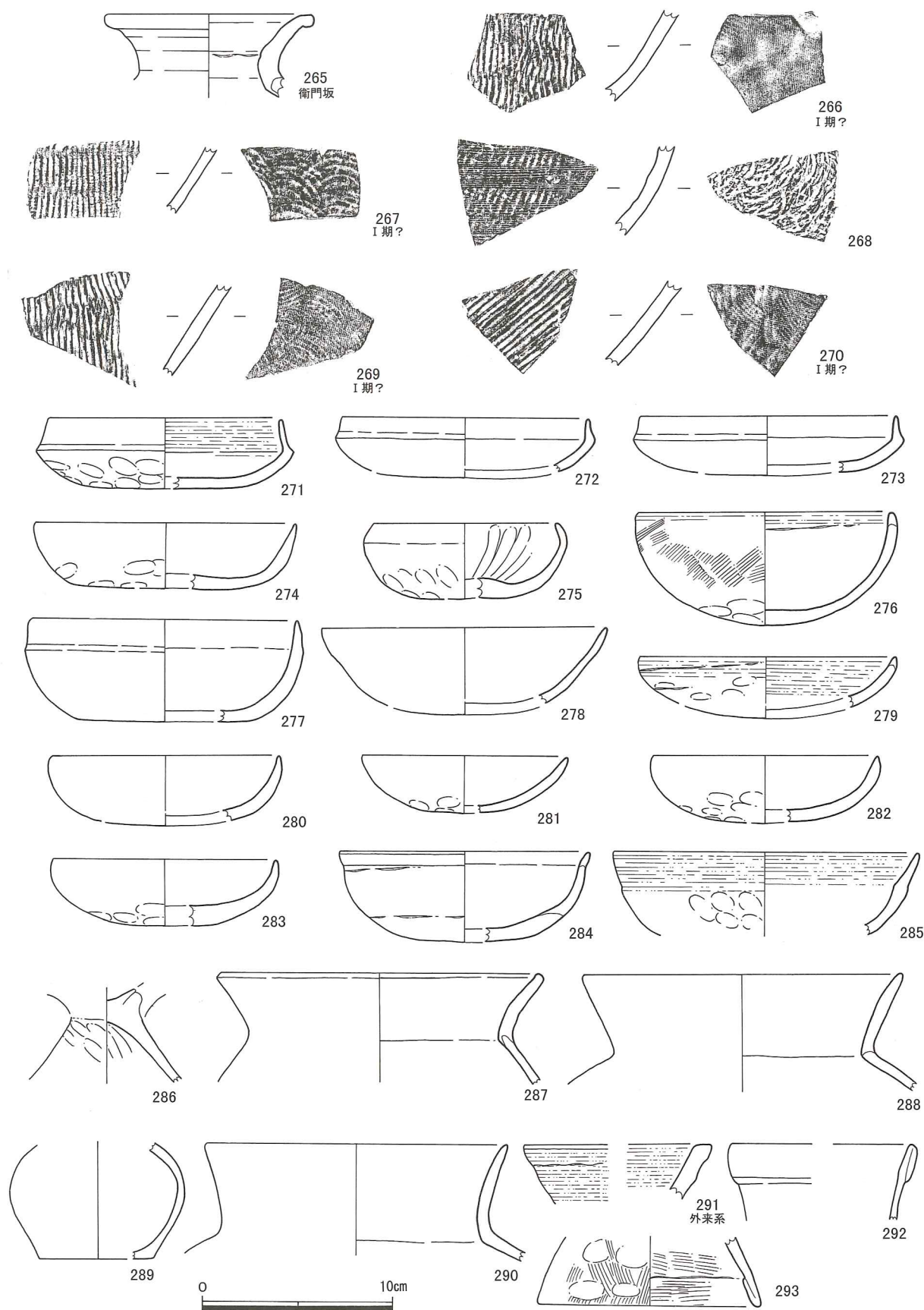


第27図 土器実測図10

210=S P 278 215=S P 586 219=近世溝 2
 211=S P 318 216=S P 647 220~225=近世溝 4
 212=S P 341 217=S P 708 226=近世溝 5
 213・214=S P 458 218=S P 721 227~237=包含層



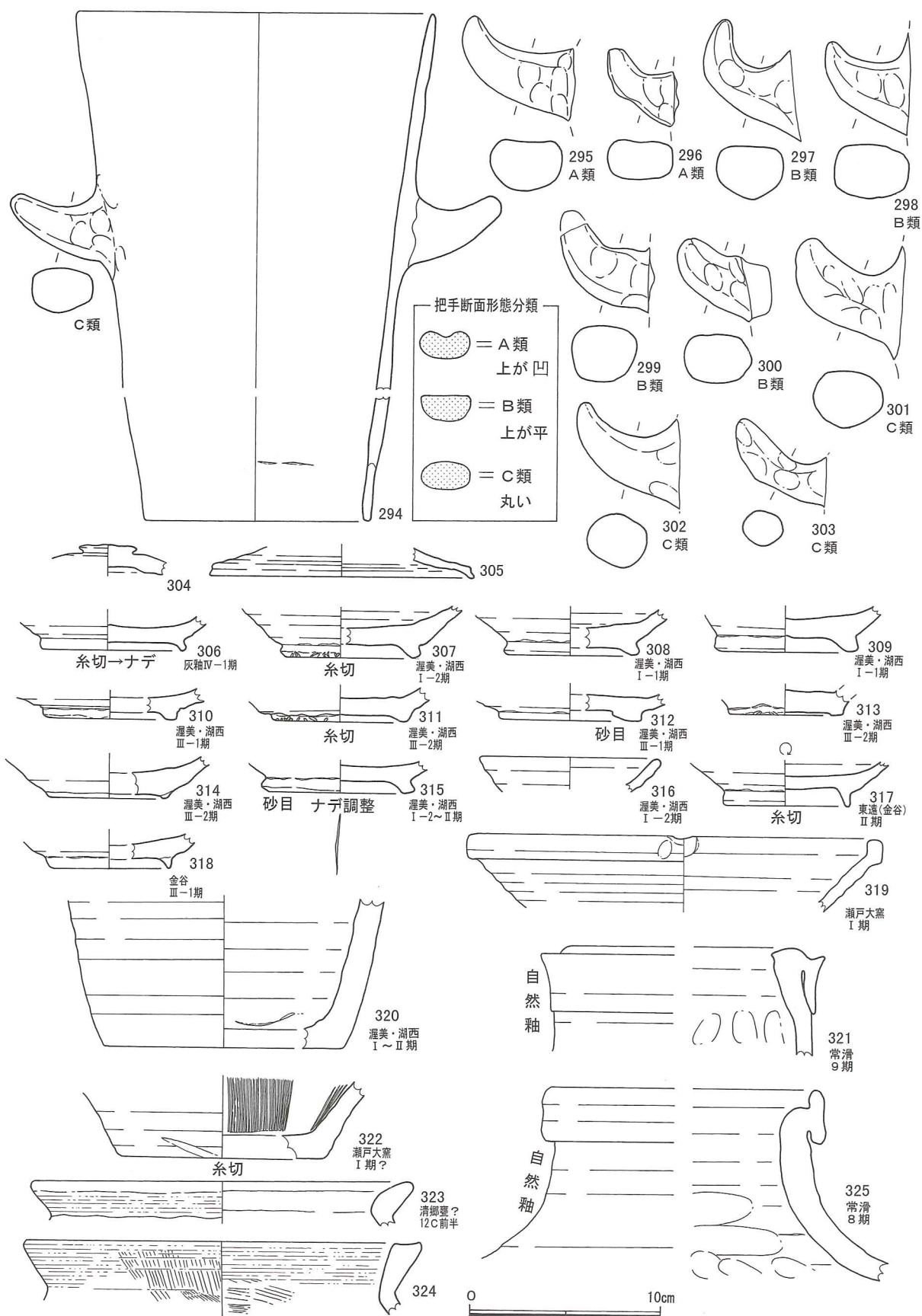
第28図 土器実測図11



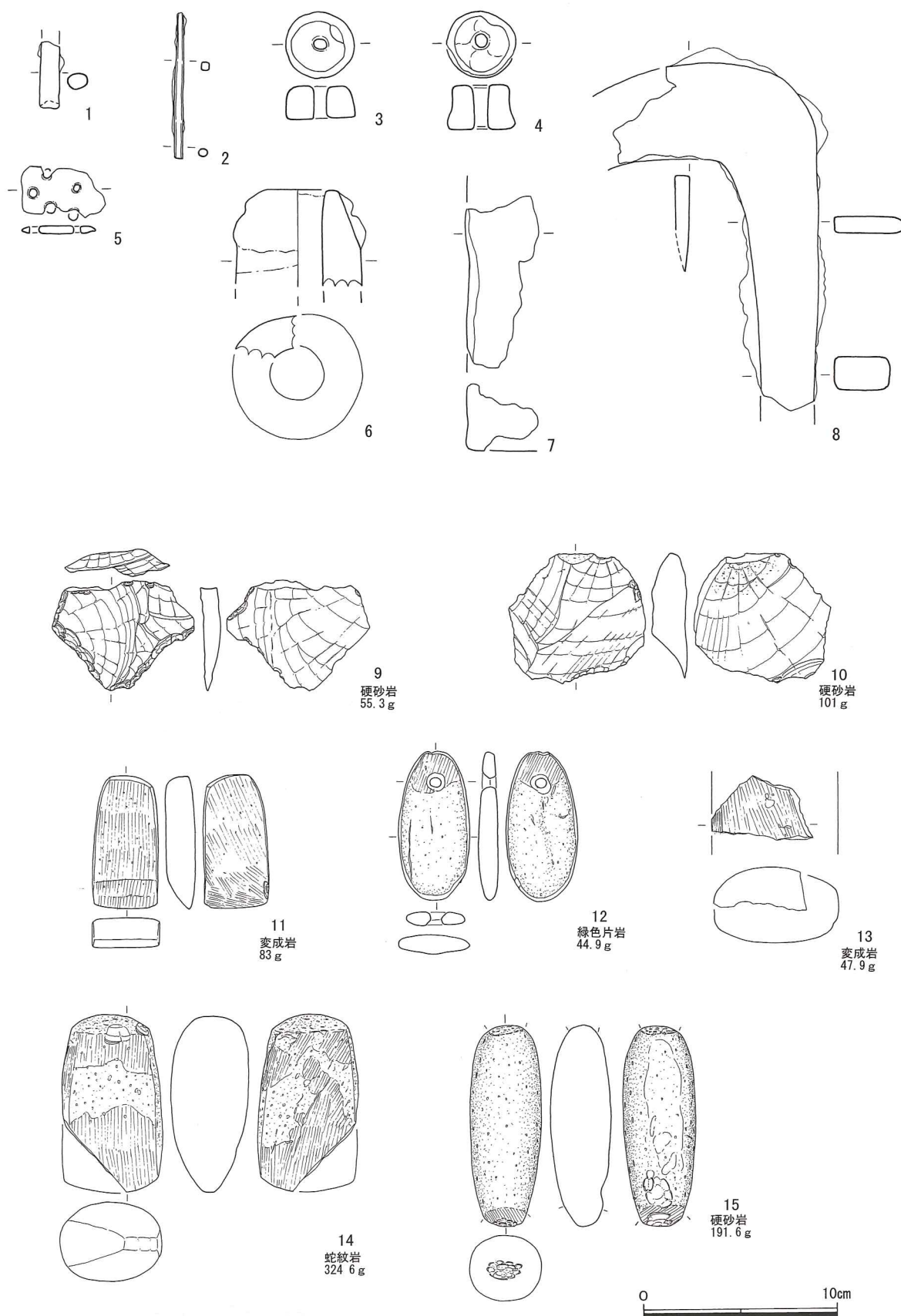
第29図

土器実測図12

265~293=包含層

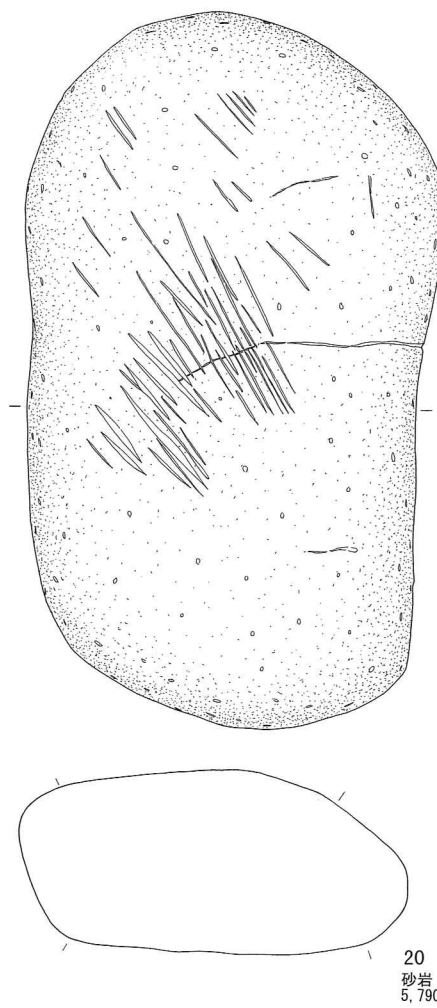
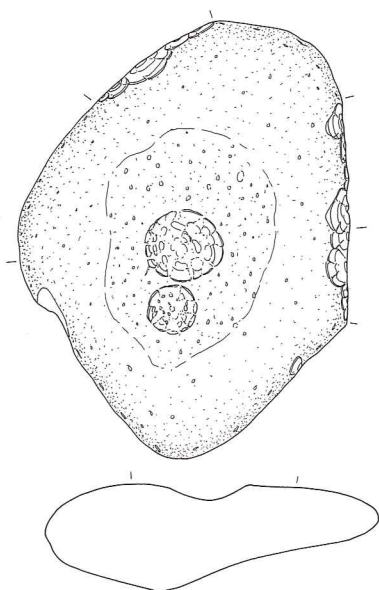
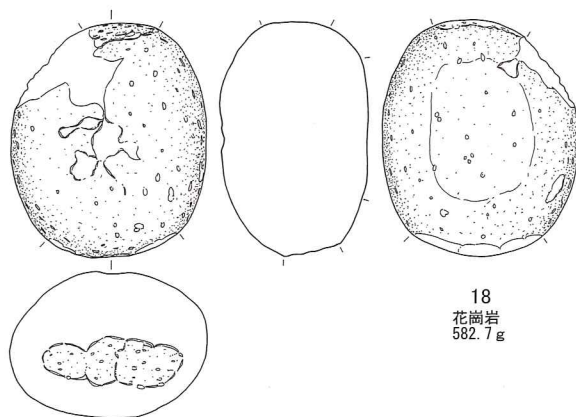
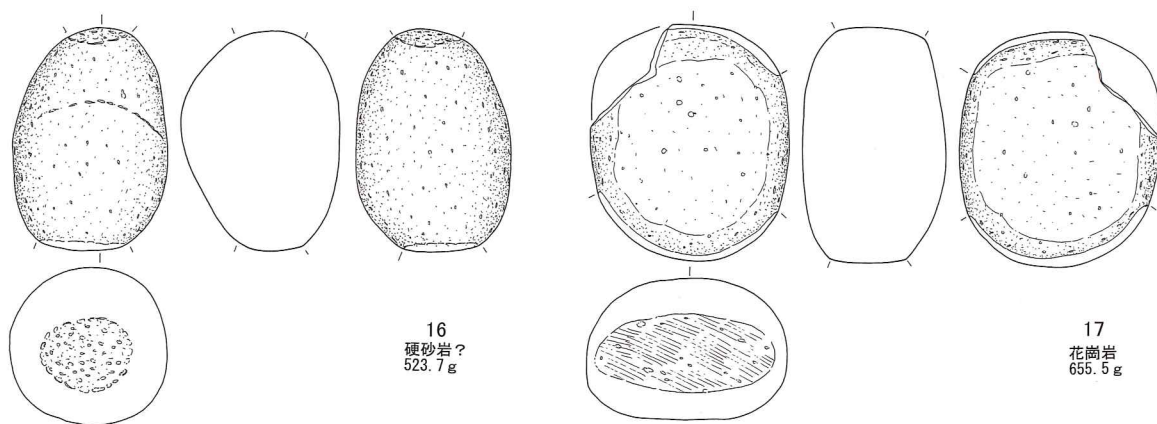


第30図 土器実測図13



第31図 金属製品1・石製品実測図1

1 = SB 2 9 = SB 2 13 = 包含層
 2 ~ 6 = 包含層 10 = SB 6 14 = SH 5
 7 = SD 2 11 = 包含層 15 = 包含層
 8 = 包含層 12 = SP 292



第32図 金属製品・石製品実測図 2

16・17=包含層
18=近世溝 4
19・20=包含層

第6章 第1次発掘調査の遺構と遺物

1. はじめに

冒頭の例言でも述べたように本報告の第7次調査は第1次調査のすぐ東隣の調査地点であり、本報告をするにあたり重要な資料となるため、改めて再整理し関連資料として掲載することとした。

第1次調査は中遠広域都市計画事業袋井駅前地区土地地区画整理事業並びに中遠広域都市計画道路事業に伴う埋蔵文化財（狐塚遺跡及び狐塚古墳）発掘調査で、袋井市狐塚古墳発掘調査委員会に委託され、川井正一氏（当時袋井市教育委員会、現茨城県教育委員会）が担当した。

発掘調査は昭和49年7月17日より始められ同年12月17日までの5ヶ月間で完了した。当時の調査経過記録によると、当初の計画では夏休みを利用し同年7月から調査を始め同年9月末日までに終了する予定であった。しかし、当初見込んだよりも遺跡の規模が大きかったため、協議の結果調査を12月20まで延長する願いを9月30日付けで提出し、認められたとのことである。

なお、当初の遺跡の名称は1960年刊行の静岡県遺跡地名表では「狐塚古墳」の登録のみで、古墳周辺に広がる集落跡については遺跡名称の登録がされていなかったため第1次調査の結果「狐塚遺跡」と命名されたい。ところが、その後1979年刊行の地名表では、地名を採用し「掛の上遺跡」（掛之上遺跡の誤）と改名されたため、第2次調査以降は「掛之上遺跡」の名称が正式のものとなった。

今回の再整理にあたって、現時点で残されている図面、写真、遺物を詳細に検討したところ、図面と写真についてはほぼ残されていることが確認できた。しかし、遺物については管理が不行届でかなりの資料が抽出不可能となり、遺構の時期認定は一部のものを除いて過去の担当者が残した記録や写真から判断することとし、現存遺物から時期が確認できない遺構があることを明言しておきたい。

2. 遺構

第1次調査でも検出された遺構は、第7次調査と同様に弥生時代中～後期、古墳時代後期の遺構が中心となるが、中世墳墓や狐塚古墳前方部の調査も行っている。以下、遺構別に記述を進めたい。

方形周溝墓（SZ）

方形周溝墓は調査区東側で弥生時代中期のもの、調査区西側の狐塚古墳墳丘下より後期のものが検出されている。中期のものは全体が検出されているものは6号墓のみで、やや認定基数に検討の余地があるが、現地担当者によると中期の方形周溝墓は5～13号墓の8基となる。ただし、5号墓の南側に方形周溝墓らしい溝が2本存在しているので、もう1基あった可能性も捨て切れない。

中期の5～13号墓の平面形態は、所謂四隅に陸橋をもつ東海・南関東型中期方形周溝墓になると思われる。規模も一辺8～9mを測るものがほとんどと推測され、大きさは比較的均等なもので構成される。それぞれの周溝墓は互いの溝を結合して再利用して構成されるもので、遠江の中期方形周溝墓に特徴的なものである。群構成については第7章で検討したい。

主体部は5号墓のみで確認され、長さ1.9m、幅1.2mを測る比較的大形の土坑である。木棺の小口板を設置するための小穴はもたないので、本主体部に埋葬されたと推測される木棺は、木棺Ⅰ類のなかでも比較的大形の部類に入る展葬可能な木棺となりそうである（松井一明 1998）。他の周溝墓の方台部埋葬主体は確認できていないので、少なからず低墳丘の盛土をもっていたと考えられる。他に7号墓東溝の中に長3.4m、幅0.5mを測る土坑らしいものが確認されている。所謂溝内埋葬土坑であろうか。5号墓方台部より検出された焼土坑は、主体部と切り合うことから周溝墓に先行する遺構と考えられたものである。しかし、近年の高尾向山Ⅱ遺跡の方形周溝墓などで、周溝墓を作る前の植物

の残骸の焼却、あるいは祭祀のためと考えられる焼土坑が発見されてきており（袋井市教育委員会1996）、一概に周溝墓と関係のない遺構と言うこともできないものである。

出土遺物は、各周溝墓の溝内より土器のみが出土している。復元可能なものは5号墓西溝で壺、同南溝で土器棺と報告された台付甕、7号墓東溝で壺型土器片集中、壺口縁破片、8号墓北溝で壺2個体、台付甕1、9号墓東溝で小形壺1等が主な出土品として報告されている。このうち今回現資料に当たったものは、5号墓西溝の壺1点、同南溝の台付甕1点、7号墓東溝の土器片、9号墓東溝の小形壺1点のみである。何れも中期後葉の白岩式段階のさほど古くはなりそうもないものである。7号墓西溝の壺口縁部破片は、写真で見る限り（写真図版編図版26-（1））中期中葉の嶺田式であるが、7号墓の西溝壺型土器破片を検討すると白岩式段階のものであるため、この土器片は混入品とも考えられる。なお、8号墓北溝出土の復元可能な壺と台付甕については、今回残念ながら発見することができなかったが、写真で見るかぎり（写真図版編図版26-（3））5号墓西溝出土の壺とさほど時期の変わらない白岩式新段階の一括資料になると思われる。

後期の方形周溝墓は4基確認され、全体の平面形態がわかるものはない。1・2号墓は検出された範囲で見ると、3～4隅に陸橋もつ中期以来の平面形態になると推測され、溝を連結して墓を構成している。4号墓については、少なくとも1辺の真ん中に陸橋をもつ形態となる。3号墓は狐塚古墳の周溝により破壊され平面形態は不明であるが、2号墓と接続する同形態の周溝墓かもしれない。なお3号墓では、弥生後期と思われる広口壺を身とし、蓋として別個体の壺頸部の大形破片を使用している縦置型の壺棺が陸橋部より出土している。この壺棺の現物は発見できなかった。

主体部は1・2号墓ともに検出されている。1号墓は長1.7m、幅1.0mの長方形の土坑、2号墓は長2.3m、幅1.2mの長方形の土坑である。何れもI類木棺で、1号墓主体部は伸展葬は不可能であるが、2号墓主体部は伸展葬可能なものと考えられる。後期の周溝墓から主体部が確認されたことから、低墳丘はあったと思われるが、狐塚古墳の前方部墳丘断面を検討するかぎり、あまり高いものではなかったようで、周溝墓の明確な盛土は確認できていない。

後期方形周溝墓の出土遺物は土器の小破片のものがほとんどで時期認定は難しいものであったが、1号墓東溝から高坏、壺の破片、南溝から台付甕の破片、北溝から壺の破片が出土し、いずれも後期前葉に比定されるものであると川井氏により報告されている。なお、これらの土器については現物にあたることはできなかったので、確実な時期は不明である。

竪穴住居（SB）

竪穴住居は古墳時代後期のものが5棟検出できた。第1次調査区では弥生時代ものは見つかっていない。竪穴住居はいずれも幅の狭い壁溝をもち、平面形態が方形で、規模はSB1が1.5mを測る極小形のものである以外、SB2～4が4m前後、SB5が5mとなる当地域ではごく一般的な竪穴住居である。主柱はSB3・5でみる限り4本柱になるとと思われる。

かまどはSB5で残存状況の悪いものが確認されたが、両袖は残っていたようである。貯蔵穴については明確に確認できていない。

時期のわかる遺物はほとんど出土していないが、SB5の埋土から出土した須恵器や土師器等を参考にとすると、坂尻I-2式の土師器が主体となるようである。

掘立柱建物（SH）

掘立柱建物についても構成する柱穴から出土する土師器や、総柱の掘立柱建物型式、柱間7間の掘立柱建物型式から、すべて古墳時代後期の掘立柱建物と認定した。

SH1・3～5は総柱掘立柱建物で、倉庫建物と考えられるものである。なかでもSH5は2間×

4 間、床支柱が布掘り状となる有力な建物である。SH 2 は建物の東半分が調査区域外となるため全体規模はわからないが、桁行き 7 間の長 9 m、梁行きは 2 間以上になる大形の土間造り建物である。

主軸方向から時期を検討すると、SH 1・2 と SH 3～5 は方向が異なることから、あるいは 2 時期の掘立柱建物が存在する可能性もあるが、建物配置から見ると SH 2 が母屋、SH 3～5 が倉庫群となる組み合わせも考えられる。これらの掘立柱建物の柱穴から土師器・須恵器の小破片が出土するが比較的時期の分かる SH 5 の柱穴出土した須恵器から見ると、TK10 段階の新しい様相を示すものが出土している。すると SB 5 から出土した土師器よりも新しい時期となり、第 7 次調査とは逆の堅穴住居から掘立柱建物への変遷が考えられそうである。第 7 次調査区で見られた掘立柱建物を区画する柵列については、第 1 次調査区の現地調査時点では明確に捉えられていないが、写真や図面から見ると大形の柱穴らしいものも確認され、柵列の復元もできそうな状況である。具体的な古墳時代後期の集落構造は、推定も交えることになるため第 7 章で検討する。

狐塚古墳

狐塚古墳は調査区の西端に所在し、平野部との標高差 7 m を測る段丘上に位置することになる。古墳から平野部への眺望は北・西・南の広範囲にわたるものであり、なかでも北側には近世東海道の袋井宿が存在し、おそらく古墳時代の交通路もほとんど近世東海道と同じ場所を通過していると考ええると、古東海道を意識した極めて良好な場所に位置していることがわかる（白澤崇 1993）。

後円部は長年の原野谷川の侵食により失われているが、今回の発掘調査で後円部の墳丘の一部が確認されたことから、後円部を北に向ける前方後円墳であることが判明した。前方部は長 13 m、幅 21 m を測り、これらの規模から後円部を復元すると直径 30 m 前後となり、全長は 40 m 前後の前方後円墳になると推定される。とすると、後円部 1 に対して前方部が半分の規模になる、比較的短い前方部をもつ特徴が認められる前方後円墳となろうか（袋井市教育委員会 1993）。

埴輪や葺石等の施設、あるいは前方部の埋葬施設については確認されていない。周溝は前方部南端部分で一部検出され、幅 3 m 前後のものであったらしい。墳丘の範囲で前方部側面のラインは、第 45 図に示したようにほぼつかめたいが、くびれ部については明確に確認することができなかった。古墳の周溝からは TK 208～47 段階の須恵器が出土しているため、5 世紀後半の築造時期とも考えられるが、周辺の包含層からも同時期の初期須恵器が出土するので決定時期を示すものではない。

前方部墳丘の縦断の土層断面図が残されており、これを検討すると後円部盛土の矢印 3 ライン、前方部盛土の矢印 1 ラインが確認できた。土層の切り合いから見ると、まず後円部を盛土しその後に前方部を盛土してその間を更に盛土を充填していく様子が判明した。前方部の矢印 6 ライン、後円部矢印 4 ラインが確認できたことから、古墳の築造過程を復元すると、まず古墳時代代表土面に見られた方形周溝墓の盛土を整地して平らにし、後円部を矢印 4 ラインまで盛土し、さらにその上に盛土しまず後円部を完成さる。次に前方部矢印 6 ラインまで盛土し、次に矢印 2 から 1 の順で盛土を完成させる。最後に後円部と前方部の間の部分について、矢印 5 ラインまで盛土し、更にその上に盛土を行い墳丘を完成させたと考えられるのである。

中世墓

中世段階で塚の役割をしたと考えられる狐塚古墳の周辺を中心として、1・7 号墓の土坑墓 2 基、3・5・6 号墓の土坑を伴う集石墓 3 基、2・4 号墓の集石のみの集石墓 2 基、石製宝篋印塔の一部（現物不明、写真図版編図版 35-（3））が検出された。6 号墓ではかわらけが伴ったらしいが、銅銭を伴うものはない。4 号墓では火葬骨が集石下部から出土した。中世墓の該当時期は、周辺から出土したかわらけと石製宝篋印塔の型式から判断すると、大方戦国期も終頃の 16 世紀後葉と考えられる。

3. 遺物

遺物については縄紋時代の土器片や石器剥片、弥生時代中期～後期、古墳時代前期～後期、古代、中世の多岐に渡るものが出土している。ただし、写真や図面に掲載されている資料のうち、7号方形周溝墓の壺2点、8号周溝墓の壺4点や土器棺については現物にあたることはできなかったので、図示することはできなかった。以下、時代別に記述を進めたい。

縄紋時代の遺物

75の中期初頭の北裏CⅡ式と思われる小破片の土器、1、2の使用痕のある黒曜石製の剥片が出土している。

弥生時代の遺物

主に方形周溝墓より中期後葉の土器が出土しているが、後期の土器についてはほとんど当たることができなかった。3は条痕文系土器で水神平～丸子式段階のものと考えられる。5号方形周溝墓から出土している1の壺は球形に近い胴部をもち、2の甕は台付でハケメ調整の後に条痕仕上げをしている。この組成は第2次調査の1号方形周溝墓と同じであることから、白岩式でも新段階の資料と思われる。これに対して9号方形周溝墓出土の9は下膨れ形態で、古段階に属する形態をしている。他の資料については断片的で、時期を限定することはできないが、文様や形態から判断すると、7号と13号方形周溝墓の土器は白岩式の新しい様相を示すものと考えたい。

古墳時代の遺物

S B 3・4、5から出土している須恵器はT K 10段階のものが多く、土師器の高坏も坂尻Ⅰ-2式の組成を示している。これに対して、S H 3～5の柱穴から出土している須恵器も、T K 10段階に属するものが多いが、34のように新しい要素のものを含む。

狐塚古墳前方部周溝出土の39はT K 208、40はT K 47段階と考えられるものである。

初期須恵器をあげてみると、18・46はT K 47段階の甕、53も色調から見て5世紀段階のものと考えられる。T K 10段階のものとしては43の坏身、47の甕、51の壺、T K 209段階のものは41、42の坏蓋、49の壺、7世紀代のものとしては44・45の坏身、48・50の壺などがあげられる。54の土師器は大形の高坏の脚部と考えられるもので坂尻Ⅰ-3～4式に該当するものであろうか。

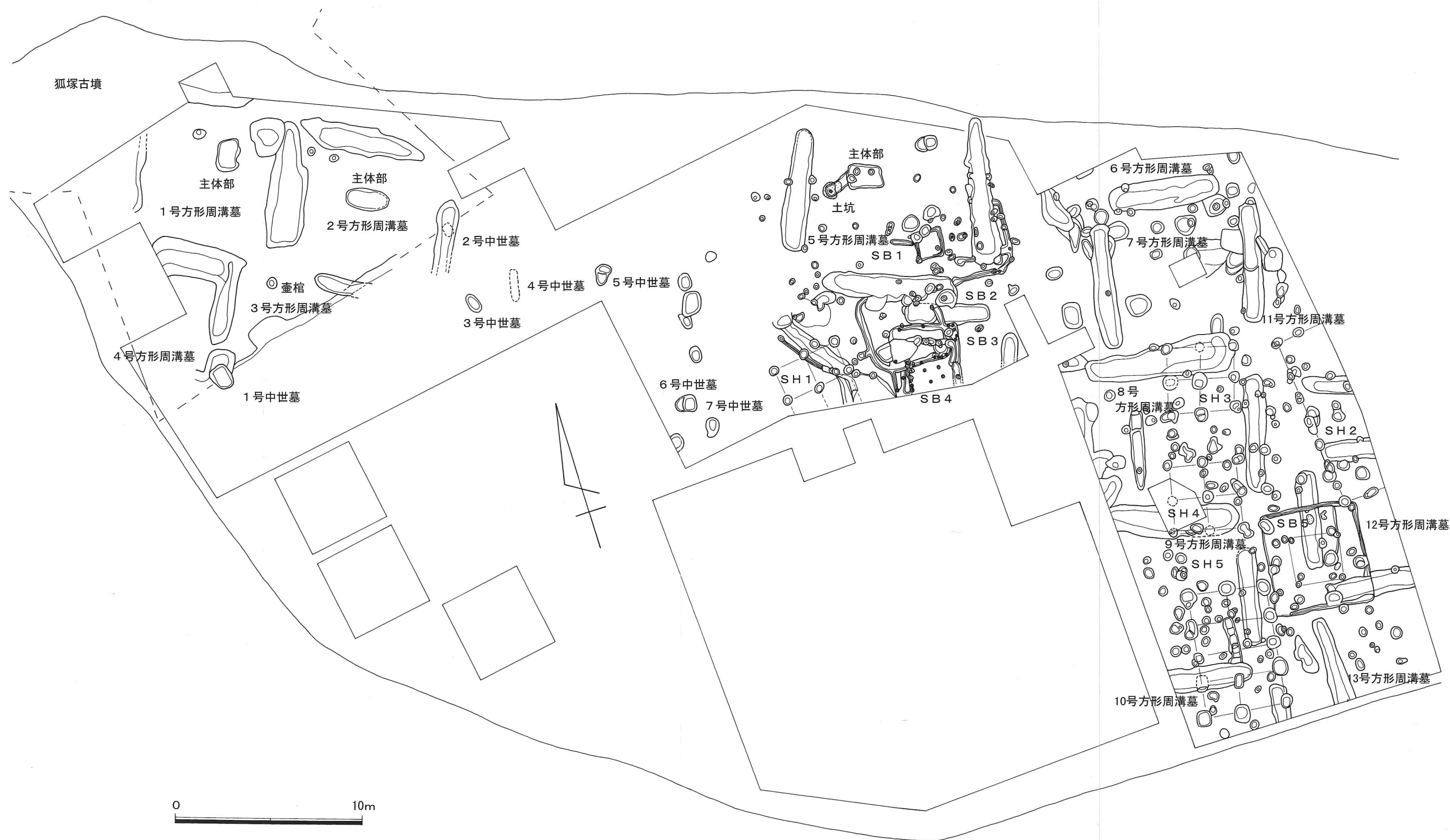
奈良時代以降の遺物

奈良時代の土器は8世紀初頭になる須恵器の56～60の坏蓋、61の坏身、8世紀後半の55の坏蓋が出土している。

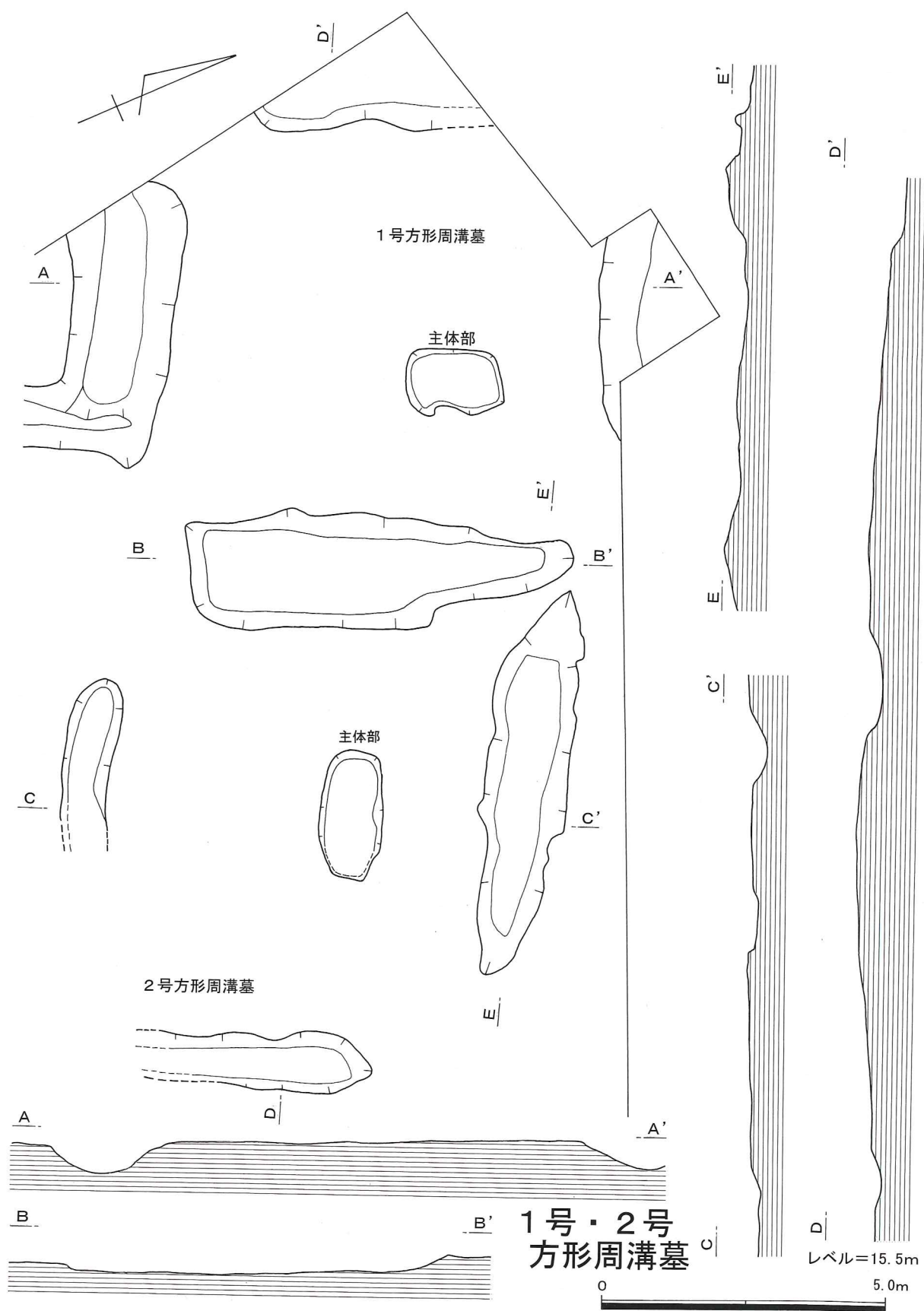
平安時代の土器は、10世紀中頃の清ヶ谷産と思われる灰釉陶器碗の62が出土している。

中世の土器は、63・64の12世紀代の渥美・湖西産の山茶碗、65・67の13世紀前半の常滑産の山茶碗・小皿、71・72・74の13世紀後半の常滑産の甕、68・70の常滑産の壺、76の13世紀前半の伊勢鍋、66の古瀬戸後期の灰釉小皿などが出土している。

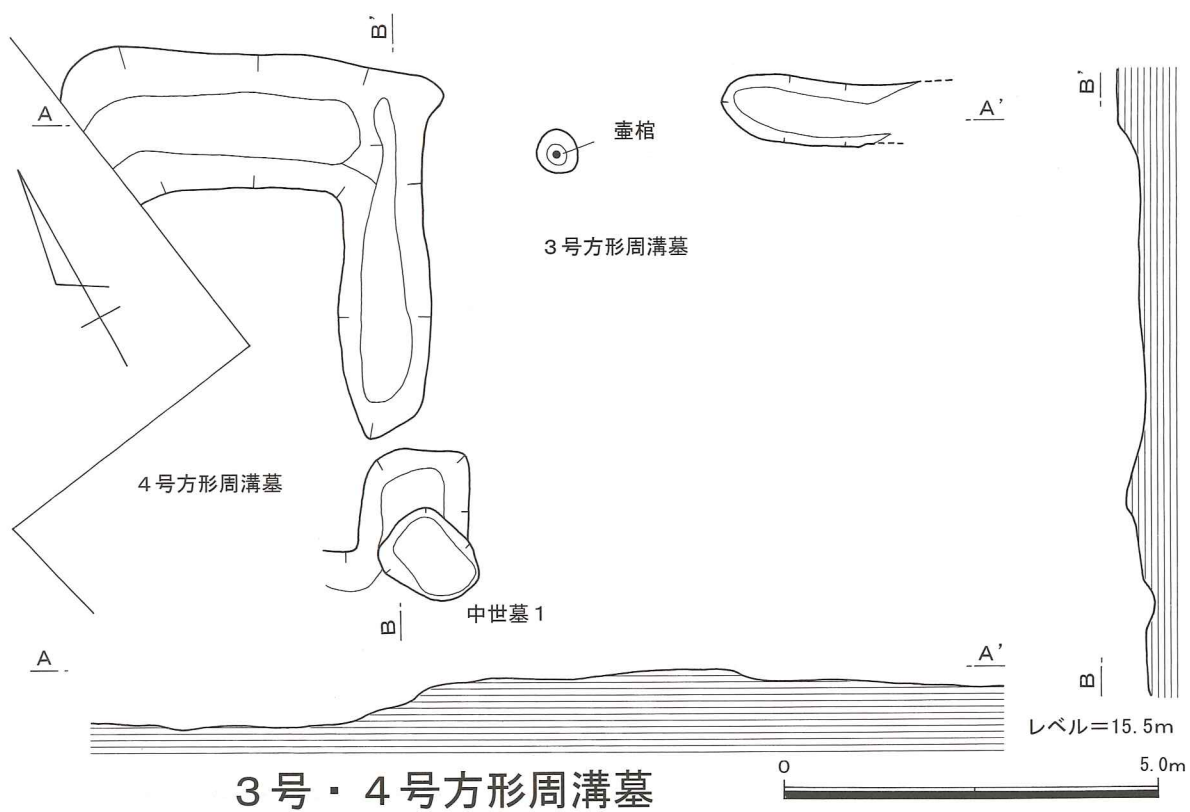
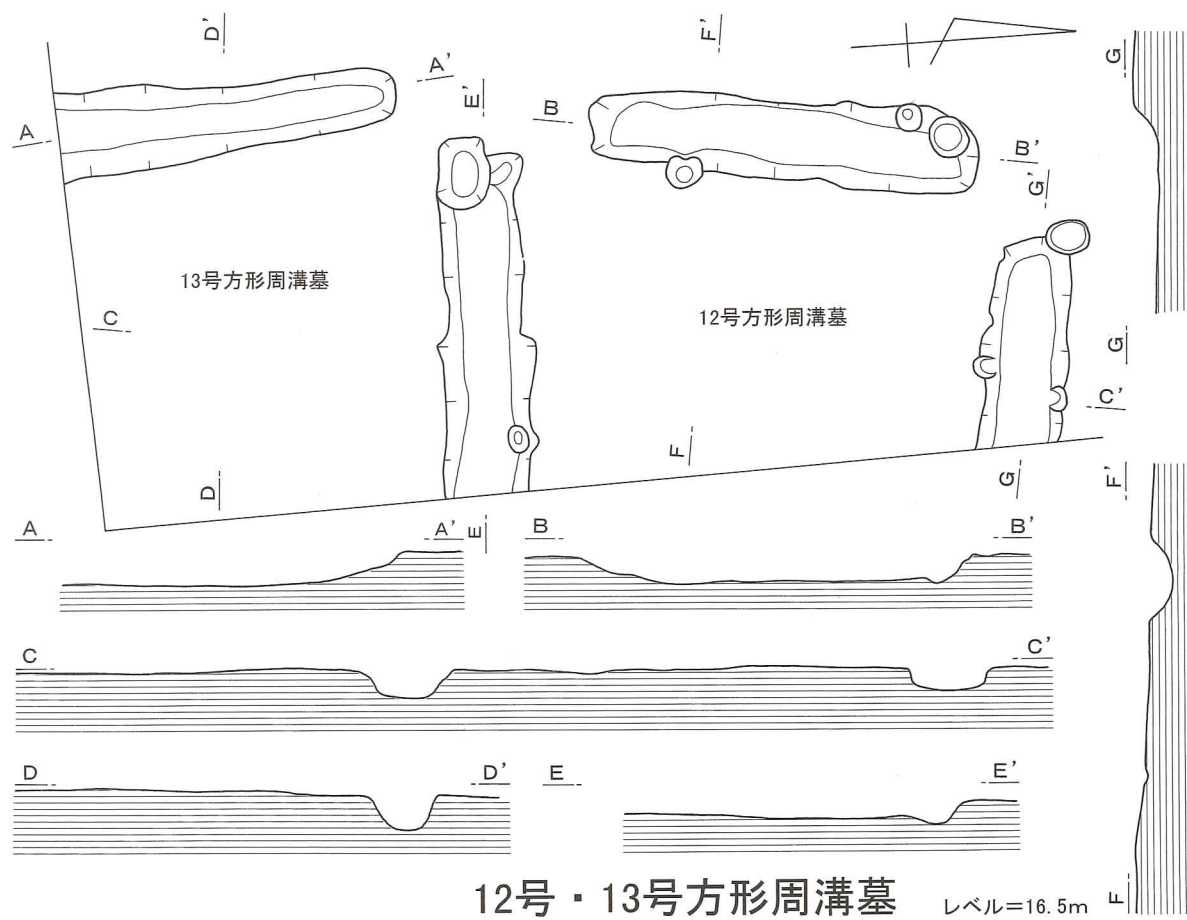
37・38の6号中世墓や73の包含層出土のかわらけは、16世紀後半になる非ろくろ整形のものであろう。



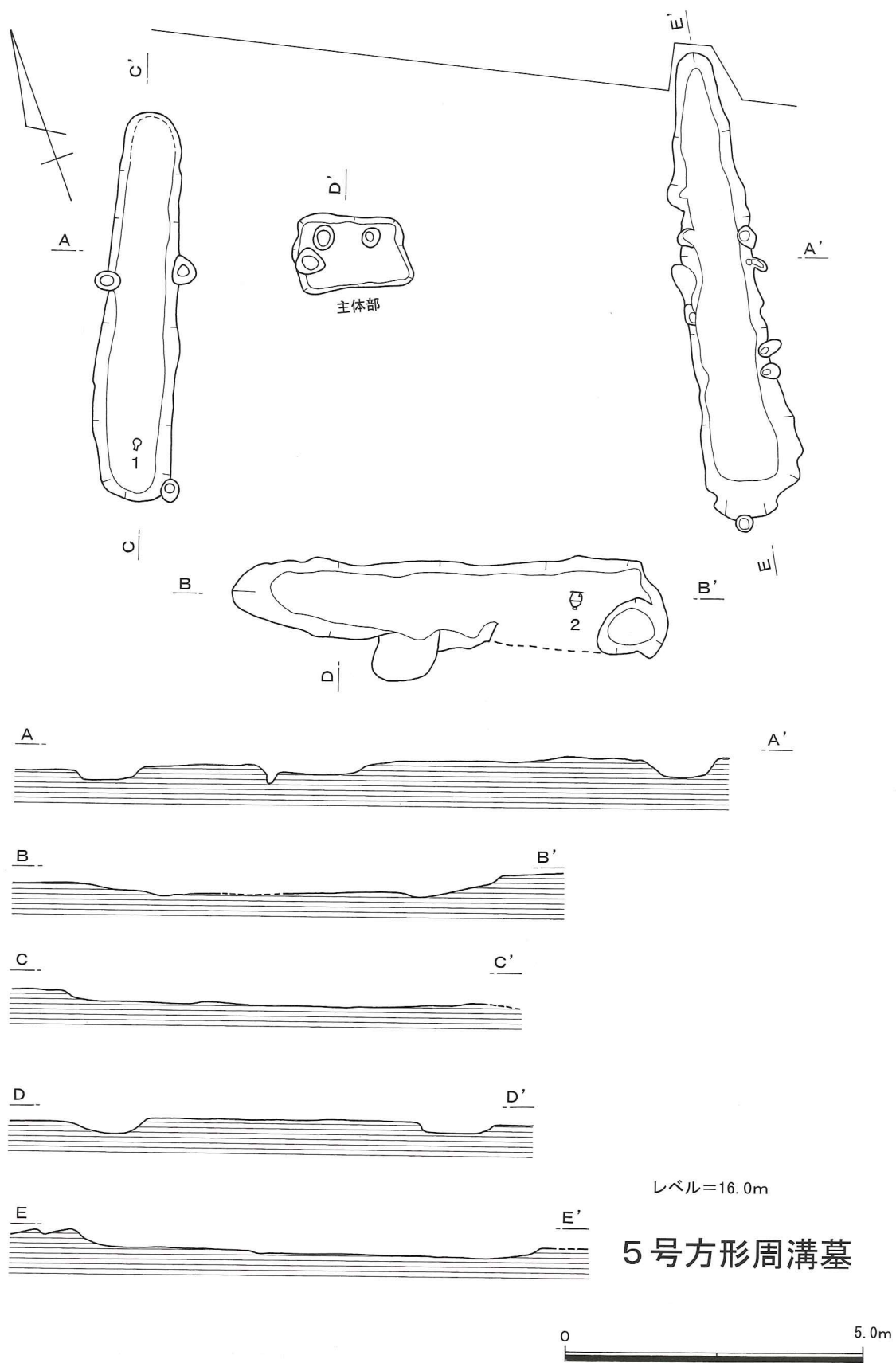
第33図 第1次調査全体図



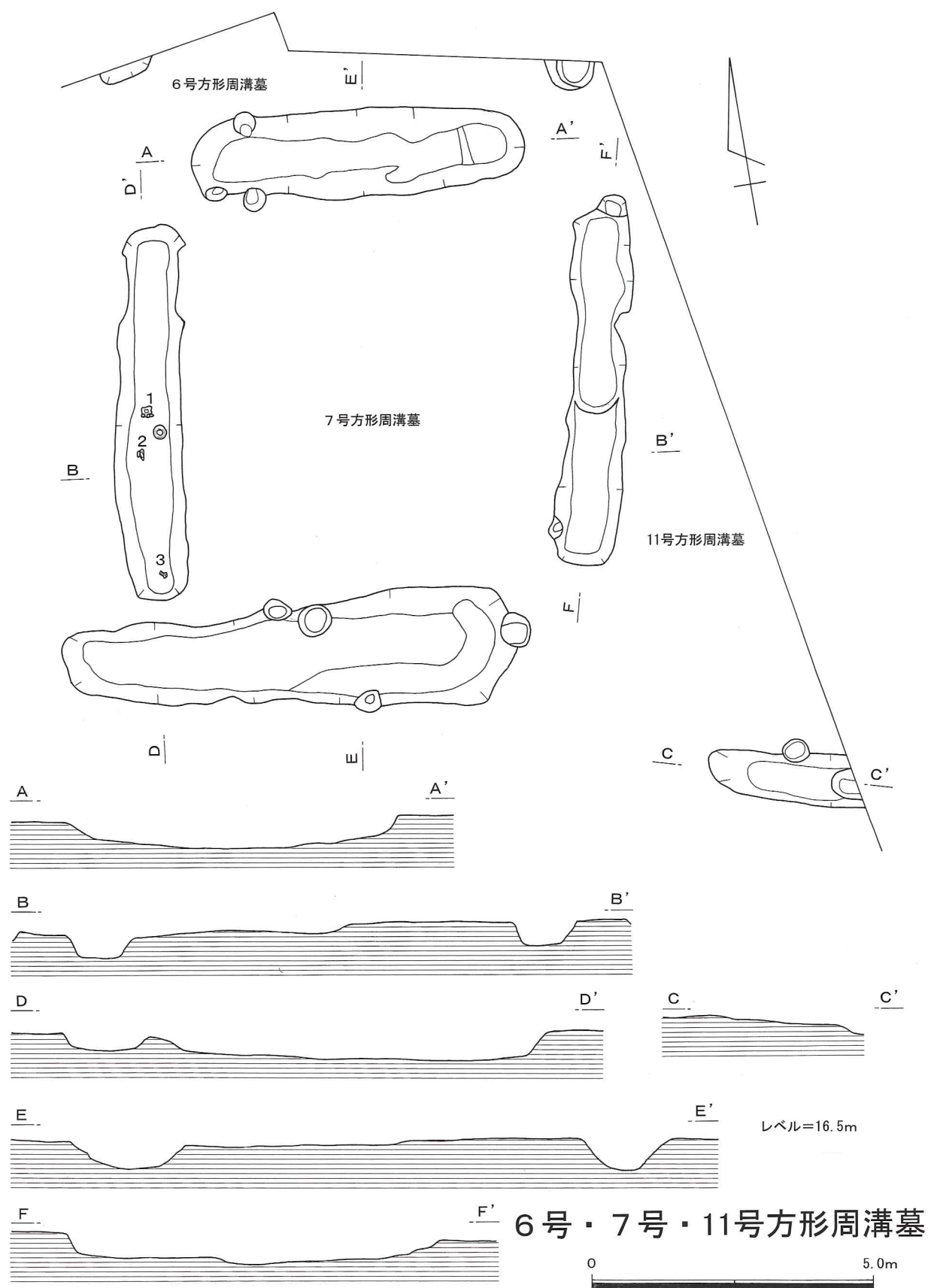
第34図 1号・2号方形周溝墓 実測図



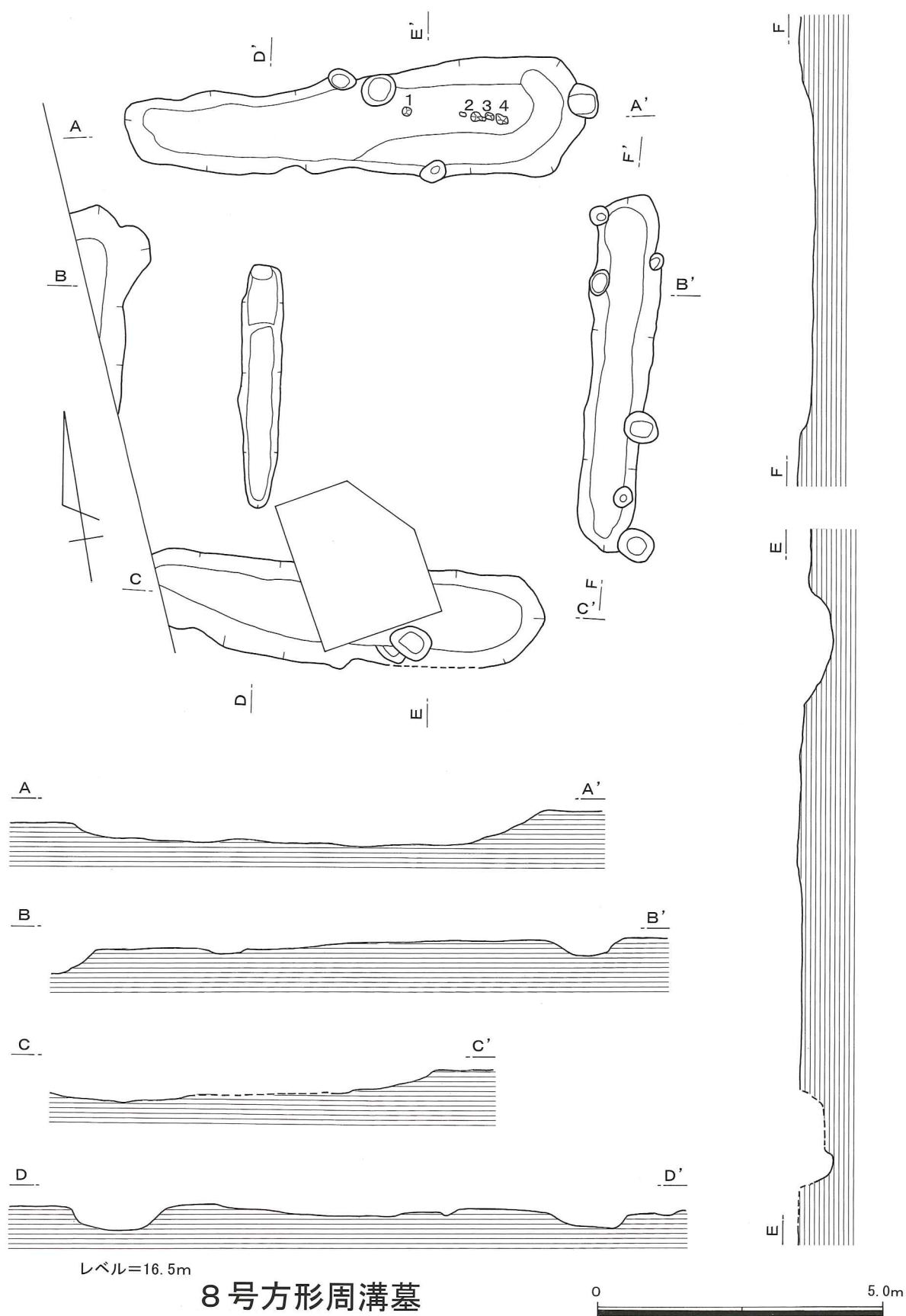
第35図 3号・4号・12号・13号方形周溝墓 実測図



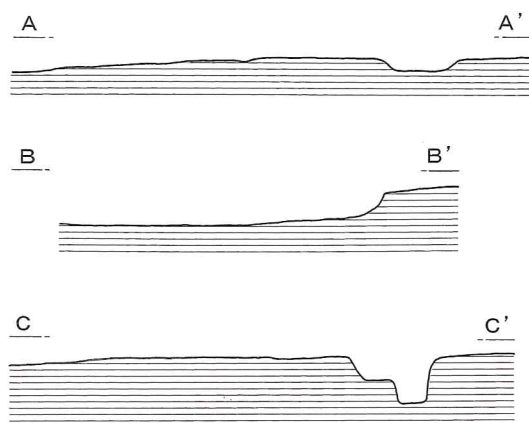
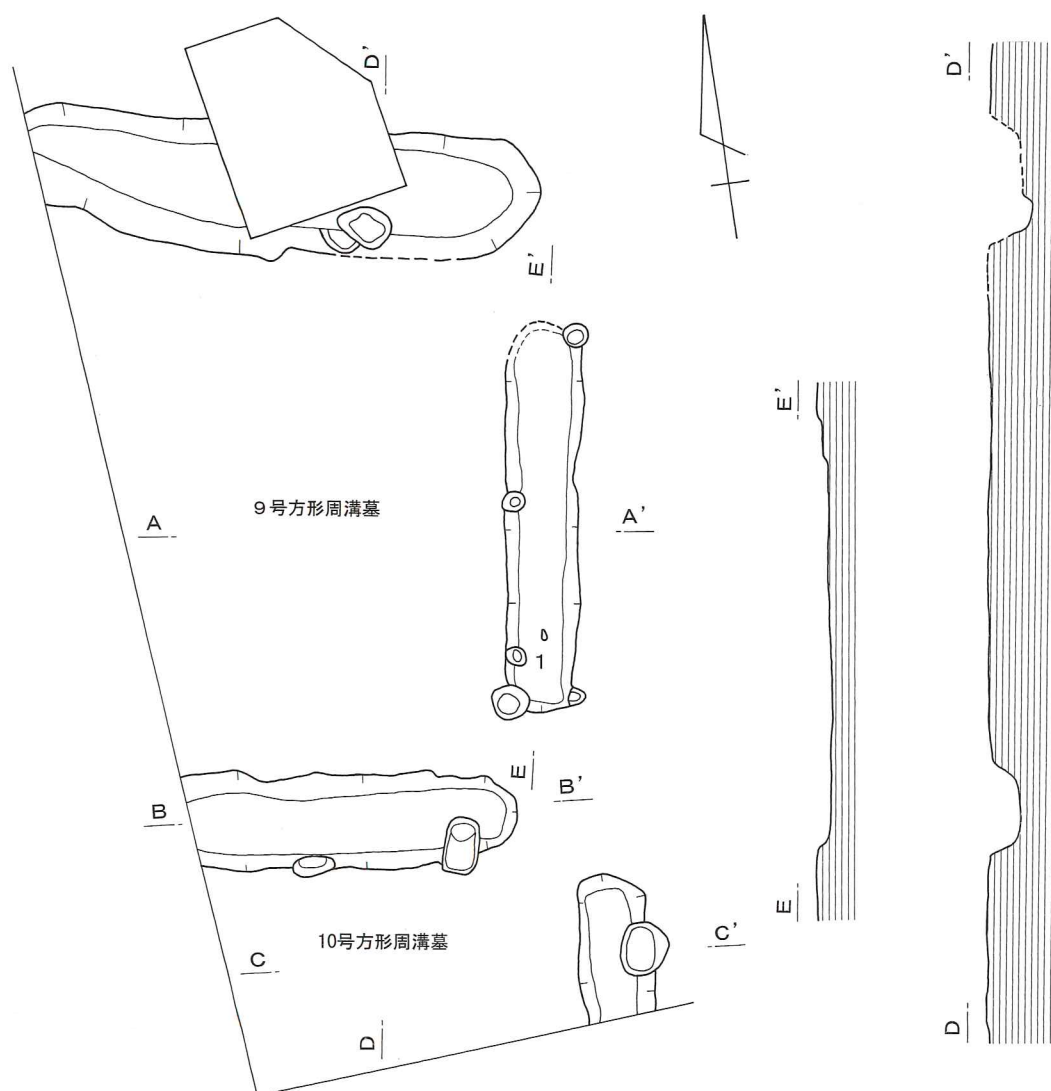
第36図 5号方形周溝墓 実測図



第37図 6号・7号・11号方形周溝墓 実測図



第38図 8号方形周溝墓 実測図

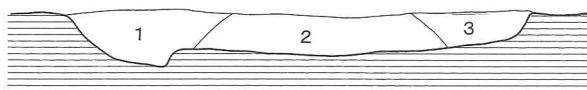
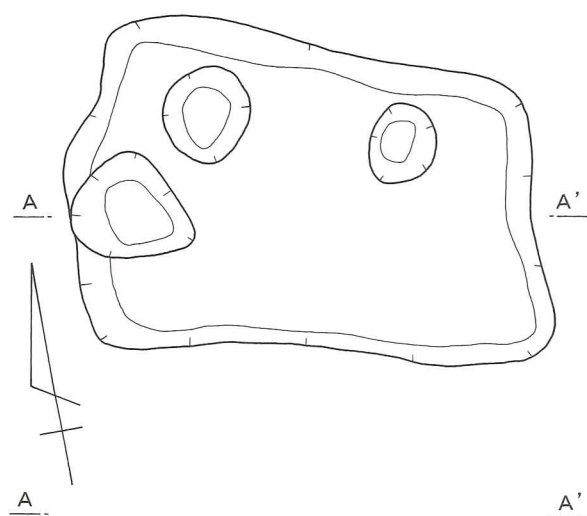


レベル=16.5m

9号・10号方形周溝墓

0 5.0m

第39図 9号・10号方形周溝墓 実測図



5号方形周溝墓主体部

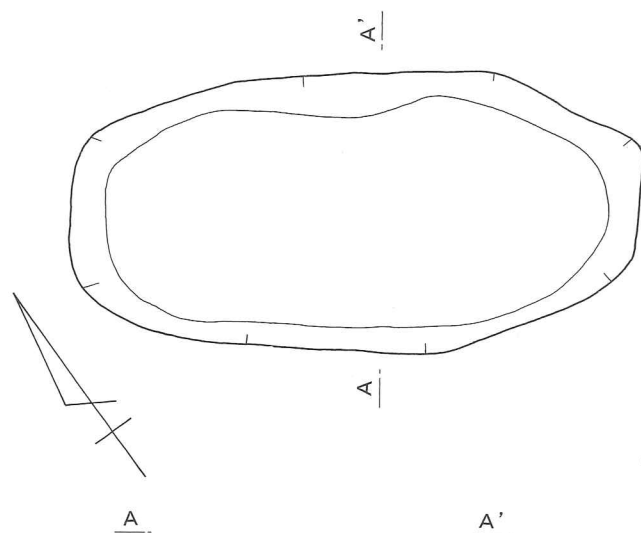
土層説明

1. 茶褐色土層
2. 黒褐色有機土層
3. 茶褐色土層

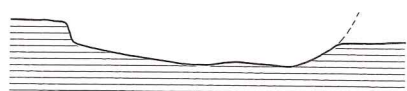


1号方形周溝墓
主体部

レベル=16.0m

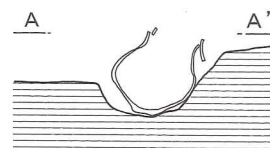
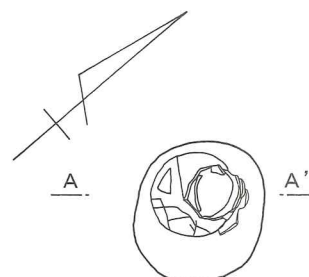


A A'



2号方形周溝墓主体部

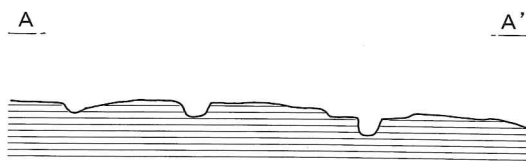
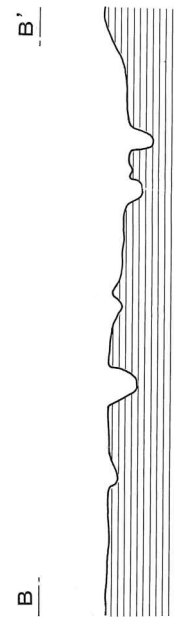
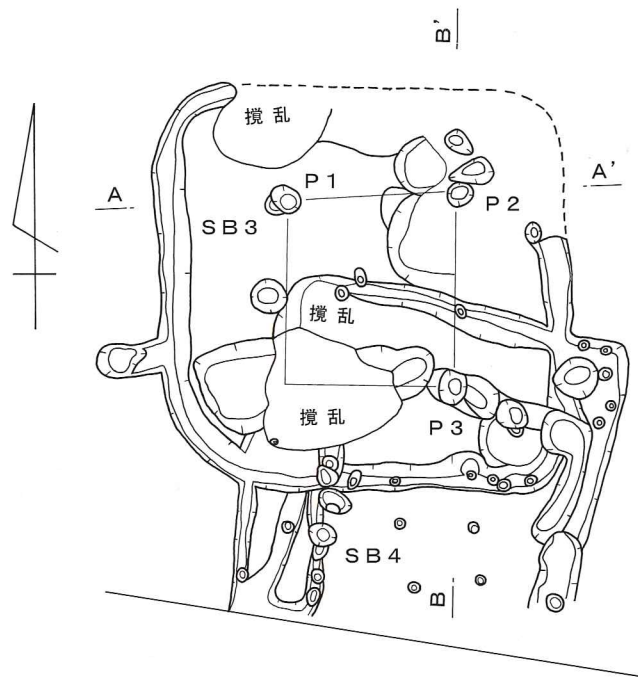
レベル=15.5m



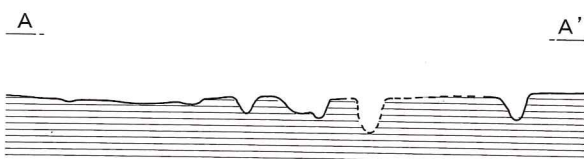
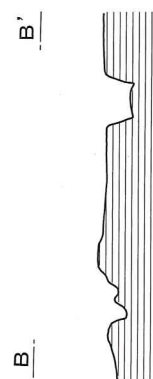
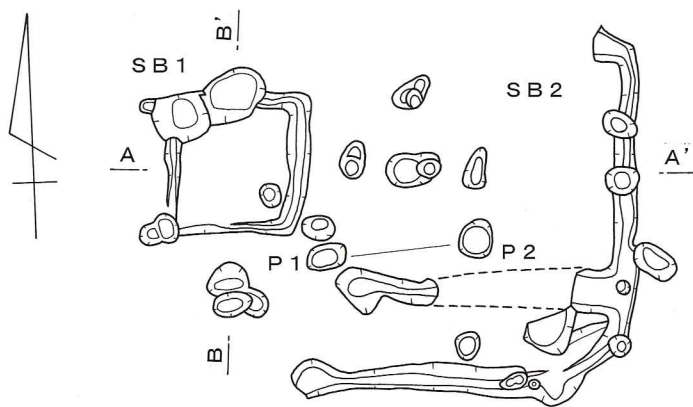
3号方形周溝墓壺棺

レベル=15.0m





SB 3 ・ 4

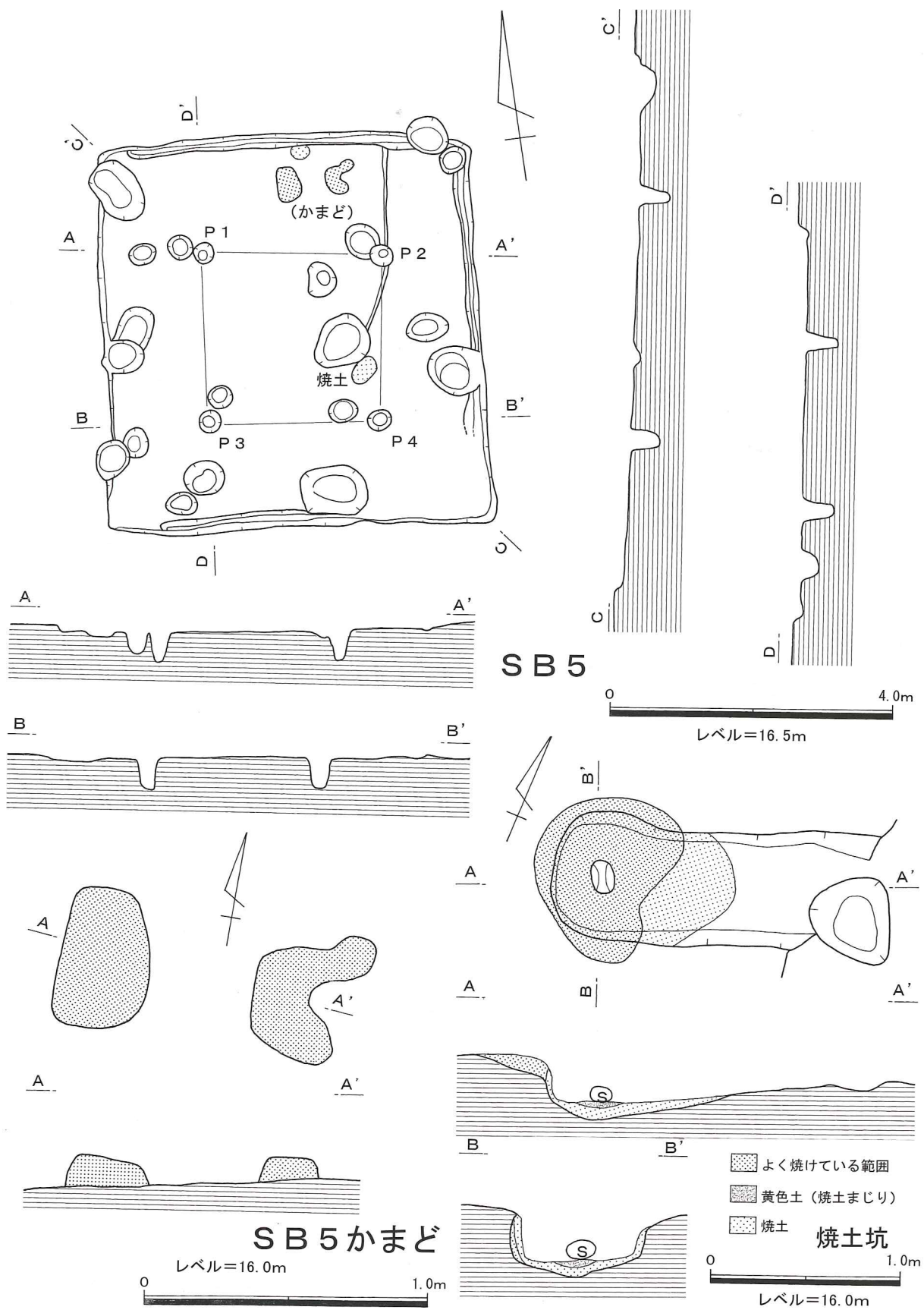


SB 1 ・ 2

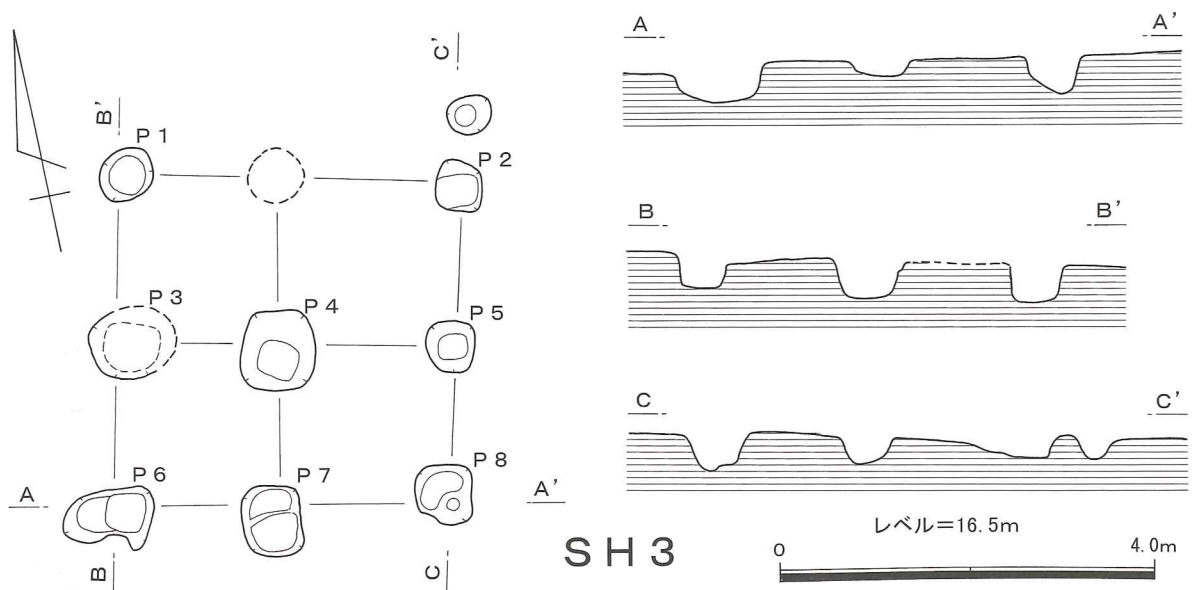
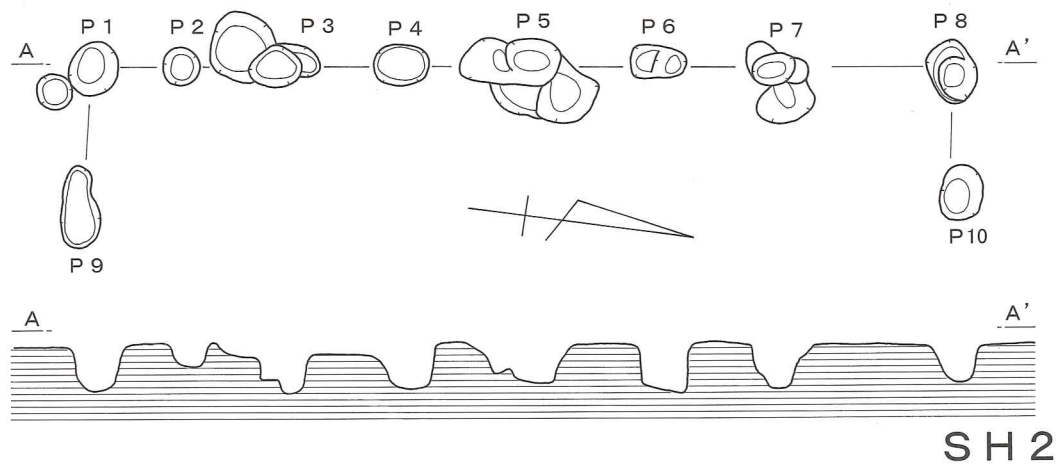
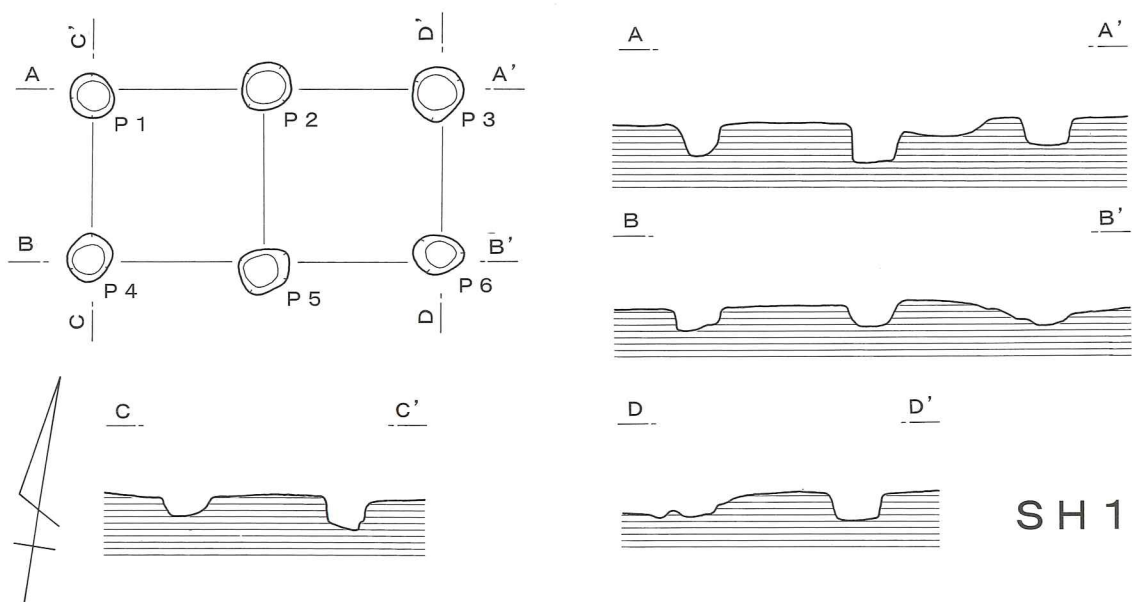
レベル=16.5m



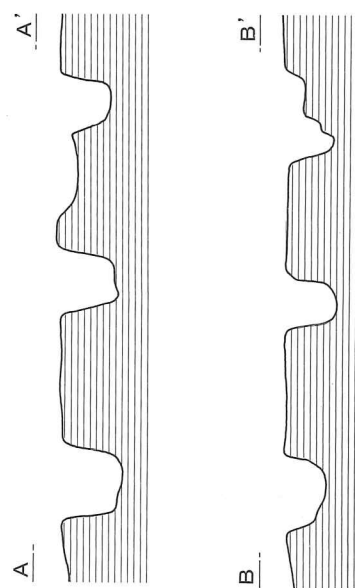
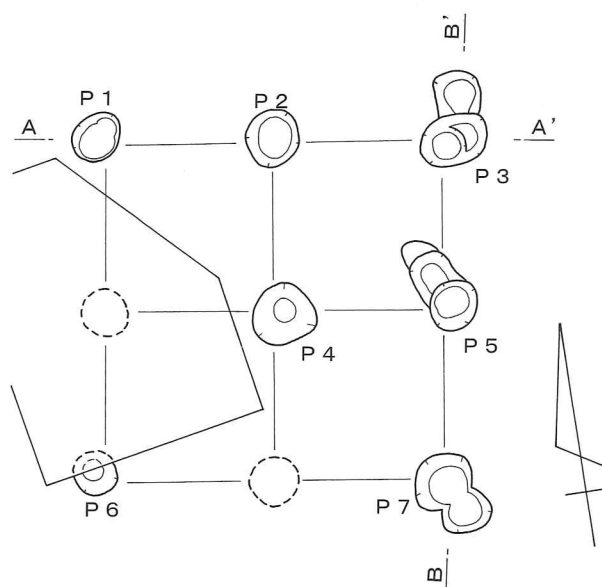
第41図 SB 1 ～ 4 実測図



第42図 SB5・焼土坑 実測図

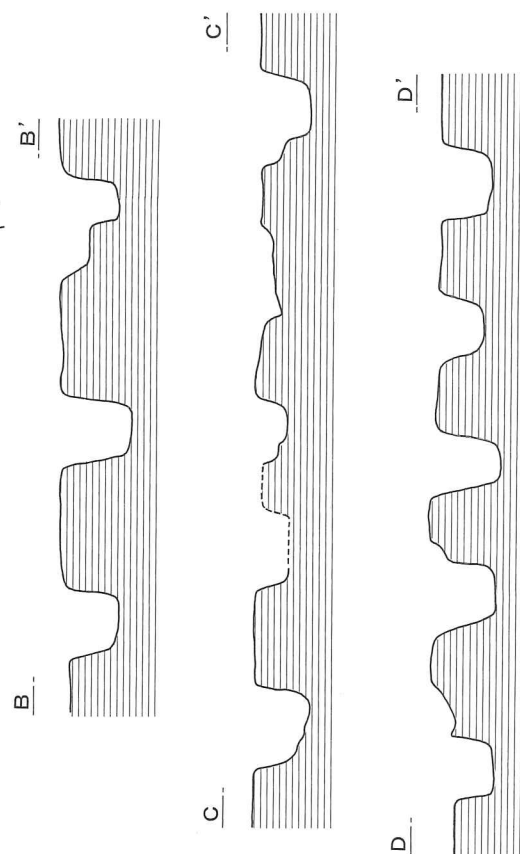
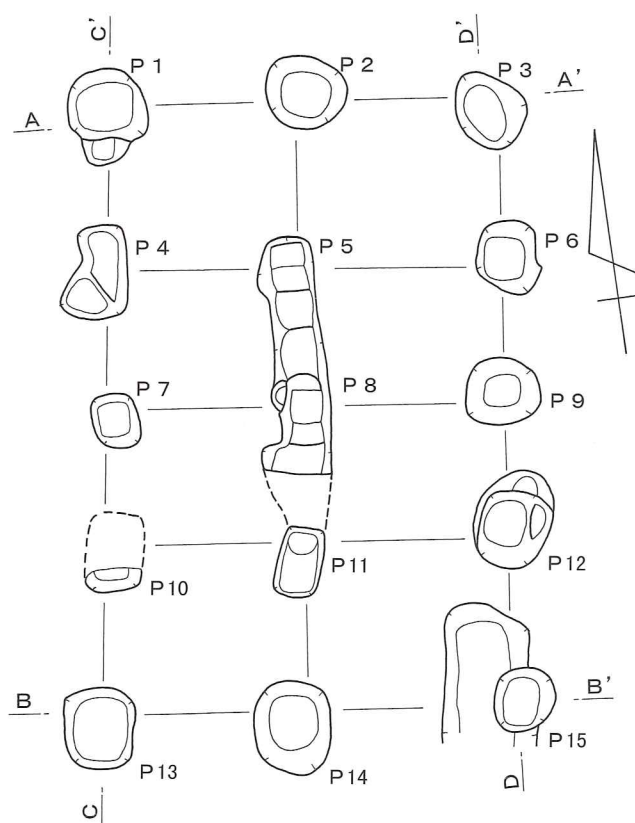


第43図 SH 1 ~ 3 実測図



レベル=16.5m

SH 4

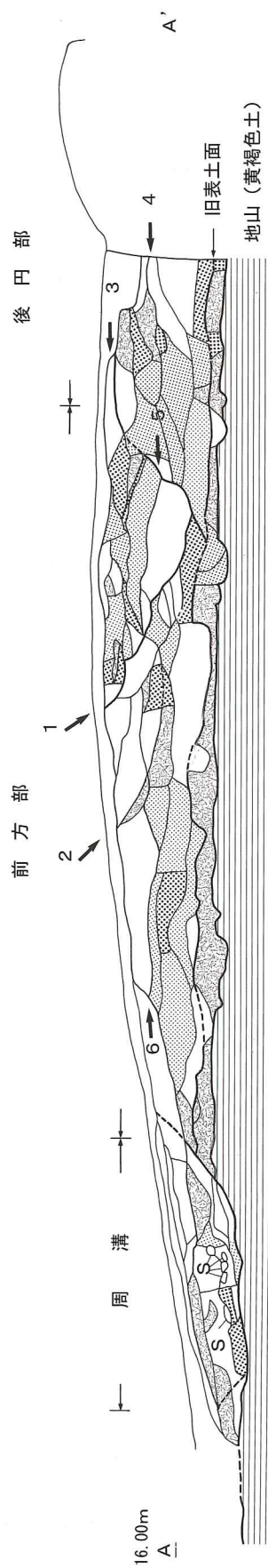


レベル=16.5m

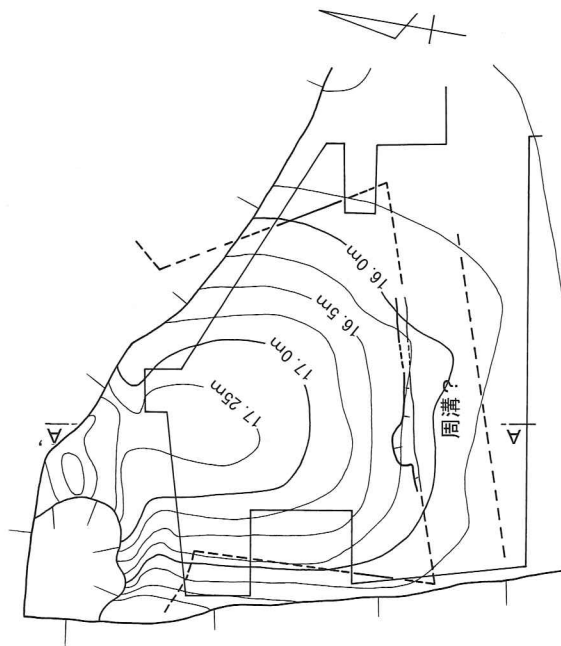
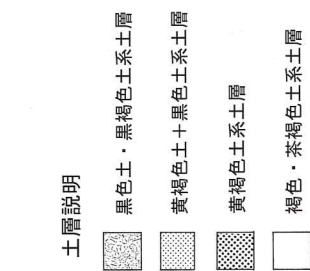
SH 5

0 4.0m

第44図 SH 4・5 実測図



前方断面图

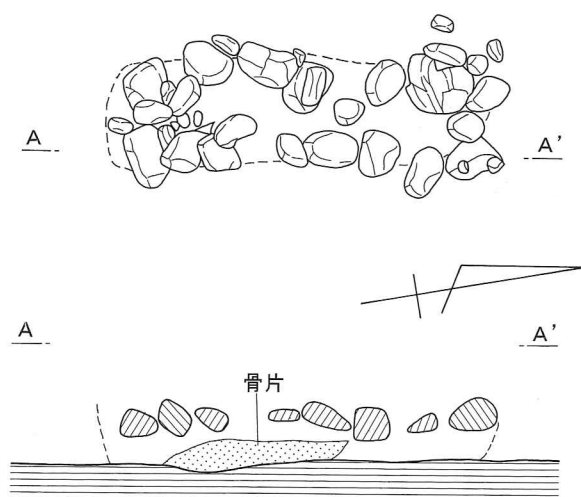


調査平面・地形合成図

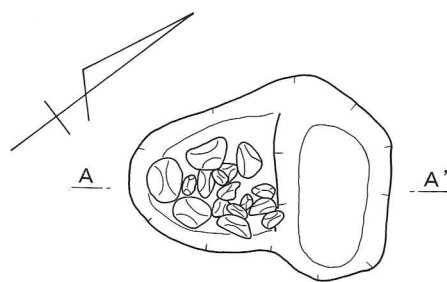


地形図

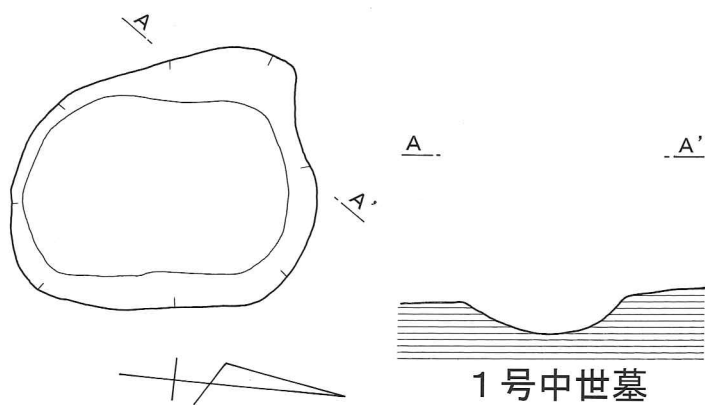
第45図 狐塚古墳実測図



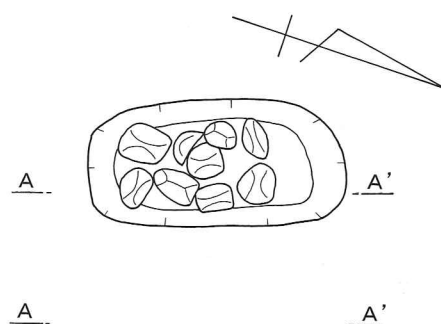
4号中世墓



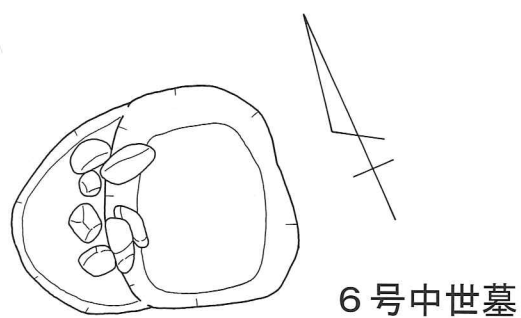
5号中世墓



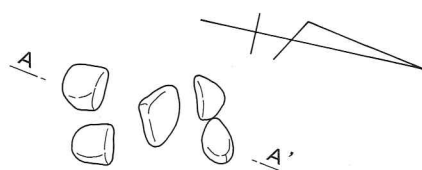
1号中世墓



3号中世墓



6号中世墓



2号中世墓

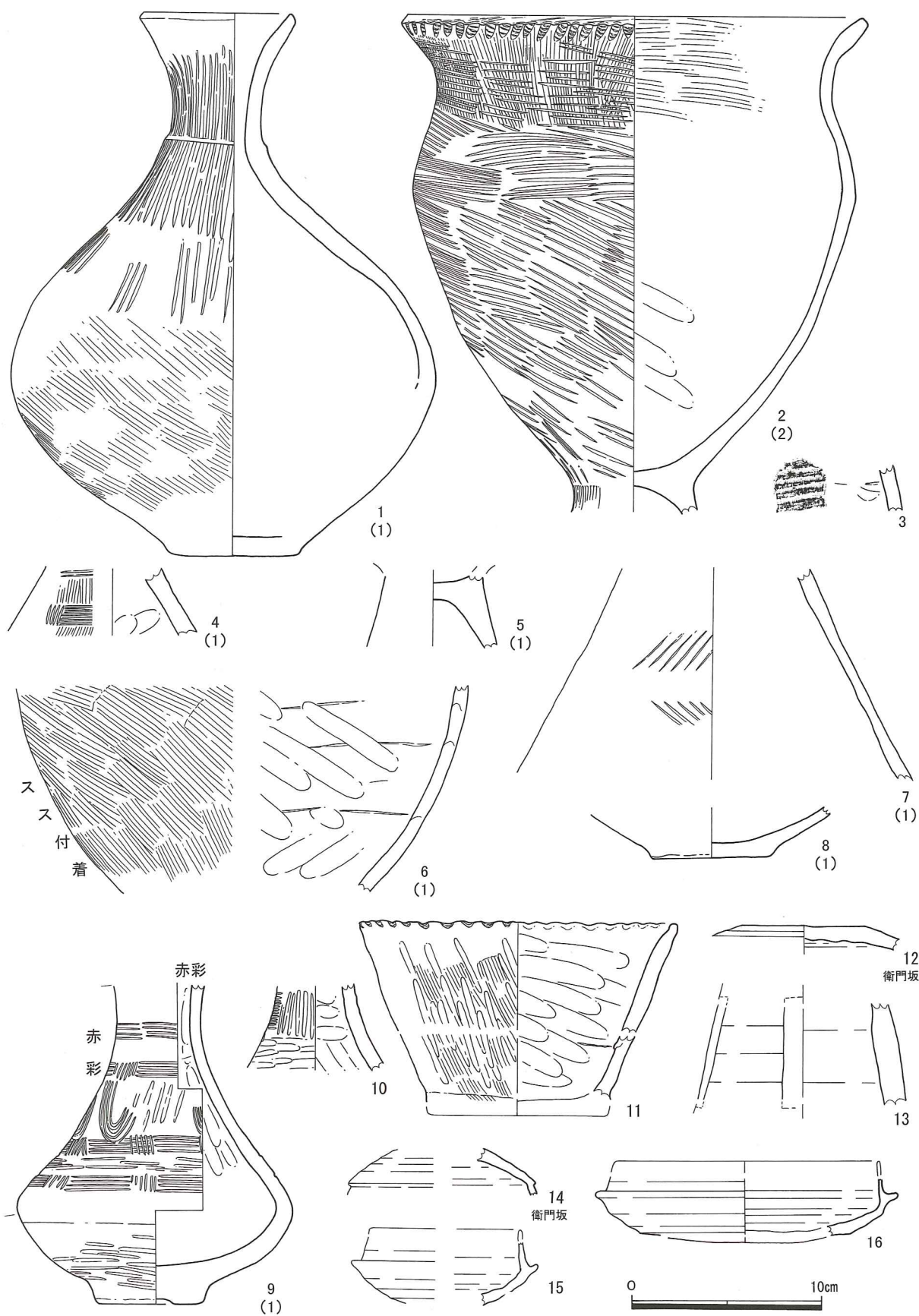


7号中世墓

レベル=15.5m

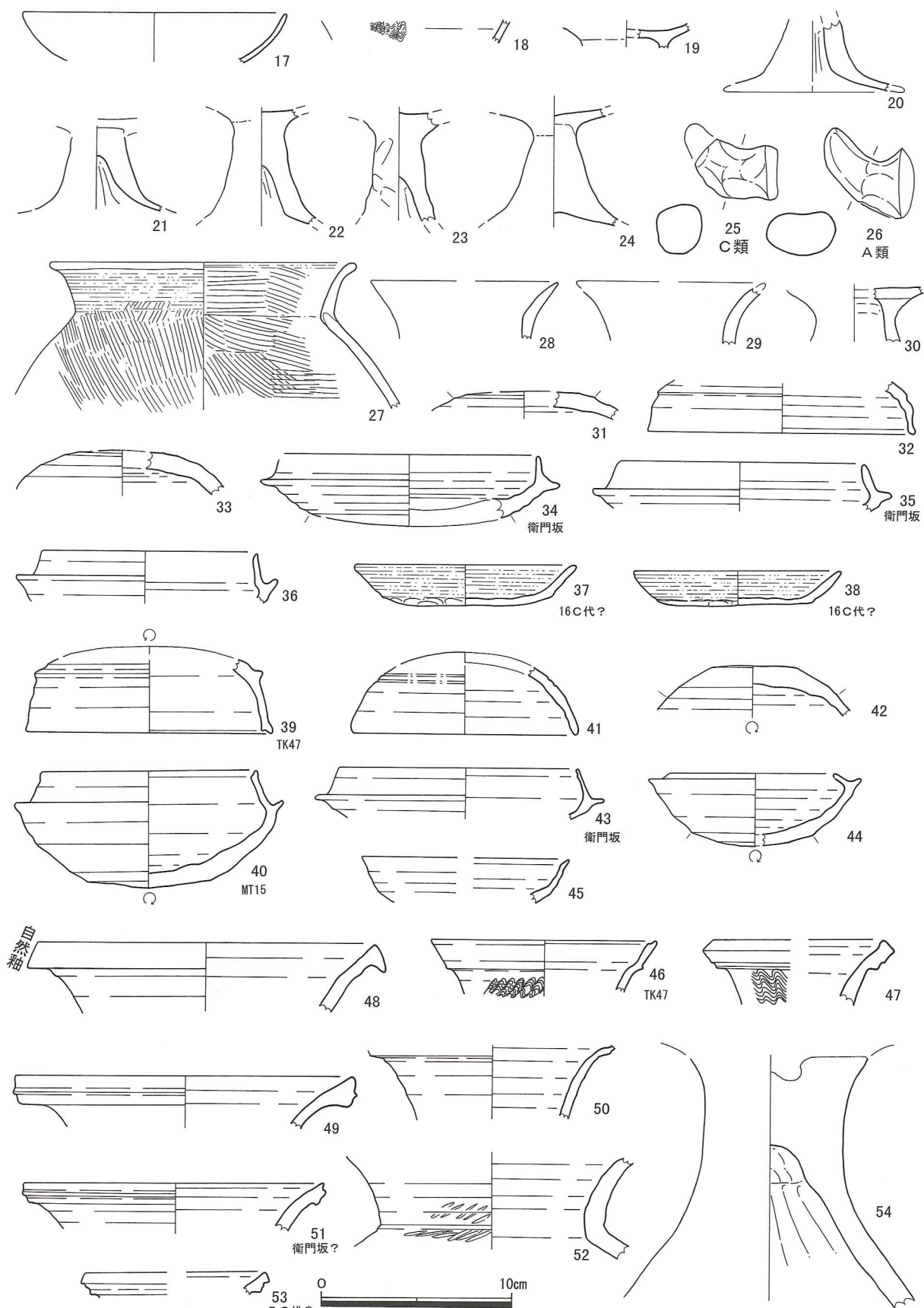
0 1.0m

第46図 1～7号中世墓 実測図



第47図 土器実測図1

- | | |
|------------------|----------------|
| 1 = 5号周溝墓 西溝 | 9 = 9号周溝墓 東溝 |
| 2 = 5号周溝墓 南溝 | 10 = 13号周溝墓主体部 |
| 3 = 6号周溝墓 | 11 = 13号周溝墓 西溝 |
| 4 ~ 6 = 7号周溝墓 南溝 | 12・13 = SB 3・4 |
| 7・8 = 7号周溝墓 西溝 | 14 ~ 16 = SB 5 |



第48図 土器実測図 2

17~27=SB 5

28~30=SH 1・P 2

31・32=SH 3・P 5

33=SH 4・P 3

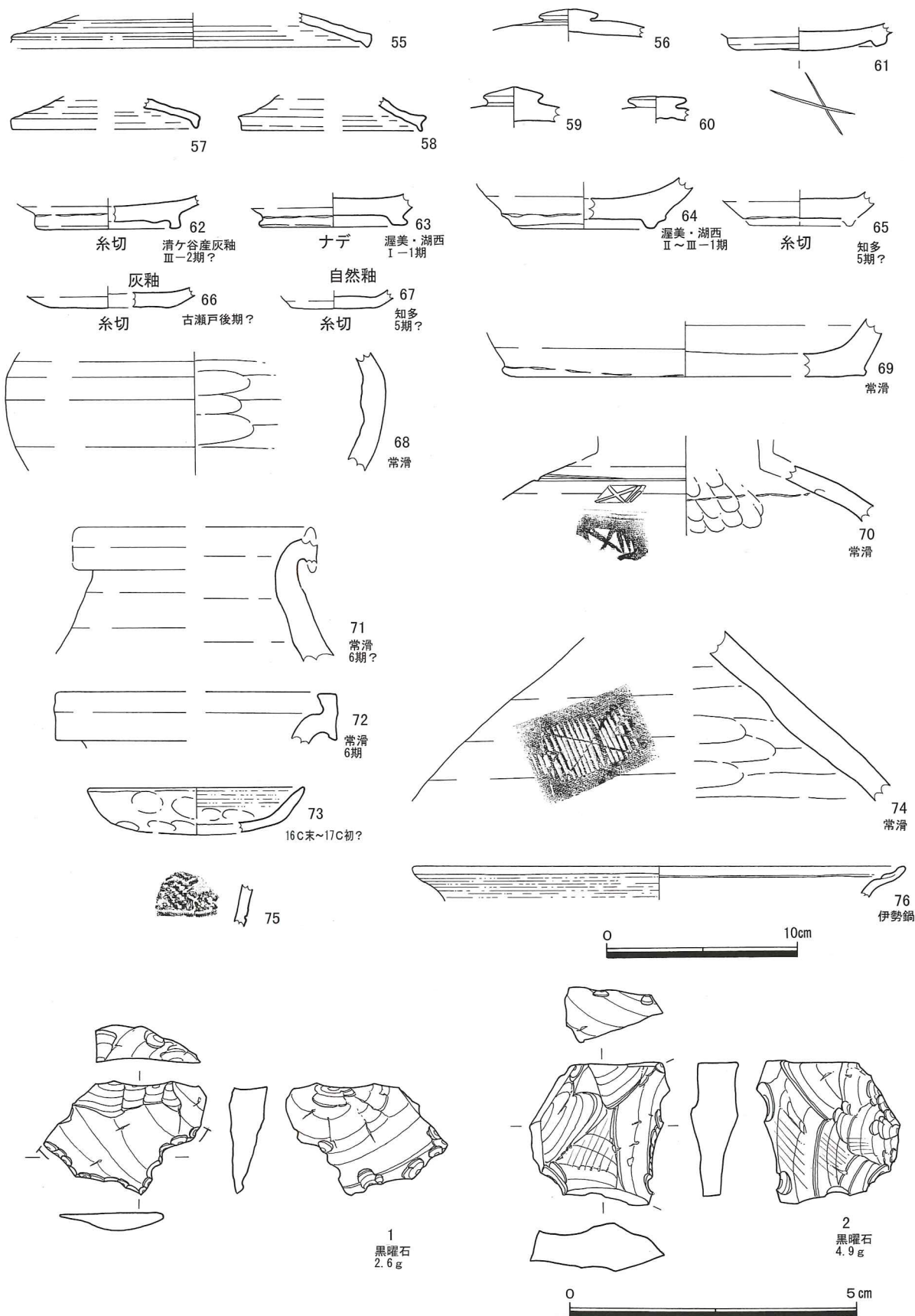
34=SH 5・P 7

35・36=SH 5・P 1

37・38=6号中世墓

39・40=狐塚周溝出土

41~54=包含層



第49図 土器実測図3・石製品実測図1

55~76=包含層
1=墳丘内
2=SB5

第7章 ま と め

今回調査した第7次調査区及び第1次発掘調査区では、弥生時代中～後期、古墳時代後期の良好な遺構、遺物を確認することができた。本章では時間制約もあるので、主に3時期の遺構についての評価を記述するに留め、まとめに替えたい。

1. 弥生時代中期集落の様相

第1次調査区で方形周溝墓9基が、第7次調査区で住居2棟と土坑1基が検出された。住居は白岩式の新段階、土坑は古段階に該当しそうである。周溝墓については土器から見ると、白岩式新段階が主体となるが、白岩式古段階のもの、混入品であると思われるが7号墓西溝から嶺田式壺の破片も出土していることから、周溝墓群の築造時期幅については中期中葉～後葉を想定しておきたい。

中期の方形周溝墓の平面形態は東海地域に特徴的な、四隅に陸橋をもつ形態である。その群構成については、かつてI～V群の単位群と墓道A・Bを想定したことがあった(松井一明 1992)。それと同じ内容のものを、第50図に示した。当時の担当者の川井正一氏の記録によると、溝内の土層の堆積状況から築造順位が推定されている。まとめると、各单位群で最初に築造された基点墓は8号墓、10号墓、12号墓と考えられ、随時墓道に添って重列状態で造墓を行ったと想定してみた。溝は前段階のものをあまり再掘削しないでそのまま利用した結合式で行うことが特徴的である。このように墓道を意識した重列状態で造墓を繰り返す方法は、東海地域のなかでも特に遠江で特徴的な群構成の在り方である。ただし、隣接し合う方形周溝墓が溝を再利用し合う結合式が第1次調査地点での方形周溝墓の造墓方法と見られたが、第5・6次調査地点の方形周溝墓では全く溝を再利用しないやり方も見られるので、掛之上遺跡の中でも一様な群構成の在り方を示していない。この違いは、第5・6次調査地点の方形周溝墓での大きさが一様でないことと関係しそうである。均質的な大きさの方形周溝墓からなる群構成は、第1次調査地点の重列配置の方法(山下・掛之上遺跡型群構成)、駿河地域で見られたやや突出する大きさをもつ方形周溝墓を中心として団子状にまとまる方法(瀬名遺跡型群構成)に分けて考えたことがある。後者の群構成が第5・6次調査地点の方形周溝墓群になれば、遠江で最初に確認できる瀬名遺跡型群構成の方形周溝墓群となるが、調査面積が狭く確実なところは分らない。今後の周辺の調査に期待したい。

さて、集落の周りに居住域と墓域を区画するであろう環濠については、今のところ中期の遺構が発見された第1・2・6・7次調査地点の何れの調査地点でも発見されていない。また、大門遺跡でも第2・5次調査地区にて中期集落の端と思われる場所を調査しているが、環濠の発見はなかった(袋井市教育委員会 1983・1990)。現状では掛之上遺跡、大門遺跡ともに環濠集落とはいえないが、何れの調査面積もさほど広いものではないため、現段階では確実に非環濠集落だとは断定できない。

静岡県下の中期の環濠集落は、中・東遠江の白岩式土器分布圏と中・西駿河の有東式土器分布圏での確実な環濠集落の発見例はないのに対して、西遠江?や伊豆では環濠集落が見つかってきているので、中間地帯として中・東遠江～中・西駿河の中期集落が環濠集落化しない理由を示すことは難しい(松井一明 2001)。あえて推測すると、白岩式土器の成立自体が凹線文土器の影響はほとんどなく貝田町式土器との関連の中で考えられるため、東海・南関東地域で環濠集落が安定的に出現するIV期段階において、当地域が西からの影響をあまり受けなかったことが関係していると考えられる。

以上、中期集落については墓域と居住域が確認され、掛之上遺跡が墓域で大門遺跡が居住域になる考え方は修正をしなければならなくなった。また、掛之上遺跡と大門遺跡が環濠集落になるかならな

かの問題については、静岡県下全体の問題となるため、今後の検討課題としておきたい。

2. 弥生時代後期集落の様相

今回の第7次調査区では、後期の遺構は竪穴住居、掘立柱建物、土坑などが発見されたことから、後期段階では居住域であることが判明した。後期の墓域は、第1次調査区において、中期の方形周溝墓と重複しないで、中期の墓域のさらに西側に4基の方形周溝墓と1基の壺棺墓が見ついている。後期の墓域に関しては、第5・6次調査区でも見ついているが、この調査地点では明確な住居遺構は発見されなかった。しかしながら、第5・6次調査区でも後期の柱穴も発見されているし、中期と後期の方形周溝墓は重複しないので、第1・7次調査区と同じ構造をなしていると推測される。

さて、ここで第5・6次調査区の状況が注目される。第5・6次調査区では、第7次調査区で発見されなかった居住域と墓域を区画すると考えられる溝が発見されている。溝の形態は断面V字とはならない浅い断面U字溝になるため、一概に環濠と断定するには躊躇する溝である。今のところ墓域と居住域の区画溝（環濠？）と考えた場合、この区画溝は中期と後期の方形周溝墓の間をかいくぐるように掘削されていることから、後期の居住域の中に中期の墓域を取り込んでいたことになり、明確に居住域と墓域を分けている第1・7次調査区の状況とは異なってしまう。この点については、後期段階においても掛之上遺跡が非環濠集落となるか確定できず、大きな検討課題として残った。

第5・6次調査区の区画溝の時期は、後期前半新段階の土器が出土している。中・東遠江においては後期前半新段階の環濠集落は僅かに袋井市鶴松遺跡で確認され、西遠江でも浜松市伊場遺跡では環濠集落化しているが、今のところ後期後半と比較すると確認例は少ない。このことから、後期前半新段階では中遠江においても西遠江からの政治的な緊張関係の影響を受けて環濠集落が成立していた可能性は指摘できるが、遠江地域の全ての拠点集落で環濠集落化した状況にはなさそうである。掛之上遺跡は鶴松遺跡と同様に拠点的な集落と考えられるものであるため、仮に掛之上遺跡が非環濠集落であった場合、その理由を考えることは難しい。この点についても今後の検討課題として残った。

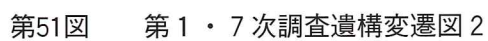
3. 古墳時代後期集落の様相

第1・7次調査で最も注目されるのは古墳時代後期の集落の状況である。第7次調査で6世紀前半の大形柱穴からなる柵列らしい遺構が発見された。第1次調査でも従来古墳時代後期と考えられた掘立柱建物群が知られており、今回の再整理でこれらの掘立柱建物群も、第7次調査区の柵列とはほぼ同じ時期のものと認定できた。第1次調査区の調査時点では柵列は認識されていない。今回残された図面と、写真から比較的大形で深そうな柱穴を選別したところ、第51図のような柱穴列が復元することができた。これを仮に柵列と認定すると、倉庫群と考えられる総柱の掘立柱建物SH3～5と主軸方向と一致する。ところが第7次調査区で検出された柵列とは明らかに主軸方向が異なることから、同一時期の柵列と考えるにはやや問題もある。今回は、第7次調査区の柵列の時期と、第1次調査区の総柱の掘立柱建物の時期が近いこと、全国的に見ても居館区画施設がすべて均整のとれた正（長）方形にならないので、今回は柵列に囲まれた古墳時代後期の首長居館の一部と考えて報告したい。

居館内部の構造は、柵列と方向が一致しない問題点はあるが、中央にやや大形の土間造りの柱間の多い掘立柱建物（第1次調査区SH2）が位置し、西側に総柱の倉庫群、東側に長屋風の掘立柱建物からなると推定される。これが正しい建物配置ならば、一辺42mを測る正（長）方形柵列内部に、掘立柱建物のみからなる居館部が復元できそうである。

静岡県下における古墳時代後期の首長居館の検出例は以外と少なく、袋井市坂尻遺跡で確認された程度である（袋井市教育委員会 1995）。坂尻遺跡では区画地Aとされた居館部において、一辺80mを測るやや不整形の正（長）方形になる区画溝に囲まれ、中央に大形の掘立柱建物3棟、その周辺に

7 次調査区



倉庫と思われる総柱の掘立柱建物2棟、竪穴住居4棟が確認された。存続時期は区画溝等から出土した土器から、6世紀後半～7世紀初頭と考えられた。掛之上遺跡と比較すると、中央に大形の掘立柱建物、周辺に倉庫を伴う点は一致するが、坂尻遺跡では柵列がないこと、竪穴住居を居館内部に含むことである。坂尻遺跡での竪穴住居を厨房施設と考えると、掛之上遺跡では長屋風の掘立柱建物がそれに代わるものであろうか。柵列については、坂尻遺跡では低湿地であることから、排水や洪水を想定した区画溝を採用し、高燥の地である掛之上遺跡ではあえて区画溝ではなく、柵列で区画したと推定される。5世紀後半の豪族居館として著明な浅羽町古新田遺跡でも、明確な区画溝（環濠）は報告されていない（浅羽町教育委員会 1992）。古新田遺跡の立地も、掛之上遺跡と同じ高燥の地の利を示している。古新田遺跡の区画施設は何であったのだろうか、今後の検討課題である。

さて、この居館の造営主体者は、居館の存続時期がほぼ6世紀前～中頃の短期間に限定されることから見て、大門大塚古墳（袋井市教育委員会 1987）か御所森古墳（袋井市教育委員会 1993）の被葬者が考えられる。古新田遺跡でも、5世紀後半の短期間に限定された時期を示すことから、せいぜい1～2世代の首長居館と考えられている。ただし、坂尻遺跡と比較すると全体に建物規模が小さいこと、中央建物が庇付建物にならない？ことから、今回想定された居館部については、現段階においては大門大塚古墳か御所森古墳の被葬者自体の居館というより、その関係者の居館と見るべきであろう。この問題については、今後の検討課題としておきたい。

居館が廃絶され6世紀後半になると、全体に竪穴住居が建てられるようになる。ただし、第7次調査区SB1・2は、通常の竪穴住居とは考えられず、排水溝を伴う竪穴ないし平地式住居と考えられる建物であるが、遠江の事例からだて類例はない。どのような建物構造になるかは全国的な類例調査が必要となつてこよう。また、各住居跡を区画する溝の問題、竪穴住居と掘立柱建物との組み合わせの問題などが残されているが、調査面積が限られているため明らかにはできなかった。

6世紀後半段階の掛之上遺跡の周辺部では地蔵ヶ谷横穴群や長者平古墳群などの本格的な群集墳が築造を開始し、第7次調査区周辺地域はこれらの群集墳を築造した構成員の居住域になったと考えられる。今後は、6世紀後半の首長が居住したであろう居館の発見が期待される。

以上、第7次調査区では、静岡県下であり良く分かっていない古墳時代後期の首長居館の様相、その後の集落の変化の一端をかい間見ることができた。周辺の調査が進めばさらに集落構造が明らかとなるであろう。

掛之上遺跡の再発掘調査が本格的に始まった2年目にあたり、数々の新知見がえられた。とくに第1次調査で従来問題点がいくつか示されていたが、今回の第7次調査を進めていくなかで、第1次調査区で得られた資料と共に考えると、弥生時代の中・後期の拠点集落の内容、遠江ではあまり知られていない古墳時代後期集落の内容と首長居館の様相の一端を明らかにすることができた。道路幅という部分的な調査でありながら、これだけの貴重な成果をあげることができたのは、「掛之上遺跡が袋井市あるいは静岡県の歴史を知るうえで極めて貴重な遺跡である」ということである。つまり、今後区画整理事業に伴う発掘調査を更に進めていくと、重要な発見が期待できる遺跡であり、その考古学的内容が分らないと、袋井市や静岡県の原始古代の歴史が解明されなくなると言っても過言ではない重要遺跡であると明言しておきたい。今後関係者のご協力を得ながら慎重に発掘調査を進めていきたい。また最後になりましたが、本発掘調査が円滑に行うことができましたことは、ひとえに区画整理課の職員、地元関係者の皆様方のご協力、ご理解によるものです。ここに記して感謝の意を表したいと思います。

【 参考文献 】

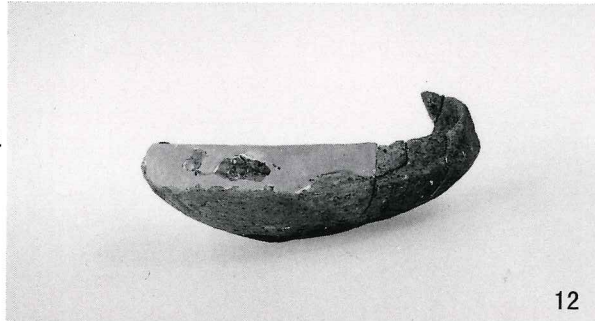
- 狐塚古墳発掘調査委員会 1976 『狐塚』(内部報告)
- 袋井市教育委員会 1983 『掛の上遺跡Ⅱ－袋井市掛の上遺跡第2次発掘調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 1995 「掛之上遺跡第3次調査報告」『大門遺跡Ⅴ－大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書－』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 『掛之上遺跡－平成9年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 2000 『掛之上遺跡－平成11年度袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 1983 『大門遺跡－大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 1988 『大門遺跡－袋井市大門遺跡第4次発掘調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 1990 『大門遺跡Ⅴ－大門Ⅰ遺跡第5次発掘調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳－昭和61年度基礎資料収集調査報告書－』
- 袋井市教育委員会 1993 『袋井の前方後円墳－袋井の首長墓を考える－』
- 袋井市教育委員会 1995 『坂尻遺跡－遺物・総括編－』
- 袋井市教育委員会 1996 『高尾向山遺跡Ⅱ』
- 浅羽町教育委員会 1992 『古新田遺跡Ⅰ(遺構編)』
- 林 博通 1997 「「大壁造り建物」の発見・経緯・問題点」『穴太遺跡発掘調査報告書』 滋賀県教育委員会他
- 佐野五十三 1990 「清郷型甕の研究－形態から見た古代末の東海地方－」『静岡県埋蔵文化財調査研究所紀要』Ⅱ 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 白澤 崇 1993 「遠江における主要古墳の築造時期」『袋井の前方後円墳－袋井の首長墓を考える－』 袋井市教育委員会
- 中野晴久 1994 「生産地における編年について」『常滑焼をおって資料集』 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
- 松井一明 1992 「考察－静岡県下における方形周溝墓の出現過程について－」『宇佐八幡神社境内遺跡』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1992 「考察－中遠地域の堅穴住居の編年の様相－」『鶴松遺跡Ⅴ』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』N o 25 静岡県考古学会
- 松井一明 1995 「古墳時代の掘立柱建物について」『古墳時代の集落』 静岡県考古学会
- 松井一明 1995 「古墳時代後半期土器編年」『坂尻遺跡－遺物・総括編－』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1998 「静岡県における方形周溝墓の埋葬主体部について－木棺を中心として－」『静岡県考古学研究』N o 30 静岡県考古学会
- 松井一明 2001 「東西日本弥生集落の交差点－東海の弥生集落－」『弥生時代の集落』 学生社

写 真 图 版

図版 1

12~158=第7次調査出土

12・21=SD 2
(SB 1)

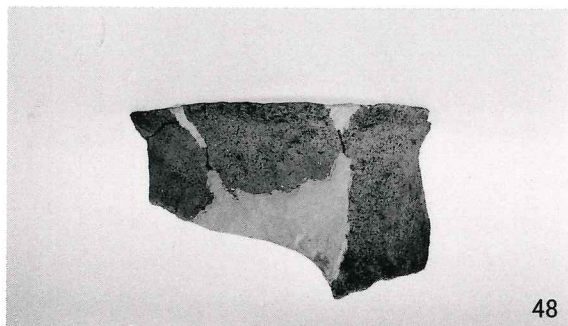


12



21

48=SB 6・P 4



48



50

50・51=SX 1-1

89=SK 5



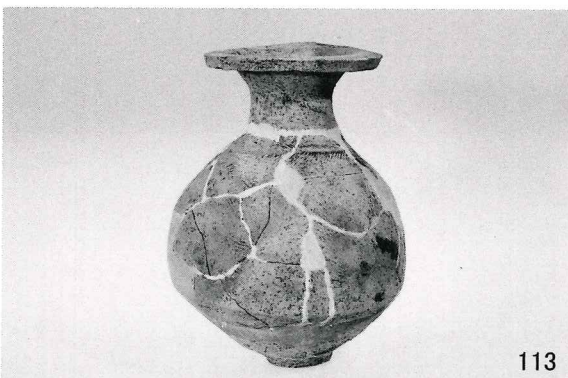
51



89

113=SK 12

127=SK 13



113



127



148



148



155

148~158=SK 22

遺物写真(1)

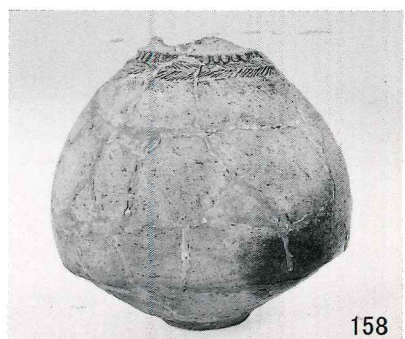
※No.は図版No.と一致する



156



157



158

図版 2

163~238=第7次調査出土

163・166=S K 22

196=S K 39

198=S A 1・P 1

201=S A 1・P 3

204=S P 113

209=S P 142

213=S P 458

238=包含層

1~9=第1次調査出土

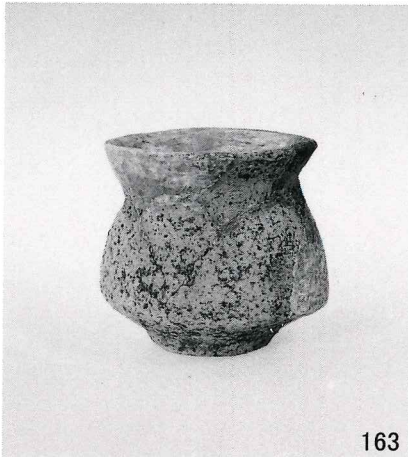
1=5号周溝墓
西溝

2=5号周溝墓
南溝

9=9号周溝墓
東溝

遺物写真(2)

※No.は図版No.と一致する



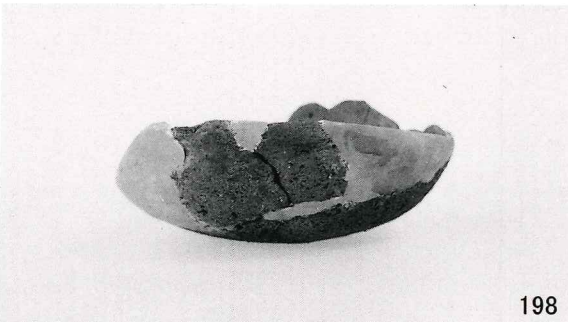
163



166



196



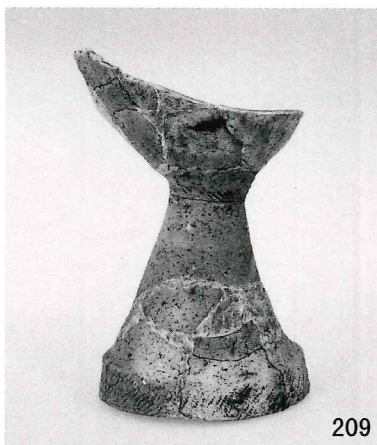
198



201



204



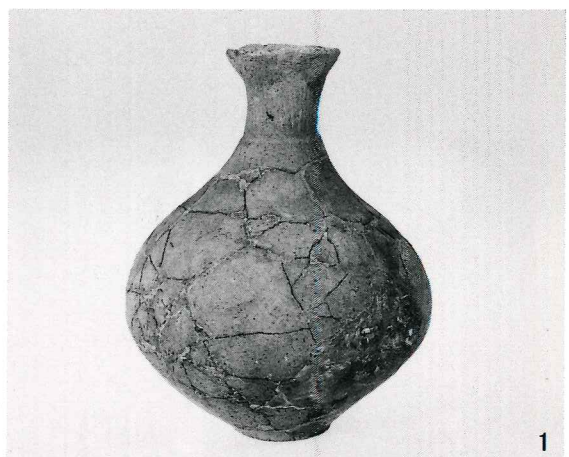
209



213



238



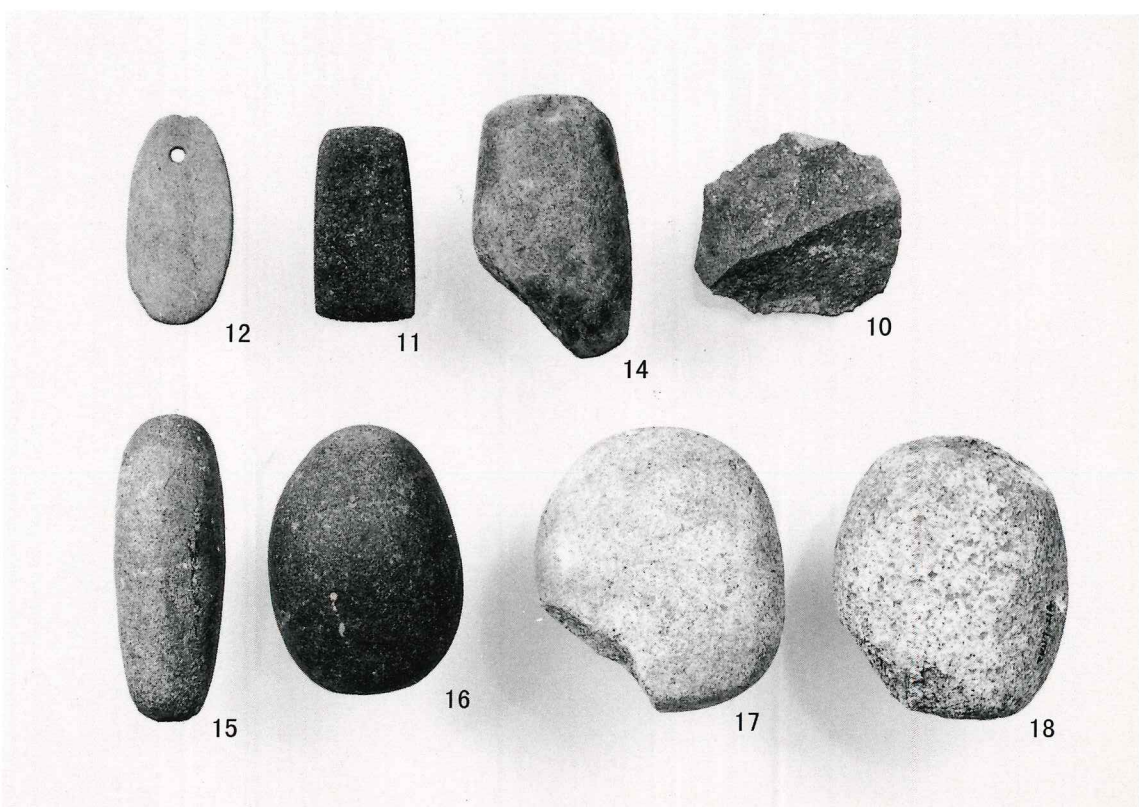
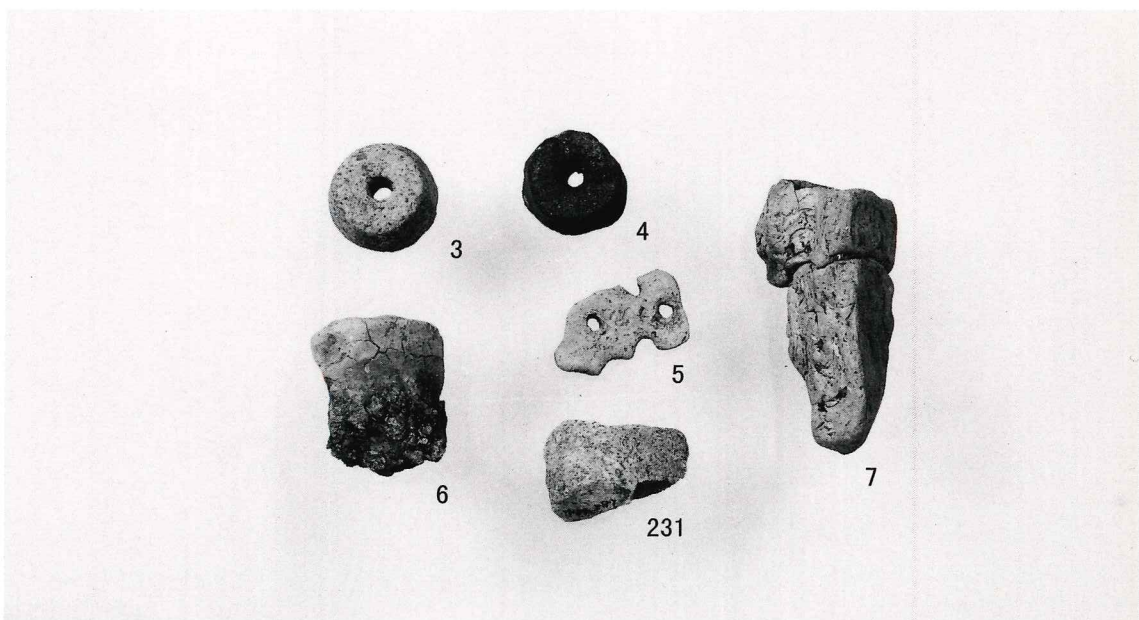
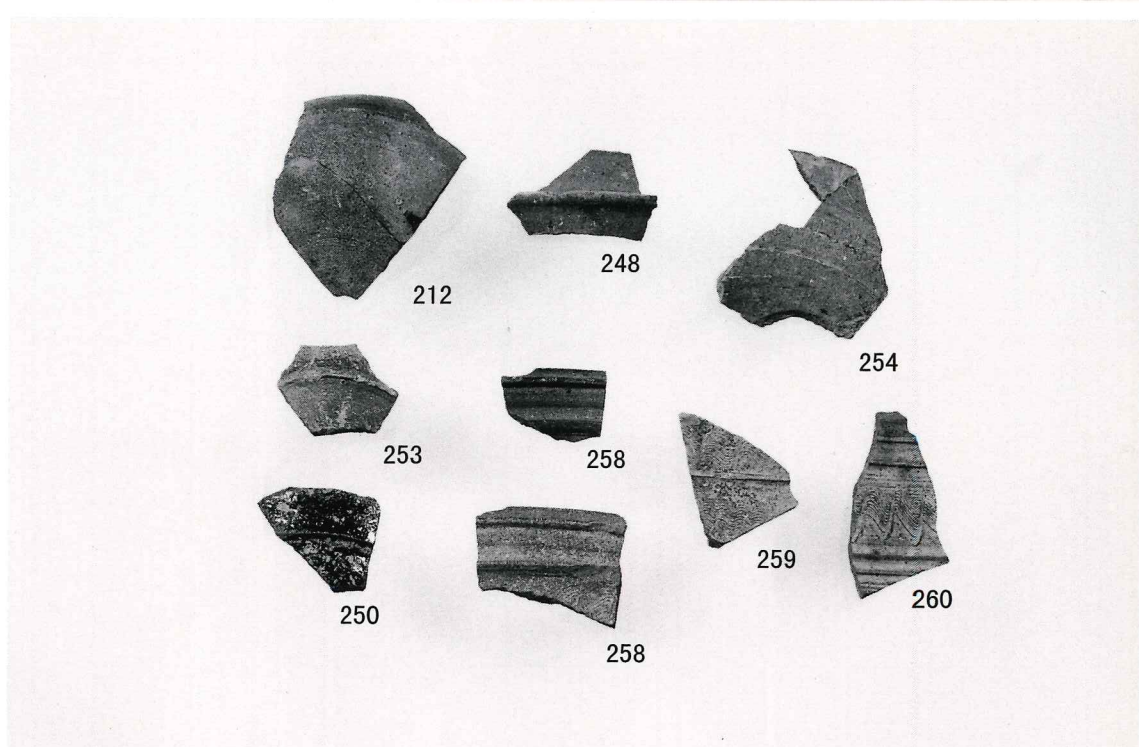
1



2



9



第 7 次調査出土

遺物写真 (3)
 (土器・金属製品・石製品)
 ※No.は図版No.と一致する

報告書抄録

フリガナ		カケノウエイセキ ホンブンヘン				
書名		掛之上遺跡Ⅶ 本文編				
副書名		袋井市駅前第二地区土地画整理事業に伴う発掘調査報告書 2				
編集著者名		松井一明				
編集機関名		袋井市教育委員会				
所在地		〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地1 ☎0538-44-3141				
発行年月日		2001年3月26日				
フリガナ 所収遺跡名		カケノウエイセキ 掛之上遺跡				
フリガナ 所在地		シズオカケンフクロイシタカオ 静岡県袋井市高尾				
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 44′ 29″	137° 55′ 51″	20000501	1300.0m ²	袋井市駅前第二地区土地画整理事業に伴う小野田柳原線道路建設
22216	151			～ 20010326		
所収遺跡名		種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
掛之上遺跡		集落跡	弥生時代 中・後期	竪穴住居跡 掘立柱建物 柱穴群多数 土坑	土器・石器	弥生時代 居住域
			古墳時代 中・後期	竪穴住居跡 掘立柱建物 柵列 柱穴群多数 土坑	土器(土師器・須恵器)・鉄器	有力集落 (豪族居館跡?)
			近世	地割溝	陶磁器	

袋井市駅前第二地区土地画整理事業に伴う発掘調査報告書 2

掛之上遺跡Ⅶ

— 本文編 —

発行年月日 2001年3月26日

編集・発行 袋井市教育委員会

袋井市役所建設経済部区画整理課

〒437-8666 静岡県袋井市新屋1-1-1

印刷 松本印刷株式会社

〒437-0022 静岡県袋井市方丈3丁目3-11